
世界の寵児

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の寵児

【Nコード】

N7348S

【作者名】

もち

【あらすじ】

私こと高橋万理歌は、他人より少しだけ運がいい。だから、この先に何が待ち受けているのだとしても、それは、私の不幸ではない。

幸運少女の異世界トリップ物語。

逆ハー風ですが、お相手は男女問わず、人外ばかりでそのうえ変態です

私こと高橋万理歌は、他人より少しだけ運がいい。

楽しみにしていたお出掛けの日に雨が降ることなんてなくて、晴れ女なのが自慢で。

唐揚げが食べたいな、明日作ってもらおう、なんて思っていたその日の夕食は唐揚げだったり。

犯罪に巻き込まれたこともなければ、大きな怪我だったことはない。

それらは本当に些細なことで、偶然と呼べるくらいの幸運だ。

だけど、私は自身の運の良さを疑ったことがない。決定的な不幸が私の身に起こるはずなんてないと、幼い子どものような万能感を、17才になった今でも捨てられずにいる。

だから、私の体に起こったこの不可思議な現象にも、驚き、困惑こそしたけれどたいして不安を抱かなかった。

ふと目にした指先がガラスのように透けていくのも、手にした通学鞆の感触がなくなっていくのも、世界から私が消えていくのも。

私は、他人より少しだけ運がいい。

だから、この先に何が待ち受けているのだとしても、それは、私の不幸ではない。

私の目の前にはやたらと飾りのついた服を着た大男がいる。30代も後半だろうか。落ち着いた雰囲気の大男だ。見たことがないほ

ど青白い皮膚の色に、つやつやキラキラとした紫の髪の大男である。そう、大男だ。尋常でないほど大きい。かがんで膝を床につけているのに、そのうえ腰をかがめて背を丸めているのに、彼の頭があるのは立っている私の頭より上なのだ。

身長だけじゃなく、身幅もありすぎる。私の倍はある。いや、3倍くらいいくかもしれない。どこの巨木か。

彼はにっこりと笑った。多分、笑顔だったのだと思う。口から牙が見える。犬歯とかそんなかわいらしいものじゃない。サーベルタイガーもかくやといわんばかりの立派なものだ。そんな素敵なものを見せ付けられて、私は思った。

食われる、と。

戦慄の笑顔を目の前に動けずにいる私に、彼は私に向かって話しかけてきた。想像より穏やかな声だが、残念ながら何を言っているのかはわからない。

大きな手が私に迫ってくる。足は動かない。青白い手は、私の頭の上に何かを置いた。されるがままにしていると、唐突に、彼の言葉が理解できた。

「大丈夫。いい子だ。言葉をわかるようにしているだけだから、落ち着いて」

びっくりだ。見たこともないほど大男で、肌の色も不健康の範囲を超えた青白さで、髪の色だつてどこのおしゃれなおばあちゃんかと思うような紫色で、牙がギリリとする獰猛な笑顔だけど、いいひとっばい。

「あの、急にわかるように、いつてることとか……。私のは、わかりますか？」

少し声が震えてしまった。ひどくのどが渴いている気がする。目の前の大男は、私の頭にのせていた手をするすると、髪をたどって肩を通って腕から手まですべらせた。

私の手が彼の手の上にのっている。今までいたって普通だと思っていた私のこの手が、ひどく小さく、赤く見えて、生まれたての赤ちゃんにでもなった気分になる。

「わかります。痛み、違和感、少しでも気になることがあればすぐにお知らせください。

この世界へようこそおいでくださいました。

私はヘルベルクランと申します。いかなるときもお仕えし、どんなものからお守りします」

私の手は持ち上げられ、両手に包まれた。

とりあえず私を食べたいわけではないようだ。さすが私。運がい

へるへる……なんだっけ。まあ、あの、聞きなれない響きを持つ名前の、目の前にいる大男さんは、しっかりと私の右手を捕まえ、笑顔と思われる表情のまま、じっと私のほうを見ている。あまりに見つめられているので、彼が濃い紫色の瞳をしていることに気が付いたが、そんなことより現状説明をしてはもらえないものだろうか。

「あの、へる……ヘルヘルさん」

「ヘルベルクランです。どうぞ、ヘルとお呼びください」

名前を間違えてしまったにもかかわらず、気を悪くしたそぶりもない。どうやら温厚な人らしいことに、すこし肩の力を抜いた。

「ヘルさん」

「はい」

「あのですね」

「なんでしょう」

「あの」

「はい」

返事が早すぎる。このままではだめだ。

「な、なんでここにいいのかといろいろしりたいことたくさんあるんですけど、なにからきいていいかわからなくて、わ、わたしっ、ここは」

一気に言い切ってしまったおうと思ったが、混乱した頭では聞きたいこともまとめられなかった。

ヘルさんは私の手をゆつくりと指でなでた。大きな手。大きな指だ。落ち着いて、と言われているかのようだ。息を吸って、吐いて、瞬きをした。

「ここはどこですか？」

一番最初に聞くべきは、多分これだ。

「私たちはここをシンベンデルの社と呼んでいます。

あなたがいた場所とは、つながっていない地にあります」

聞いてはみたけど、何の話がよくわからなかった。言葉は通じてるはずなのにおかしい。しんべるなんとかつてのがまずわからないし、つながってるってのは何のことだろう。

首を傾げる私に、彼は口を閉ざし、牙がようやく隠された。それからしばらく唇がうつすらと、開いたり閉じたりしている。考えるのもうまく出来ない私は、その様子をじっと見ていた。

先ほどは彼のほうが私を見ていたのに、今度は私のほうが彼を見ている。なんだか少しおかしくて、ちよっとだけ笑えた。

「お寒くはありませんか」

それが、何かをいいたそうにしていた彼の口からようやくでた言葉だった。

そういえば少し肌寒いような。左手で右腕をさする。おかしい。

「うえええ」

素っ裸だ。さっきまで着ていたはずの制服はどこへ行った。そりゃあ変な声も出てしまう。

右手をヘルさんの両手の間から引っこ抜いて、自分自身を抱きしめた。足が震えてぺったりと座り込んでしまう。

「そのお姿のままがあなたのいた世界の常かとも思っただのですが、やはり違ったようですね」

へたり込んだ私に、彼はくるくると大きな白い布を巻きつけた。
一番最初にすべきは、服を着ることなんじゃなかっただろうか。
ヘルさんも気が付いていたなら早く言って欲しい。

なんだろう。近い。近すぎる。ヘルさんに布を巻きつけられた私は、そのまま彼の腕の中に閉じ込められた。ご存知のとおり彼は巨木。木のうろにすっぽりとはまっているかのような安心感が……あるわけがない。そんなものはない。むしろ恐怖心が沸き起こってくる。

やっぱり食べられるのかもしれない。そんな気がする。彼が見せてくれた優しさのようなものはきつとまやかしたんだ。17年とは短い人生だったなあと今までのことを振り返った。陽気なお父さんに、遅いお母さんが、大事に私を育ててくれた。友達だってたくさんいた。周りの人は皆親切で優しくかった。思えば私の運のよさは、そんなところにも発揮されたのかもしれない。こう考えてみれば短い人生ということ以外は幸せだったんじゃないだろうか。

「こんなに震えて……。暖かいところで暮らしていたのですね。すぐに暖めますからお待ちください」

彼は私を軽々と抱え上げた。重くはないんだろうか。いや重いわけがないな。身長がこんなに違うもの。大人と赤ちゃんだもの。ちよつと言い過ぎた。大人と幼児だもの。

ヘルさんと私の距離は先ほどよりも近づいた。体を寄せていないと落ちるからね。べつたりとね。私の現実逃避はまだまだ続きそうです。しばらくお待ちください。

こんにちは。高橋万理歌です。

私は今異世界にいます。お風呂であったまっただぼつかばかりですね。服も着せてもらったわけなんですけど、それがでっかい布をく

るくと巻いて、サリーみたいな、アラビアンみたいな感じで、その上にさらにシヨールというかマントのようなものを羽織まして。足にはふにゃふにゃした布でできたルームシューズらしきもの。どでかいふつかふかのクツシヨンの上に寝そべるように座っておりますね。目の前に躓く大男に飲み物が入ったと思しきコップを差し出されております。

どこの王侯貴族なんでしょう。

のどは渴いてるけど、私はコップを受け取らなかった。

だって、だって……ヘルさんが。いやもうさん付けなんてしたくない。名前でだって呼びたくない。

現実逃避をしている場合じゃなかった。もっと現実を直視してきちんとお断りできていればあんなことにはならなかったはずなのに。

このでっかいのがですね。お風呂にも入るのも、着替えるのも、当然のように全部、やったのです。男の人に。お風呂のとき見ちゃったし。ちらっとだけ見えちゃったし。

せめて女の人ならよかった。このでっかいのにべったりしていたせいで周りの様子はしっかりと見えなかったけど、確かに女の人だっていたのに。

やめよう。17才の夢見る乙女にはあれの記憶は必要ない。

落ち着け。現実逃避はお終いだ。

目を閉じて、深呼吸した。現状把握は大切だ。気持ちを落ち着けたところで、ゆっくりと目を開けた。

でっかいのは、切り分けられた果物を楊枝にさして、それを手に待機していた。

あーん、とか、無理です。無理ですからね。

それは甘酸っぱくて塩気のある、イオン飲料の味だった。

私は動揺をひたすら抑え、まずは飲み物を受け取った。のどが渴いているのは確かで、変な意地を張っていても仕方がない。ごくごく飲み干すと、果物を楊枝ごと手渡された。よかった、あーんとかされなくて本当によかった。

彼の手にあつた時はなんとも思わなかったが、果物も楊枝も大きい。少し小さめのバナナに黒文字が刺さっているといた様子だ。持つとその重さに指がプルプル震える。私の指はいつからこんなにひ弱になつたんだろう。一口かじると、洋ナシの味がした。美味しい。

食べきつて彼を見ると、お皿にきれいに飾り付けられた果物の盛り合わせを私に向かって差し出していた。なんだろう、餌付けでもされてるんだろうか。

私はそれには手をつけず、ぱちぱちと瞬きをしてから彼に話しかけた。

「あの一……なにがどうなってるんですか？」

あまりおしゃべりではないらしい彼と、心の会話だけは姦しい私の、口下手同士のもどかしい会話が始まった。

「そうですね……。なんとお呼びすればよいか伺ってもよろしいでしょうか」

始まった早々くじけそうです。なんて物々しい。

でも、自分が名乗ってすらいなかったことに驚いた。お風呂にすら一緒に入っておいて……いやそれはもう忘れた。忘れたんだ。

「高橋万理歌です。万理歌って呼んで下さい。

あの、あの、なんだか色々……して下さってありがとうございます
ました」

そうだ、本当に色々してくれた。望んでないようなこともあった
けど、親切ではあった。お礼もしていなかった。なんたる無礼者が。

「マリカ……マリカ。歌の響きがありますね。美しい名前だ」

思わずぎよつとした。名前の意味を理解しているようなことにも、
口説かれているかのようなその言葉にも。

「万理歌は、よるずの、ことわりの、うた、という字を書くんです。
なんで歌、わかるんですか？」

「マリカのいたところでは名前に深い意味をつけるのですね。

先ほど言葉がわかるようにとお付けしたその頭飾りが、翻訳した
のでしょうか。よるずのことわり、というのは翻訳しづらい概念のよ
うですから、あまり伝わってきませんでした」

ここにはなにやらすごく高性能で便利な翻訳機があるようだ。頭
につけられたカチューシャをなでた。これがあれば外国でも困らな
い。英語に苦しむ私からすればうれしい一言だ。

「ケケテルはお気に召しませんでしたか」

「ケケテル？」

「はい。ケケテルです」

なんだケケテルって。ケケテル……。

……桃っばい……果物？ さつき食べた洋ナシ風味の。

あれ……なんでわかるんだろう。

「強く思えば知識を取り出すこともできます。ご活用ください」

翻訳力チューシャは辞書機能搭載だった。何冊分もの辞書がこれひとつに、が売り文句の電子辞書が欲しくて仕方なかった私にはまさに夢の道具だ。

「すごい……」

興奮して体が熱くなる。そんな私を、紫の瞳が優しく見つめていた。

果物の盛り合わせを名前を聞きながら食べ、ついさっき知ったばかりの辞書機能を満喫し、知識欲求をも満たした私は、ずいぶんくつろいでいた。

「果物は好きなんだね、マリカ。食べられないものはあるのかな」

ヘルさんの口調もすっかりくつろいでいる。仲良くなれた気がする。

あの恐ろしげな牙に惑わされてしまったが、体の大きさをのぞけば、そもそも悪い印象ではなかったのだ。たれ目で、笑うと目元に皺が寄って気のいいおじさんといった風だし、鷹揚な気配を漂わせている。もしかしたら偉い人なのかもしれない。そんな人を躓かせたままでもいいんだろうか。

「ヘルさんは何をする人なの？」

「私はマリカの一の従者だ。仕え、守るためにいる」

べたべたになった口元を濡れた布でぬぐってくれた。なんてかいがいい。従者といわれても私にその価値はあるのか。

「私は何も持ってない。こんな風によくしてもらってるのはどうして」

「マリカはこの世界の宝。宝は大事にするものだろう」

「私は人間だよ、宝じゃない」

私はうつむき、目を閉じ、大きく頭を振った。

私が聞きたいのは、そんなことじゃない。もどかしい思いだけが

胸にあつて、言葉にならない。

「私たちはマリカ達のことを世界の寵児と呼んでいる。

記録に残っている最初のものは、1800年ほど前だ。ある場所にあつまつた力の塊から生まれるようにやってきたのは、今まで見たこともないような生き物だった。その生き物は世界を去るとき、力を残していった。それがマナだ。マリカがつけている髪飾りにも使われている」

ヘルさんは手を伸ばしてきて、翻訳力チューシャをそつとなでた。そのまま指で私の髪の毛をくるりくるりと巻いて遊ぶ。

ヘルさんはゆっくりと話した。

「それからずっと、やってきては去っていくのを繰り返した。時間をかけて彼らのことを知っていった。この世界とはつながっていない地からやってくることも、しばらくはわからなかった。まだわかっていないことも多い。

後悔したことはたくさんある。でもその中から、私たちは多くを学んだ。マリカたちが幸せでいてくれると、私たちも幸せだということを知ったのは大きな収穫だった」

なんだか先ほども聞いた様な気がする言葉が出てきた。どれだけ歩いても私のいた場所には戻れないということと言っていたんだらう。異世界ということだ。

「マリカは大地が私たちに与えられた試練と恵み。

いつかこの地を去るときまで、私たちは出来る限りの幸福を捧げよう」

ヘルさんは笑った。やっぱり牙が見えたけど、もうおびえたりは

しない。

「生まれてきてくれてうれしいよ、マリカ」

私の両手は持ち上げられ、彼の両手に包まれた。大事な宝物をしまっておくかのようだ。

1 (前書き)

私が生まれた日のヘルベルクラン視点になります。
彼はちよつと変態です。

いびつな卵の前に私は躓く。透明だったそれは色づいて、今にも生まれだそうとしている。

私の生きている時代に、寵児の卵が国にやってきたのは、僥倖だった。先の寵児であるフフ様が世界を去ったと知ったときには、力を得る喜びよりも悲しみが大きかったが、それも過去のことだ。私は今、一の従者としてここにいる。

これは私のものだ。かわいい私の子。他の誰にも、渡すものか。

硬質だったものが柔らかい肉の質感に変わっていく。小さくはあるが、私たちに似た姿をしている。胸のふくらみがあるところを見る限り女のような。どんな服を着せようか。毛の色は黒。肌は乳白色。この色なら、きつとどんなものでもよく似合う。

生れ落ちたばかりの雛は不思議そうに瞬きをして私を見上げている。そのいかにも稚い様子に口元が緩む。なるべく怖がらせないように、できる限りの優しい声と言葉で、ゆっくりとした動きを心がける。翻訳の髪飾りを小さな頭につける。話を通じるようになれば少しは安心もするだろう。

「あの、急にわかるように、いつてることとか……。私のは、わかりますか？」

震える唇から、この子の声がつむがれる。見知らぬ場所に出ておびえているのだろうか。抱きしめて慰めてやりたいが、あまりに華奢な体で力加減を間違えてしまったらと思うとそれもためらわれる。せめてこの手だけでも触れていれば、慰めになるだろうか。

彼女の手をできるだけそつと両手で包み込んだ。

「わかります。痛み、違和感、少しでも気になることがあればすぐにお知らせください。

この世界へようこそおいでくださいました。

私はヘルベルクランと申します。いかなるときもお仕えし、どんなものからお守りします」

はじめての声、はじめての言葉、はじめて触れたつややかな黒い髪。頼りない、小さな手。私はこのたくさんのはじめてを忘れることはないだろう。

私はいとおしさに胸がいつぱいだった。その気持ちを込めて見つめると、彼女も見つめ返してくれた。幸福感が私を満たす。

「あの、へる……ヘルヘルさん」

名前を呼ぶのもただどしい。私の名前はこの子には難しい発音のようだ。そんな風に言いにくそうに呼ばれるより、ヘルと呼んでもらいたい。お父様でもいい。

ああ……いいな。家族二人ですっと一緒に暮らそう。この子は世界にたった一人の種族。番が現れることもないだろうし、いや、私が番になってもいいが……体がもつすこし大きくなるようだったら……。まあ、しばらくは父でいよう。

「ヘルさん、あのですね、あの」

何か言いたいことがあるようなのだが、はつきりとしない。

……もじゃ。この子は生まれたばかり、つまり裸だ。身を守る毛もつるこもなく、肌はふにゃふにゃと柔らかいばかりだ。寒いのではないだろうか。

もっと早くに服を着させるべきだった。小さな手を指でこすってみるが、このくらいで温まりはしないだろう。

こんなに小さくておとなしい娘が、会ったばかりの男に服をよこせなどといえるわけがないのだ。私が気を利かせてすぐに着せるべきだった。従者としても失格ではないか。

「……は……ですか？」

「ここがどこか、なんてそんなことより先に言いたいことがあるだろう。」

「私たちはここをシンベンデルの社と呼んでいます。あなたがいた場所とは、つながっていない地にあります。」

後悔と反省が胸に渦巻いていたためにおざなりな返事をしてしまったが、気を悪くはしていないだろうか。しかし彼女は笑顔を見せてくれた。

今からでも遅くはない。すぐに暖めてあげなければ。

「お寒くはありませんか」

すると驚くような反応を見せた。悲鳴を上げて飛びのいたのだ。両手で胸を隠している。ずっと裸で平然としていたのでそういう方向はまったく気にしていなかったが、幼くても女の子ということだったのだろう。

……手を払われたとき、なぜかひどく胸が痛んだ。それは、私をはじめて知る痛みだった。

近づいて逃げ出されでもしたらと不安に思ったが、おとなしく着替えを受け入れてくれた。体が小さく震えている。やはり寒いのだろう。抱き寄せるとすんなりと腕の中に囲われた。

「こんなに震えて……。暖かいところで暮らしていたのですね。すぐに暖めますからお待ちください」

一族の女とは比べ物にならないほどか弱い娘だ。先ほども裸を隠すばかりで蹴りのひとつも飛んでこなかった。この子は私が守るべき存在だ。強く抱きしめたくなるのをこらえる。

服につけた通信具を摘み取り、こめかみに押し付ける。社に仕える召使に、風呂の準備を頼んだ。そうだ、風呂上りには飲み物だつて必要だろう。空腹な様子はないが、何事にも控えめな子だから言い出せないだけかもしれない。その用意も言いつけた。何を食べられるのかわからないのだから、まずは種類を多くして好みを探っていこう。

風呂場に連れて行くのに抱えあげると、しがみついていた。頼りにされているようでたまらなく嬉しい。ずっとこのままでいたい。が、そうも行かない。風呂場に行く途中、召使とすれ違った。すると彼女は腕の中から顔を出し、召使を見ようとした。腕を動かし、服の袖で彼女を隠す。そうしてから召使の後姿をにらみつけた。私とこの子の時間を邪魔するんじゃない。

風呂場で私は下着だけになると、彼女に服は着せたまま、湯をかけ、風呂に入った。普通は裸ではいるものだが、先ほど恥らっていたのを私は忘れてはいない。しかし、白い服を着せていたためすっ

かり透けている。まあ、何も着ていないよりいいだろう。

左の腿の上に乗せ、薄い腹に腕を回し、私の腹に背を押し付けさせる。そうしていても、湯は彼女の肩まであつて、しっかり支えていないと溺れてしまいそうだ。

そうしている間もこの子は一言も喋らず、体をピクリとも動かさないままだが、大丈夫なのだろうか。うつむきがちで、顔が見えない。そんなふうには湯に顔を近づけてはあぶない。体を触ると暖かくなっているようだったので、もう上がることにした。

乳白色だった皮膚はうつすら赤く染まっていた。湯に浸かったせいでだろうか。以前の寵児の中にも皮膚の色がころころ変わるものがあったと聞いたことがある。もしかしたら同じところから来たものかもしれない。

手早く濡れた服を脱がせ水をふき取り、服を着せた。今度は赤い服にした。白は透けるから駄目だ。ベールも用意しなければ。彼女を私以外の目に触れさせるのは嫌だった。

そういえば、名はなんと言うのだろうか。できることなら私がつけたいが……。多分、名前を持っているだろうとは思いながらも、名前の候補をいくつも考えていた。

部屋は整えられ、飲食物の種類も申し分ない。召使達はよくやってくれたといえるが、彼女に関するとは何から何まで私がやりたくもあり苛々とする。しかしこれらすべて一人でやるうと思えば自分が何人いればいいものやら想像もできない。畑を耕したり家畜を育てたりするよりは、近くに仕えることのほうがよりいいのだから、ここは我慢だ。

彼女は体を赤くしたまま、足を伸ばしくつろいだ様子で座っている。炭酸水は断られ、それではと水菓子を差し出せば飲み物がいいという。果実水は気に入ったようだ。すぐに飲みきってしまう。ケテルをもう一度進めてみれば、今度は受け取ってくれた。物珍しげに眺め、一口、二口と齧る。牙もずいぶん小さい。これでは噛み千切るのは難しいだろう。私が噛んで口移しをしてもいいが、小さな口が懸命に動いている所はいつまでも見ていたい可愛らしさでこれもまたいいものだ。果物は好いているらしいので、今度は皿ごと手に取り、いつでも渡せるよう待機した。

「あのー……なにがどうなってるんですか？」

どうといわれても、もつと食べて欲しいだけなのだが。もう腹は膨れたのだろうか。この体の大きさから考えても小食すぎるように思う。

少し気分を変えればまた食べられるようになるかもしれない。少し話をするついでに、名前を聞いた。

「そうですね……。なんとお呼びすればよいか伺ってもよろしいでしょうか」

「高橋万理歌です。万理歌って呼んで下さい。」

あの、あの、なんだか色々……して下さってありがとうございます
ました」

頭をカクンと前に動かす。首がもげたらどうするのだ。はらはら
してしまう。

「マリカ……マリカ。歌の響きがありますね。美しい名前だ」

名付け親になれないのは残念だが、小鳥の歌声のようで彼女によ
く合っている。

「万理歌は、よろずの、ことわりの、うた、という字を書くんです。
なんで歌、わかるんですか？」

「マリカのいたところでは名前に深い意味をつけるのですね。
先ほど言葉がわかるようにとお付けしたその頭飾りが、翻訳した
のでしょうか。よろずのことわり、というのは翻訳しづらい概念のよ
うですから、あまり伝わってきませんでした」

いい機会なので翻訳の髪飾りの機能を説明する。今までで一番喜
んでいた。

次々に皿から果物を取っては私に名前を尋ね、すごい、すごいと連呼しながら髪飾りから知識を取り出している。新しいおもちゃに喜ぶ子どものようにほほえましい。

「こっちはどうかな？」

「バナナ香料のリンゴ！ へんー」

口調もずいぶん気安くなった。きゃらきゃらと笑いながらも、もぐもぐと口を動かしている。乳白色に戻った肌が、頬だけ赤く染まっている。興奮するところなるのだろうか。

こっして食べてくれるうちにたくさん食べさせるべく、せつせと渡す。皿の上のものはだいぶ減ってきた。次は何を食べさせようかと考えていたが、満腹げに腹を押さえて座椅子にもたれかけた。もういらなのだろう。他のものが食べたいということもあるかもしれない。

「果物は好きなんだね、マリカ。食べられないものはあるのかな」

頭を横にふるふるとゆるく振った。幸せそうな表情をしている。私も幸せだ。

汚れた口元をふき取る。本当は舐め取りたいが、それでは綺麗にすると言いがたいだろう。次の機会を待とう。

「ヘルさんは何をする人なの？」

「私はマリカの一の従者だ。仕え、守るためにいる」

生まれてくる前は一の従者になれたことで満足していたが、今で

はそれでは物足りない。マリカの特別な存在になりたい。どういえばいいだろうか。

「私は何も持ってない。こんな風によくしてもらってるのはどうして」

「マリカはこの世界の宝。宝は大事にするものだろう」

「違う。私の宝。私だけの。」

「私は人間だよ、宝じゃない」

頭を大きく揺らす。そんなことをしたら頭がぼろりと取れてしまう。手を伸ばして支える。触れた髪は柔らかく、指に絡んだ。

マリカが生まれてきた理由を教える。どれだけ、この世界に望まれているのか。

可愛いマリカ。愛しいマリカ。私だけが独占できるものではない。この部屋の外に出してしまえば、私以外の誰かにも愛される。

「生まれてきてくれてうれしいよ、マリカ」

そうなる前に、私を。私を、マリカの、誰にも侵されない場所に、いさせて欲しい。

「だから、私を父と想ってくれ」

これは私のものだ。かわいい私の子。他の誰にも、渡すものか。

「だから、私を父と思ってくれ」

ああ、白く輝く牙がまぶしい。なにがだからなのかさっぱりわからないが、ものすごく、期待のこもった目で私を見ている。

扱いがおかしいなとは思っていたんですよ。17才の若い娘にする態度じゃなかったですよ。赤ちゃんか何かだと思われてるみたいでしたよね。ヘルさんと比べればそりゃあ小さく見えるかもしれないけど、向こうでは159センチという標準と違って差し支えない背丈だった。それなりに育った体も見ておいてのその反応は非常に傷つく。

でも。従者といっていたけど、実質保護者になるのではないだろうか。そうなるとお父さんというのも間違いではない気がする。ちよっと若いようにも思うけど。

「お、お父さん……？」

笑顔のまぶしさが増した。なんだろう、逃げ出したい。

この世界のことがあるいろと書かれている本を見せてもらった。おおきな図鑑で、重くて私では持てないので、目の前に広げてもらう。まるで紙芝居だ。

見たことのない世界地図のページを広げ、大陸の一点を指し示す。

「ここがシンベンデルの社。この辺りが私たちシウムクイエの住む国だ。マリカには少し寒いみたいだけど、あと三月もすれば暖かくなるよ」

ちよつとした誤解があるようだ。別にそんなに寒くはない。裸でいれば肌寒く感じるけど、服を着ていればさわやかでちよつどいい気候だと思う。

「シユムクイエはマリカに一番似ているから、ここに来てくれたのかもね」

「似てる……かな？」

控えめに異議申し立てを行った。いろいろな点を鑑みて、私がヘルさんと同じ人間だとは思えない。ちなみに、ヘルさんをお父さんと呼ぶのはやっぱり遠慮させていただいた。呼ぶたびに捕食されかねない怖さを感じたもので。

「シエシエシエやティエルべなら少し似たところもあるけど……」

困った顔をしながら、見せてくれたページをみて、確かにこれと比べればと納得せざるを得なかった。

他の種族の方々は、狼が立ち上がったり、二足歩行のへビもどきだったり、人魚や鳥人間だったからだ。

「この人はマリカと同じ場所から来たんじゃないかと思っているんだ。似ているだろう」

以前私のようにここにきた人の写真や絵を見せてもらった。ヘルさんが似ていると言ったのは、アランという名前の男の人だった。名前もそれらしい。でも思いつきり西欧人なので、あまり親しみは感じられない。顔立ちだけで言えば、ヘルさんの方が日本人に近い気がするくらいだ。

どう反応すれば良いのか困ってしまう。なんとも言えずにいたら、返事がないことを気にした様子もなくページをめくる。

「この人は自分で糸を生み出せたそうだ。シウの虹糸と呼ばれてるんだけど、それで織られた布は色といい艶といい、柔らかさといい、最上級のものだったと……」。

マリカ？ どうかした？」

これを人のくくりに入れてしまえるのか。ヘルさんの度量の広さには驚いた。いや、差別はよくない。よくないけど……。だって蜘蛛なんです。蜘蛛だったんです。蜘蛛は……無理です……」。

「ごめんなさい、そういう……足がいつぱいある生き物、苦手で。

こういう生き物、他にもいる？ 虫みたいなの……」

「ああ、そうなんだ。それならやめておこう」

本を閉じ、微笑みながら私の頬を指でなでてくれた。たかが写真とわかつてはいるけど、本が大きい上に写真も鮮明で、細かいところまでばっちり見えてしまったのだ。それぞれわして血の気が引いた。

ヘルさんは優しい。私に合わせてゆつくりと、いろいろなことを教えてくれる。私はそれに答えられる気がしない。名前を覚えるのは苦手だ。ヘルさんの名前も結局覚えていない。こんなに世話になってるというのに不義理な奴で本当に申し訳ない。

「そろそろ休むか？」

「早くない？ まだ眠たくはないんだけど……」

「疲れた顔をしてる。それに、外はもう暗くなってる時間なんだ。この部屋は昼の明るさになってるだけ。」

ほら、歯を磨いてあげよう。口をあけて」

いや、そういうのは自分でやりますから。私、ヘルさんが思ってるより大人ですよ。

と思ったけど、取り出したのはなぜか布。もしかして拭くだけなの？ 歯ブラシはないのか。

「あえっ」

もたもたしているうちに私の口にヘルさんのでっかい指が突っ込まれた。痛いとかそういうのではないけど、ちょっと奥に入れすぎなんです。えずいて涙目になる。口と指の大きさを考えてほしい。無理がある。

どうしてもやるといふなら壊れ物を扱う態度をお願いします。

薄暗い寝室には、幾重にもかさなつた紗でできた天蓋付きのベッドが鎮座していた。ベッドは当然でかい。これはベッドではない。断じて違う。もはや部屋である。

そのど真ん中に下ろされ、薄くて柔らかい掛け布団をおなかまでかけられた。

ああ、そうです。当然のように抱きかかえられて運ばれましたよ。そしてこれまた当然のように私の隣に寝転がるヘルさん。おかしいよね。おかしいんですけど、あまりにも当然です、って態度なものだから、騒ぐのもおかしいんじゃないかと思つたりして。こんなだから周りの人にぼんやりしてて心配って言われるのか。

そういえば、元々いた場所はどうなつてるんだろう。服や鞆だけ残つてるのかな。怪奇失踪事件じゃないか。心配してるだろうな。

「何を考えてる」

目元を舐められた。舌は冷たかった。

「なに舐めてるんですか」

わかつてる。私が泣いたからだ。なんだか犬みたいな人だ。恥ずかしく思わないわけではないけど、私が頼れるのは今この人しかいないんだから、かまわないだろう。手のひらを引き寄せて、それで顔を隠した。さすがに何度も舐められるのはごめんだ。

「帰れる？」

他人より少しだけ運がいいというだけで、悪いことが起こるわけ

がないと思っていた。でも、今起きているのは、まさしく悪いことなんじゃないだろうか。

私がないにやらずごく歓迎されていることはわかった。ヘルさんは親切だし、何も知らないところに放り出すようなことはないだろう。それは幸運なことといえなくもないけど。

私は今、人生初めてとも言える不幸に不安を抱いていた。

「ヘルさん、お話をして」

甘えているとは思うが、甘やかしてくれるうちは甘やかされていたい。今ならお父さんと呼んでもいい。声を聞かせて欲しかった。

「私たちは、マリカたちが世界を去るときのことを、死とは言わない。い。

賢者と呼ばれる人がいた。彼は何でも知っていた。その人が世界を去るときに、これで帰れる、と言い残した。

だから帰ることはできる。いつになるかは、わからないが」

ヘルさんの声を聞くと安心する。

顔の上に乗せた手は厚みがあつてどっしりしている。

どこもかしこも安定感のある人だ。

「マリカはこうして今、私に触れている。世界がつながったから、こうしてここにいるのだろう。」

ならば、マリカのいた場所は、夢より遠い場所ではない」

ヘルさんの落ち着いた声は、穏やかで耳に優しい。

姿が見えない方がいいなあ。いや、別に見たくもないような容姿って訳じゃないよ。ただもう、本当に巨木っぷりもだけど、色は青

だの紫だの。人に見えないんですよ。
でもね。

「好きかも」

「うん？」

「優しいから……」

「私も好きだよ、マリカ」

私とヘルさんのほかには、誰もいない。ここは二人だけのゆりか
い。

「眠ってしまふまで、側にいてくれる？」

いつか帰れるって本当だろうか。もし、そうだとしたら、やっぱり私は、運がいいと思うんだ。

手を離さないで。掴まえていてほしい。私がまたどこかへ消えてしまわないように。

まどろみを抜けるとそこは異世界でした。

寝起きのぼんやりとした頭が一気に覚醒する。紫の瞳が私をがんじがらめにしていた。ものすごい見られている。

蛇に睨まれた蛙の気持ちだが、今ならよくわかる。これは何もできなくなりますね。

「おはよう」

「……おあ……おはようございます……」

なぜここにいるんでしょうか。昨夜寝るまで側にいてくれとかいっただからですよ。律儀ですね。朝まで一緒にいてくださらずともよかったです。

どうしてお顔を近づけてくるんですかね。なんで舐めるの。なんで舐めるの。

顔全体をべろべろべろ無遠慮に嘗め尽くされた。牛みたいなんです。大きくて分厚い舌だ。冷たいけど。この人体温低くないか。青いからそう感じるだけなのか。

そのまま口の中まで入ってきて、喉の奥まで舐められた。そんなことしたらえらいちゃうから。大体壊れ物を扱う態度でお願いしたいと言って……は、いないな。思っただけだった。

しかも、だ、だだだだえきも飲まされて……なにこれ。なんでこんなことになってるの。

わたしもおよめにいけない。

「うぐ……」

苦しさに沸き起こった涙は舐め取られて、その後暖かい濡れタオル

ルで顔を拭かれた。舐める必要がどこにあったんだ。二度手間じゃないか。もしかして毛づくろいですか？ そういう習性があるのだからつか。つくろつような立派な毛は私にもヘルさんにも顔には生えてないけど。昨日はこんなことされなかったというのに。

ほんとに何が起こってるの。

ベッドの上で朝ごはんを食べた。ハムだかロースとビーフだかよくわからないけど薄切りの肉だとか、温いポタージュスープを飲んで食べさせられた。ああ、炭水化物が食べたい。

それにしても赤ちゃん扱いが酷さを増している。ベッドの上で食べるのは行儀が悪くはないのだろうか。しつ前は最初が肝心なんですよおとうさん。

歯を磨かれ、服を着替えさせられ、抱きかかえられて部屋を出ました。

え、それだけされて抵抗しなかったのかって？ もちろんしましたよ。一応ね。でも私の抵抗など蚊が指されたほどにも感じられないようで、されるがままになるしかなかったんですよ。

私、どうなつちゃうんでしょう。なにをいまさら？ ですよね！。

またしても新しい部屋に来た。この部屋はなんというか、開放感にあふれている。まずドアが見当たらない。部屋の入口はカーテンがかかっているだけだし、テラスに出られるようになっていて、そこはすだれで区切られている。

今日きている服は紺色の布をぐるぐる巻きつけられたものだ。同色のベールをかぶせられていて、うっとおしい。取るうとしたら、何も言わなかったけどものすごく嫌そうな気配が察せられたのでそのままにした。私は空気の読める子です。

「今から二の従者であるクイグインネを紹介します」

またしてもなんて覚えにくい名前だ。

その人はすぐに部屋に入ってきた。40才くらいの女の人だ。青白い肌の色はヘルさんと変わらないけど、赤い髪の毛をしている。多分、ヘルさんと同じ種族だ。女の人も大きいようだ。ぴったりとしたスポーツウェアっぽいものをきていて、体の線が丸出し。がちりと筋肉質で、ボディビルでもしていそうだ。しかしこの服、私が着るとしたらかなりの勇気がいる。ヘルさんや私が着ているのとはずいぶん雰囲気が違う服だ。

「あたしはクイグインネ。よろしく」

「万理歌です。あの、よろしくおねがいします」

片膝を床につけ、もう一方はたてたままで、しっかりと背筋を伸ばしている。なんだか凜々しい人だ。

私はぺこりと頭を下げた。

「マリカ、そんなことをしたら頭が取れてしまう」

ヘルさんがいたって真面目な顔でそんなことを言った。取れるわけあるか。この人過保護すぎはしないか。

「いくらなんでもそこまで脆くはないだろう。」

「……折れないよな？」

ぐいぐいんさん？不安になったのか恐る恐る聞かれた。そんなに弱そうだろうか。

「それじゃ今日はあたしが世話するから。ヘルベルクランは休んでな」

「断る」

「昨日はずっと側にいたんだろ。最初の世話を任せてやったんだ、それだけでも感謝して欲しいくらいだ。」

ほらさっさといきな」

ヘルさんがこの世のものとは思えないほど恐ろしい顔をしている。それをまったく気にかけることなく、ぐいぐいんさんは体全体で入口の方へ押しやった。

「女同士で話したいことだってあるんだよ。とつとつでてけ」

「マリカ、いじめられたら言うんだぞ」

「そんなことするわけがあるか！」

ぐいぐいんさんはヘルさんの腿の辺りを膝蹴り。それに対してヘルさんはぐいぐいんさんの肩を拳で殴りつけ、そのまま出て行った。なんてバイオレンス。仲良くなったらあんな感じになってしまうんだろうか。私がされたら骨がぼつきりいきそうだ。

ぐいぐいんさんは、私の近くに寄ってきて、ベールを取ってじろじろと眺めた。

「なんかまたずいぶん古めかしい服着せられたねえ。ヘルベルクランは懐古趣味が過ぎるよ。」

あたしが着てるみたいなのの方が動きやすくてよくないかい？」

「え、えと、このままで大丈夫、です。はい」

そのレオタードみたいな服よりは断然こっちの方がいい。

「んー。おとなしいとは聞いてたけど、本当だねえ。言いたいことがあつたらいつでも言うんだよ。ヘルベルクランにいいように扱われないか心配だよ。」

そうだそうだ、聞きたいことがあるんだ」

「あ、はい。なんでしよう」

「ヘルベルクランの嫁になりたいのか？」

どこからでてきたそんな話。

「なんでそんな話に……」

「やっぱり違うのか？ 好きだって言われたから結婚するって言うてたぞ。来たばかりのはずなのにおかしいとは思ってたんだけど、なにか心当たりはあるか？」

そうか。あれか。昨日の。

いや、声が好きとは言ったけど、なんでそれが結婚に結びつくのか。

……声が、って言ったっけ？

「ああー……」

声が、とは言ってない。それにしたって過程が色々飛びぬけている。今朝のあの行動も結婚するんだからいいよね、ってことか。よくないけど。

「たしかに言ったんですけど……。でも声が素敵だなんて、そういう意味で……」

「勘違いしてるのか。」

ヘルベルクランは元々寵児愛好家だね。だから言葉一つで舞い上がっちゃったんだろうけどさ。マリカもちよっと気をつけてくれ。寵児ってただでさえ好かれやすいんだ」

「そうなんですか？」

「愛さずにはいられないからこそ寵児なんだろ。前はフフって子で、シエシエ族のところに行ったんだけど、ヘルベルクランはあんなとこまで会いに行ったらしくて、フフさまがどうたらって何度も聞かされたよ。」

そんなにいいもんかねって、思ってたんだけど。こうして会ってみると確かにかわいいもんだね」

ぐいぐいんさんは、にこっと笑って指の腹で私の頬をなでた。それは優しいしぐさだったのに、私はほかのことに気をとられていた。ヘルさんがフフさんに会いに行った話を聞いたら急に胸が苦しくなってる。

たとえ過去でも、私を放って、どこかにいかないで。

「何泣いてるんだ。ああ、目玉が取れちまいそうじゃないか。あたしがなにか気に触ることを言ったかい？ ごめんよ、口が悪いつてよく言われるんだ……泣くことないだろ、ごめんよ、ごめんとしたら……」

違う、ぐいぐいんさんが謝ることなんて何も無い。ヘルさんがいなくなっちゃったのが悪いんだ。私の精神安定剤はどこへいった。自分が着ている服の袖を目元に押し付ける。泣いてる顔を見られるのは恥ずかしい。

「ち、ちが……寂しくて、ヘルさんがいないの」「あたしがいるだろ。ほら、顔を見せて」

ぐいと上を向かされ、残った涙の跡を舐め取られた。それ、この人たちの作法なんですかね。私も泣いてる人をみかけたらやらなきゃ駄目ですか。

「マリカは味がついてるんだな。美味しい……」

ほっぺたかじられた。牙が顔に当たっている。何この怪しい感じ。涙も胸苦さもふきとんだ。

「あの、ぐいぐいんさん……?」「塩気があって、ちょうどいいね」「ひいー!」

くびを かじるのは きんし

助かった！ 助かったよ！ 私のナイトがきてくれたよ！

「死んで詫びろいますぐに」

「悪かった。いや、寵児ってすごいわ。こういうことかー」

私にかじりついてたぐいぐいんさんを、ヘルさんが引き離してくれた。助かったけど、そのときのヘルさんの表情はそりゃあもう…。一難去ってまた一難ってこういうことを言うんだ。

「あとあたしの名前はクイグインネだから。覚えてくれ」

「クイでいいだろう。マリカの小さな頭に負担を強いるな」

ヘルさん何気に私のこと馬鹿にしてませんか。傷つきました。ぐいぐい…。間違えた、クイグイン…？ クイさんでもういいや。クイさんも悪いことをしたとは思ってなさそうな感じだ。

「生まれたばかりだから、まだ不安定なんだ。少しならと思ったが駄目だな。」

話はもう良いだろう。とっとと出て行け」

「やだよ。独り占めしようだったってそうは行かない。あたしだって従者なんだ」

「生まれたときに側にいたものになついで、引き離されると不安を覚える。あの時あの場にいたのは私だけなんだから、私だけがいれ
ばいい」

「なんだそれ。そんなの知らないよ！ 知ってて黙ってたなヘルベ
ルクランの阿呆！」

「今までさして興味もなかったくせに」

「過去は過去だ。マリカ、今すぐあたしに慣れろ」

まさにカオス。……なんでこんなことになってるの？

結局、クイさんは部屋に残った。そして私はヘルさんとクイさんが座っている間に置かれた。ヘルさんの腿に上半身を持たれかけ、クイさんには腰から足をなでなでされている。羞恥心って案外早くなくなるものですね。こんなことをされても、今ではなんとも思わない。思わないと思ったら思わない。

おなかはやめてください、くすぐりたいです。

「どこもかしこも柔らかいねえ……うまそお……」

「見るな触るな話しかけるな涎をたらすなマリカが穢れる」

ヘルさん、あんまり引つ張ると私の体がちぎれるよ。

「こんなにかわいいのに、なんで殺したりしたんだろうね」

おおつとなんだか不穏な言葉が聞こえてきました。

「ころす……?」

「ああ、いや、ちがうよ。昔のことさ」

「クールーエルガの罪と罰か」

なんのことだろう。教えて欲しくて、ヘルさんを仰ぎ見る。こうして近くにいと、大きすぎて顔もよく見えない。ヘルさんは頭をなでてくれた。クイさんは私の膝のあたりを熱心に触って、曲げたり伸ばしたりと遊んでいる。楽しいのだろうか。

「千年以上前の話だ。クールーエルガも、マリカと同じようにやってきた。」

時々みつかると不思議な生き物が、マナと関係があることはわかっていたし、だからほとんどの場合大事にされていた」

昨日もみた本を広げてみせてくれた。描かれていたのは蝶々つて言うか蛾だ。鳥肌が……。下の方に豆粒みたいなのがあるけど、なんだろう。

「綺麗だろう？　だけど、クールーエルガは体が大きすぎて、意図してではなかったのかもしれないが、辺りを破壊した。危険とされて、殺されてしまった」

その豆粒は人でしたか。たしかにそれだけ大きければ、それだけでも危険だ。

「すると世界中からマナがはじけて消え、殺された場所は今も毒の沼ができていて近づけない。大地の悲しみと怒りを知って、彼らが大地の愛しい子だったのだと気が付いた。

その出来事がクールーエルガの罪と罰と呼ばれている。

大地の愛するものを私たちも愛そうと、保護する取り決めがなされたのはその後だ」

「私を大事にしてくれるのは、災厄を起こさないため？」

「私はマリカが大事だよ」

「前の……寵児のひとは？」

「前の？　フフ様のことかな？　もっちりして大変かわいらしかったけど」

あ、いまなんかムカツときた。

私は体を起こしてクイさんにしがみついた。クイさんには足をつかまれたままで、ねじれて苦しいけど気にしない。それにしても女の子の人とは思えないほど硬い体だ。

「マリカ？」

「そんな格好じゃ痛いだろ」

私を持ち上げて、向かい合わせになるように腿の上に乗せられた。ヘルさんとは逆の方を向いて、ちょうど顔の位置に来た胸に顔を押し付ける。

私の知る限り女の人の胸というのは柔らかいものはずなんだけど。

「クイさんは女の人だよね」

「マリカ」

「そうだよー。なんだい、もしかして男に見えたのかい？」

苦笑している。こんなに体の線が出る服を着ているというのに、女の人かどうか聞くなんて、失礼だっただろうか。

「ううん。女の人にしか見えないよ。でもなんだか……私と違うから、もしかしたらって」

「マリカ！」

ぐえ。そこは胃です。胃をつかまされると大変なことになるんです。

「返事をしてくれ」

振り返らない。だって怖い顔をしているってわかってるから。

「あたしと仲良くしたいんだよね、マリカは。」

そういえばさ、マリカはあんたとは結婚したくないって言ったよ。声は好きだけど他は好きじゃないって。

わかつたらその手を離しな」

クイさんの言ってることは、正しいけど正しくない。昨日であつたばかりで結婚なんて考えられない。好きと聞いたのは声のこと。でもそれ以外を好きじゃないなんて思つてない。

おなかをつかんでいた手が離れる。

「違うよ、好きだよ。でも苦しい」

怖くて振り返れない。すがりつきたいのに、私の手の届かないところにいる。

わがママをいっても、私を大事だといつてくれる？

「私以外に、心移さないで」

1 (前書き)

夢を見るより近い場所のヘルベルクラン視点です。

お父さん、と愛らしい声で呼ばれると、体が痺れるようだ。食べてしまいたいほどかわいいたはこのことだ。あの乳白色の肌に牙を立てて、流れる体液を嚙りたい。

そんな気持ちが出てしまったのか、呼び方はすぐに戻った。残念ではあるが、その方がいいのかもしれない。大事に守りたいと思うのと同じくらい、すべてを私のものにしたいたい気持ちがわいてくる。柔らかい体を食らって身の内に収めたら、どれだけ満たされるだろうか。そうすればこの子が私から、二度と離れることはないというのに。

本を見ながらこの世界の話や、過去の寵児の話などをしていたが、どうも反応が鈍い。

「マリカ？ どうかした？」

「ごめんなさい、そういう……足がいつぱいある生き物、苦手です。こういう生き物、他にもいる？ 虫みたいな……」

「ああ、そうなんだ。それならやめておこう」

この様子では虫を食べる習慣もなさそうだ。出すのはやめておこう。そういえば肉は食べるのだろうか。このちいさな牙では千切つてあげなければいけないだろう。薄く切つてあげるのも良いが。

本を閉じて脇に置く。瞬きを繰り返して、うつむきがちで元気がない。苦手なものを見たせいだろうか。少し疲れているというのもあるのかもしれない。顔色も白さが増している。触ると先ほどより少し冷えていた。具合が悪く見えて心配だ。

眠くない、というマリカに、やや強引に寝る準備を進める。口を開かせ、小さな歯を慎重に磨く。加減が難しい。喉の奥まで触れて

しまったときは涙を浮かべて苦しそうにしていた。マリカの口内は暖かく、指からなにかがじわりとする。指を引き抜いて舐めてみれば、ほのかに甘い。

本当にこの子はどこまでも愛らしい。

寝巻きに着替えさせ、寝台に運ぶ。彼女はあまりに小さくて、敷布の上でぼつんと寂しそうにみえた。寝入るまで添い寝をしていようと、マリカの隣に体を横たえる。

ぼんやりと天蓋を眺めていたかと思うと、次第に目を潤ませて涙をこぼした。

「何を考えてる」

この小さな頭の中で、何を思って泣いたのだろうか。涙を舐め取ると、薄く塩の味がした。美味い。思わず喉が鳴り、もっと欲しくなつて舐に唇を付けて吸う。

「なに舐めてるんですか」

私の手を引き寄せて、それで私を追い払う。そのまま私の手のひらを自身の顔に押し付けてきた。彼女の頭は、私の片手に収まるほど小さい。掴み潰せるだろう。あまりにか細くて、私が壊してしまいたいそうで恐ろしくなる。

「帰れる?」

手のひらのした、くぐもった震える声で、そう言った。

帰る? どこに……? ここがマリカがいるところだろう。私の知らない、どこへ行くつもりだ。食べたい。食べてしまいたい。帰るのは、私の中。

駄目だ。そんなことをすれば、柔らかい体に触れることもできないければ、この可愛い声も聞けなくなってしまう。

いかなるときもお仕えし、どんなものからお守りしますと、誓ったではないか。

「ヘルさん、お話をして」

歯を食いしばり、彼女を慰める言葉を搜す。できる限りの優しい声を心がけた。

「私たちは、マリカたちが世界を去るときのことを、死とは言わない。

賢者と呼ばれる人がいた。彼は何でも知っていた。その人が世界を去るときに、これで帰れる、と言い残した。

だから帰ることはできる。いつになるかは、わからないが」

詭弁だ。賢者も年老いて死んだのだ。賢者でも生きて元いた場所へ続く道は見つけ出せなかった。生まれたからには死から逃れられるなんて、できるわけがない。

それでも、帰れると思うことで少しでも悲しみが薄れるなら。私は無理やり作り出した寛容さで、言葉を引き出し、続ける。

「マリカはこうして今、私に触れている。世界がつながったから、こうしてここにいるのだろう。」

ならば、マリカのいた場所は、夢より遠い場所ではない」

それでも、どこよりも遠い場所。かなわぬ夢だとわかっていながら、私はマリカに嘘をつく。

「好きかも」

聞き逃せない言葉が聞こえた気がする。思わず聞き返してしまう。手のひらに、鼻や唇があたっている。マリカの温かい息がかかってこそばゆい。落ち着いたのか、柔らかい声だった。

「優しいから……」

私のことを好きだという。

心を押し殺して慰めたかいたったというもの。マリカの特別になれるのなら、これからも望むだけ優しさを贈ろう。

「私も好きだよ、マリカ」

マリカは甘えるように擦り寄ってきて、眠るまで側にいて欲しいなどと可愛い事を言う。朝まで一緒にいるに決まっている。これから毎晩一緒だ。体は小さいがなんとでもやりようはある。色々教えてあげよう。優しく。そう優しく。マリカは優しいのが好きといていた。

幸せな未来に浸っていたというのに、クイグインネから通信が入ってきた。

（様子はどうなってるんだい）

（今添い寝をしている。もう寝そうだ）

マリカを見た。目を閉じて、うっすらと開けたままの口から小さな寝息がもれている。幸せそうな寝顔だ。

(どんな子なんだ?)

(名はマリカ。女だ。体は小さいが姿は私たちに似ている。おとなしくて、かわいらしい)

(あなたは寵児だったらどんなでもそういうんだろうさ。あー、通信で話すのも面倒だ。寝たらちょっとこっちにきてくれよ)

(駄目だ。側にいるように言われている)

(ずいぶん仲良くなったねえ)

(私を好きだといっている。もう少し大きくなったら番にする)

(……まあ……二人が良いならいいんだが……。明日は会えるんだろうね)

クイグインネは二の従者だ。いつまでも会わせない訳にはいかない。

(明日食事が終わったら連れて行く。それでいいだろう。もう通信は終わらせる。いいか)

(え、あー……まあ、いいか。じゃあ明日な)

煩い女だが、あまり寵児には興味がないので、私には都合がいい。従者は男女がそれぞれ一人はつくように決められている。私の邪魔をしなければ誰でもよかった。あの関心の薄さがずっと続けばいい。

薄暗い部屋の中で、二人きり。私は誰にも邪魔されることなく、眠るマリカを眺めて楽しんだ。

1 (前書き)

過ぎた日の約束のヘルベルクラン視点になります。

とろんとした目で私を見た。小さな口が薄く開いたままぶるぶると震えている。そこから少しだけのぞく柔らかそうな舌。こんなに可愛い、愛くるしいものを私は他に知らない。

「おはよう」

「…………おあ…………おはようございます…………」

寝起きで口が回らないのか、たどたどしい。それが私の欲を刺激する。

顔中、口の中まで嘗め回した。本当は牙を打ち立てたい。駄目だ、傷はつけたくない。口の中は狭く浅い。奥まで舌が届いた。暖かく、甘い。ああ、涎が止まらない。あふれ出るそれを、マリカは従順に飲み込んでいた。

皮膚を赤く染め、瞳を潤ませて、細い吐息を漏らす。興奮しているようだ。一族の女と反応は似ている。比べ物にならないほど可愛らしいが。優しくとは、まずはこれくらいだろうか。最後に、浮かんだ涙を吸い取った。

通信員で召使とクイグインネに連絡を取る。洗顔道具や、朝食、服の手配を頼んだ。それが終わればクイグインネに会うことになる。気が重い。こんなに可愛らしいマリカを見たら、誰でも手に入れないと思うに決まっている。心配だ。

部屋を明るくし顔を拭いていると、目元が赤くなっているのに気が付いた。こすってみるが、さらに赤くなってしまった。昨日吸い付いたせいかもしれない。少しの刺激でもこうなってしまうようだ。気をつけなければ。

寝台の上に朝食を運んで手ずから食べさせる。このように朝を過ごすのは、番になったもの同士で行われる親密な行為だ。恥ずかしくて自分で食べるなどといっていたが、遠慮はしなくていい。今朝は肉を用意させたが、薄く切られていた。腹が立つほど気が利く召使いだ。私が噛み千切って口移しでやりたかった。

今日の予定を話しながら服を着せ、ベールをかぶせる。予定といってもクイグインネに会うだけだが。今日の服は紺。なるべく地味に、興味をもたれないようにと選んだが、その意味では失敗した。この色は乳白色の肌を際立たせ、ベールの向こうから黒い瞳がきらきらとしており、覗き込んで確かめずにはいられない。どんなものを着せても魅力があふれ出てしまう。困った。ああ、できることなら、誰にも会わず閉じ込めたい。

何を着せても似合ってしまうのだから仕方がない。諦めてそのまま抱き上げると、応接室へ向かった。

「今から二の従者であるクイグインネを紹介します」

部屋の近くに待たせていたクイグインネを呼ぶ。いつみても厳つい女だ。マリカとは大違いだ。大体なんだあの服は。若作りするないい年して恥ずかしい。

マリカが見られているのが、たまらなく私をいらだたせる。

「あたしはクイグインネ。よろしく」

「万理歌です。あの、よろしくおねがいします」

よろしくなくていい。マリカは首をかくんと動かしだした。

「マリカ、そんなことをしたら頭が取れてしまう」

「いくらなんでもそこまで脆くはないだろう」

マリカの華奢さを知らないからそんなことが言えるんだ。知られたいはないが。

しかしこの女、じろじろと不躰にマリカを見て、か弱く頼りなげな様子に不安を覚えたようだ。

「……折れないよな？」

その心配は私がしている。お前は何の興味も持たなくていい。

「それじゃ今日はあたしが世話するから。ヘルベルクランは休んでな」

「断る」

私を離して何をする気だ。

しかしクイグインネも引かない。なんだかんだといって私を追い出そうとする。女同士の話もあると言われると、性別ばかりは私もどうしようもないだけに黙るしかなかった。

……それに。

イライラがやまない。落ち着けるため、少し席をはずした方がいいのかもしれない。マリカをずっと、閉じ込めておくことはできない。私に何かあったときのためにも、少しは慣れさせておかなければ。

「マリカ、いじめられたら言うんだぞ」

仕方なく、本当に仕方なしに、部屋を出た。

マリカが生まれたばかりで、やらなければいけないことはたくさんある。とりあえず、長や多民族との会見が終われば、ひと段落だ。

生まれた報告はクイグインネがしているはず。すぐに役人が来るだろう。折衝はそいつに任せて、早くマリカのことだけをできるようにしたい。まずは詳しい報告書を出さなければ……。それはクイグインネに任せればいいか。そろそろ話も終わっただろう。執務室へ向かっていた足を応接室へ向ける。

「ひいひい！」

悲鳴が聞こえた。

マリカに覆いかぶさるクイグインネ……。

あのおんな。じごくへおちろ。

首筋に齒型がつき、薄く血が出ていた。私達の青い血とは違う、赤い血だ。時折皮膚が赤く色づくのはこの血の色のせいなのか。薬を塗り、絆創膏を貼る。

「死んで詫びろいますぐに」

マリカに怪我を負わせておいて、にやにやしているのが気に障る。悪かったなどといっていたが、まったく誠意が感じられない。あまつさえ、名前を覚えるだど……。マリカの小さな頭に余計なことを詰め込むな。とっとと出て行けば良いのに、なんだかんだと言って側を離れない。べたべたべたべたと体を触っている。

腹をつかんで引き寄せようとしたが、苦しがつて身をよじるのでうまくいかない。お前はさっさと手を離せ。

「見るな触るな話しかけるな涎をたらすなマリカが穢れる」

マリカが愛らしすぎて困る。こんな粗暴な女まで魅了してしまうとは。

「こんなにかわいいのに、なんで殺したりしたんだろうね」

クーラーエルガの罪と罰の話を持ち出してきた。私がマリカをあんな目にあわせたりしない。私が守るからお前は考えなくていい。マリカの記憶をひとかけらもこいつの頭に残したくない。

「ころす……？」

クイグインネの言葉に不安を覚えたらしく、マリカは不安げにこちらを見ていた。この子は繊細なんだ。物騒な台詞を吐くんじやない。

本を手に説明する。マリカが不安に思うことは何もない。今ではあんなことは起こらない。

クールーエルガの不幸な出来事を話していると、なぜかフフ様のことを聞かれた。

「前の……寵児のひとは？」

「前の？ フフ様のことかな？ もつちりして大変かわいらしかったけど」

青緑の透明な生き物で、不定形だと聞いていたが、私がお見かけしたときはシエシエシエ族の女の形を模していた。ぷるぷるとしたさわり心地のよさそうな体だった。触れることはかなわなかったが……。

フフ様のことを思い出していると、マリカが突然私の手を振り払って、クイグインエンに抱きついた。

「マリカ？」

先ほど嘔み付かれて悲鳴を上げていたというのに、なぜその女に抱きつく。

膝の上に乗せてくっつく様子を、クイグインネがにやにや笑いながら見せ付けてくる。一体何があったこうなった。私が呆然としていると、クイグインエンが女かどうかとかそんな話を始めた。声をかけても無視される。

「マリカ！ 返事をしてくれ」

た。人の求婚を何だと思っているのか。なぜ気を利かせて出ていかない。あの女いつかつぶす。

17才は子どもだろうか。子どもとはいえない気がする。

いい年していじけて無視して泣き出すなんて恥ずかすぎる。そんなダメな私なのに、ヘルさんは優しく抱き寄せてくれた。それをいいことに、しがみついて顔を押し付けた。この行動も十分子どもっぽいけど、ヘルさんはお父さんだからいいんだ。

隠してた顔はすぐに持ち上げられ晒されて、顔中を舐められる。ちゅうちゅうと口を吸われて、抱きしめられた。なんだか頭がぼつつとする。

こっちで出会った人は当たり前のようにこうするけど、これが普通なのかな。されるのに慣れつつある。私もしたほうが良いんだろうか。……やってみようかな？

伸び上がってヘルさんの頬に口をつけてすぐに離れてみた。普通な顔をしている。もう一度、今度は軽く噛んでみた。硬くて伸びないほっぺだ。膝の上に座って仰ぎ見る。いたって普通。

なんとも思われないってことは普通なのかな。口にするのはまだ抵抗があるけど、まあ頬にするくらいならやってもいいかな。

「ぶふっ」

変な音が聞こえたので振り返ると、クイさんが突っ伏して体を震わせていた。笑ってるのだろうか。やっぱり変なことだったのか。でもそれならなんでしてくるのか。

「……クイさん？」

「お、おかし……っ、いや、なんでもないよ……！」

あー、あたしは用事があったんだごめんごめん、ちょっとすませ
てくるねー」

よろよろとしながら部屋を出て行った。なんだろう。しょんぼりしてしまう。

「私、おかしいことしちゃった?」

「……どうして?」

「笑われちゃったし」

「クイグインネのことなら、おかしいのはあいつの方だから気にしなくていい」

頭をなでてくれて、頬にキスしてくれた。ヘルさんは優しい。甘やかされすぎて駄目になっちゃいそうだ。

それから家の中を案内してくれることになった。白い石造りの家出、やたらめつたら広い。その割りに人には会わない。従者のひとの二人と、召使いのひとが六人、あとは警備の人がたくさん。警備の人は近くの兵営からやってくるそうだ。自分がそんなにしてもらうほどの存在だとは思えなくて恐縮してしまう。

「ヘルさんはどうして従者になったの?」

「私は、マリカたちほどかわいらしいものを他に知らない。ずっと、側にお仕えしたかった」

ふーん。それって私のことじゃないよね。いいけど別に!

指をつかんだ手に力を込めると、微笑まれた。好かれていることは間違いない。それならいいか。

「十年以上前からずっと、私はここでマリカが生まれるのを待ってたんだよ」

「そんなに?」

「従者になる訓練と選定があつて、私が一の従者に選ばれた。卵のときから、一番側にいるのは私だよ」

自慢げに言われた。クイさんはどうなんだろう。ヘルさんより後から来た人なのかな。

生まれてきた、とか言われた覚えはあるけど、この世界に来たことの比喩だと思つてた。違つたんだらうか。卵生になつた覚えはない。

「……卵、つて、ほんとに卵だつたの？」

「殻があるわけでもないし、卵のように丸くもないけど、それが生き物に変化するから私たちはそう呼んでいる。龍児が世界を去つてしばらく新しい龍児の卵ができる。マリカの年は16位だろう。遠い場所で育つ間、ここでも同じ年月をかけて卵が育つていくんだ。

卵は大地に根ざして動けないから、そこに社を建てる。いつ生まれてくるかはその時々で違つから、ずっと待つてたよ」

なんだか胸が苦しくなる。それだけの時間待ち続けて、来たのがこの私。今のところ可愛がつてくれてるけど、そのうちがっかりされそうで怖い。

……まあいいか。それまで甘えたおそう。

「怪しいやつについていたら駄目だからね。マリカはかわいいから、さらわれてしまう」

もしもそんなことがあるとしたら、珍しいからだと思う。真面目な顔でかわいいといわれるとやつぱり照れる。照れ隠しに、近くにあつたおきくてつやつやした何かを指差した。

「あれは？ あれはなあに？」

「浮遊艇だよ。乗ってみる？」

長細くて飛行機に似た形をしている。側面についたでっぱりを引き下ろすと、中に入れるようになっていた。前に操縦席がある他は、がらんとしている。私だけなら広すぎるほどののに、ヘルさんが入ってくるととたんに狭くなった。やっぱり大きすぎる。

ヘルさんが操縦席に座って、ヘッドセットのようなものを付ける。前面にいくつかあるボタンをぼちぼちと押した。

「ふおおおお！」

興奮した。外から見たら多分、私の肩ぐらいの高さに浮いてると思う。窓にかじりついた。滑らかに動き出す。

そのまま外に出て、家の周りをぐるりと一回りした。広々とした草原に今暮らしているお屋敷がどーんと建っている。ちらほらと見える人は、警備の人だろうか。遠くに山が黒々としてみえた。

「すこし寂しいところだね」

「マリカはここより町に住みたい？好きなところに住んでいいんだよ。マリカが幸せでいられるならどこだって」

「うん……。ヘルさんは、ついてきてくれるんだよね」
「もちろん」

安心した。それならどこでもいい。私はヘルさんにすっかり頼り切っていた。

浮遊艇から降りて、廊下を進む。次はどこへいくんだろ。多分もうお昼は過ぎている。おなかがぐうとなった。

「ヘルさん……。おなかが減りました……」

「マリカ、いままで食事は日に何回していた？」

「3回。朝昼晩だけど……違う？」

「そうか。私たちは朝と夕方の1日2回なんだ。マリカは食べる量が少ないから持たないんだね。ごめんね、今から準備するから……何か食べたいものはあるかな？」

そういえば、朝ベッドの上で一緒に食べてたんだけど、たくさん食べてたなあ。

私は炭水化物が食べたいです。

「ごはんとかパンはあるの？ 主食になるような」

「……それはどんな食べ物かな」

「ごはんは、お米っていう穀物を炊いたもので……パンは、ええと、小麦粉をこねて発酵させて焼いたもの……かなあ……。あ、小麦粉も多分、穀物で、あとはおいもとか、そういうのをまとめて主食っていつてるんだけど」

難しい顔をしている。面倒な注文をして申し訳ない。

しばらく部屋で待っていると、持ってきてくれたのは、オートミールだった。

なんか違うけど、あまり無理を言ってもいけない。探してみるといつてくれたので、どこかにあることを祈ろう。

食べた後はちょっとしたお勉強だ。この世界のことを本を見ながら色々聞いた。ちなみに、字も読める。翻訳力チューシャ様様だ。

「近いうちに、長や他の種族とも会わなければいけない。そのときは、都に行くことになる。飛行艇が迎えに来るはずだから、すぐ着くけどね。」

マリカを呼びつけるなんて、なんて傲慢なんだろう」

長というからには偉い人だろうに、私が呼びつけたりしたらその方がよほど傲慢だと思う。

夕食前にはお風呂に入りたいと言ってみると、当然のように一緒に入るという。お年頃なので、男の人とお風呂に入るのは困る。一人で入りたいんだけど、やたらと心配されたので、クイさんと一緒に入ることにした。

ヘルさんは眉根を寄せて渋い顔をしていた。怖いですよ。

「あたしは風呂はそんなに入らないんだけどねえ」

「気持ちいいのに」

「熱くなるじゃないか」

入るまでは、非常に和やかだった。おぼれそうとのよくわからない理由で抱きかかえられてからが問題だった。

私の体をぶにつとつままで、つまんで、つまんで……。

かじられたことを思い出す。二人きりで、お風呂。あれ、どう考えても危険じゃないか。

つまんでいるだけでは満足できなくなったのか、湯船から上げられ、わざわざ柔らかいところを選んでくわえて吸われた。真っ赤になった。胸とか脇腹とか腿の内側とか。

食われない。大丈夫。うん、大丈夫なはずだ。だって私を食べちゃったら、世界が大変なことになっちゃうんだよね。だから大丈夫。生きた心地がしないとはこのことですが、なんとか無事に洗いあがって帰還しました。

全身真っ赤ですけどね。湯上りだから、ではない理由で。

疲れてぼんやりろのろと濡れた体を拭いていると、着替えを終えたクイさんにタオルを取られた。何か言ってるけど、言葉がわからない。髪を洗うのに翻訳力チューシャを取ったからだ。そういえばこれを取ったのは初めてだ。寝るときもつけている。少しは言葉を覚えなさいといけないのかなあとちらりと思っただけど、こっちの人の名前すら覚えられない私には無理だ。

服はすこしゆるめに着付けられた。この服も一人で着られるようにならないといけないだろう。いつまでもしてもらってばかりじゃいけない。クイさんが着てるような服なら、一人で大丈夫だと思っけど、ちょっと恥ずかしい……。どっちの服が一般的なのかな。翻訳力チューシャは手放せないけど、それ以外はこちらにあわせるように頑張ろう。まあ、そのうちできるようになるだろう。

「うーん……こんなもんかねえ」

クイさんは着替え終わった私を上から下まで眺めると、私の手を取って脱衣所を出た。

部屋に入ると、すでに食事の用意がされていた。入ってすぐヘルさんに抱きかかえられて、ふかふかクッションの上に座った。ヘルさんが。

私はヘルさんの膝の上です。そうですね、当然ですよ。なんでこんなべたべたしてるのかよくわからないけど多分こっぴいものなんだろう多分。

イオン飲料風の飲み物を飲んで、何が食べたい、と聞かれたらあれがいいこれがいいと指差すだけで、一切私の手は使っていない。

私どんだけお姫様。

肉っぽいものが多いけど、スープや野菜、果物もある。あまり料理に手をかけないところなのかな。塩味がほとんどで、素材の味をいかしてますって感じ。

ヘルさんとクイさんの二人がかりで口に食べ物をつままれて、喋る暇もない。っていうかもうおなかいっぱい。もうやめてくださいおねがいだから。

「それしか食べないでよく動けるねえ」

「もうすこし食べたほうがいい。早く大きくなってくれ」

私の成長期はもう終わってると思う。

もうあとは寝るだけ、という状態で、大きなベッドの上に横になる。私は今一人きりだ。ベッドに明かりを持ち込んで、寝転がって本を読んでいる。クイさんおすすめの恋愛小説だ。

青い人、シウムクイ工族が、人魚のシエシエシエ族に恋をして、人魚を閉じ込めて水槽で飼う監禁物。最後は人魚に他の人魚の卵？を産ませて、青い人が泣いて喜ぶという……。なんだこれ。恋愛小説じゃないだろう。やっぱり感覚が少し違うんだなあ。

実際話すときは違和感を感じないけど、書かれた文字の翻訳になるとちよつと意味がわからないところもあつた。読むのに疲れてうとうとしていたら、誰かが近くにやってきた気配がする。

「あうえー！」

飛び起きた。足をつかんで開かれた。ヘルさんが恐ろしい顔でふくらはぎの辺りをつかんでいる。裾がめくれてぎゃー！

「な、なに……?」

「これは?」

「え、と……なにが……?」

さりげなく足を閉じようとしたけど、びくともしない。つかまれたところがいたいのですが。

「この赤いのは?」

「お、ふろで、クイさんが……」

「また噛まれた?」

「うん……で、でも血がよってるだけで」

「噛まれただけじゃこうならないよね」

「す、すわれたのかな……?」

ヘルさんのあまりの迫力に思わず疑問系で返してしまう。すると、するとですね、私の腿の内側の赤くなっただころをべろっとなつめたつ。

「あの、ちょ、ダメ、かも……」

「クイグインネに許して、私を拒否するなんて言いませんよね?」

敬語怖いです。

朝目が覚めて、ぼーっとしていると、ヘルさんにべろべろちゅーちゅーされた。まさかこれ、朝の日課になったりしないよね。

唇が離れると、ため息をついて、指で体を撫でさすられた。昨夜のことはあまり思い出してはいけない気がする。体の表面がじんじゅんしてあつい。

「綺麗な肌なのに、跡が残ったらどうするんだ。もうあんなことさせらんじゃない」

あなたも残したように思います。その点についてはいかが思われますか。

「わかった？」

はいごめんなさいもうしませんとさせません。

1 (前書き)

キスをするより甘えたいのへルべルクラン視点です。

頬に柔らかい唇が当たる。すこしして、今度は控えめに舌でぺろりと舐められた。

これは。私のことを愛しているというマリカからの返事か。思わず腕に力が入りそうになり、必死に抑える。こんな細い体では、折ってしまいそうだ。

もう少し大きくなったらと思うているが、双方合意の上であれば問題ないのではないか。しかしあまりに体が小さすぎるか。ああ、でも、こんなに可愛らしく甘えられると優しくする自信がなくなってきた。

「ぶふっ」

クイグインネが体を折り曲げて本格的に笑い出した。マリカが不審がっている。いい雰囲気だったというのに、この女本当に私の邪魔がしない。睨みつけていたら、ようやく部屋を出て行った。

「私、おかしいことしちゃった？」

おかしいのはあの女だ。マリカが気にする必要はまったくない。しかし少し元気がなくなってしまったので、気分転換に社の中を案内した。

浮遊艇ののってきやっきやと喜んでいるところなど、あんまり愛くるしいので回りに誰もいないか思わず辺りを探ってしまうくらいだ。誰もマリカを見なくていい。その上どこに行くにも一緒に来て欲しいと。もちろん。当たり前だ。一生私と二人きりでもかまわないむしろ私とひとつになってくれ。いけない、おもわずよだが、

雑念が多すぎてこのまま運転を続けるのは危険だ。浮遊艇を降り、

これからどうするべきか寝室へ二人でこもりきりたいああ駄目だ自分がないをするかわからないすこしおちつけ

「ヘルさん……おなかが減りました……」

つないでいた指をちよいちよいと引つ張られ、遠慮がちに言った。なんてことだ。食事の回数や時間を聞いていなかった。姿が似ているからといって私たちと同じとは限らない。うかつな自分を殴ってやりたい。

ついでに、さりげなく食べたいものを聞いてみると、ごはんやパンといったものの名前をあげてくれた。なにやら料理のことだとはわかるが、どんなものだろう。一生懸命説明してくれるのが可愛い。しかし、あまり食べたことのない食べ物だ。ごはんというのは、病気の時にたまに食べたものが似ているように思うが、それほど美味いものではないが……。

用意はしたものの、やはり少し違うようだ。他の国の料理なども調べておこう。

食べた後はのんびりと過ごし、夕方になり、そろそろ食事の準備をといたところで、これまたすこし言いにくそうに、お風呂に入りたいと口にした。そのように遠慮などしなくていい。できる限り望みはかなえよう。一日三食、毎日風呂にもはいるとは、ずいぶんせわしない暮らしをしていたようだ。

しかし風呂は楽しみだ。昨日は恥ずかしがっていたのであまり体を見られなかった。今はもう愛し合っているもの同士なのだから問題は無いはず。

「あ、あの、一人ではいりたいなあー……」

なぜだ！

反対していたらなぜかクイグインネと入ることになっていた。一人じゃ危ないのなら誰かとはいる、そこでなぜその女が出てくる。本当に本当に本当に邪魔なやつだ。

食事を整え、部屋で待っていると、ようやく戻ってきた。湯上りで赤い顔をしている。どこかぼんやりとして、疲れた様子だ。なぜこの状態で歩かせる。しかも寝巻きの着付けがゆるい。クイグインネには任せてもらえない。すぐにマリカを抱き上げた。膝に乗せて食事を口に運ぶが、あまり食べない。

「もうすこし食べたほうがいい。早く大きくなってくれ」

体つきはそこそこ育っているようだったが、まさかこれ以上大きくならないなんてことは……。16年はあちらで育っているわけだからありうる。しかししぐさは幼いし……。ああ、悩ましい。

マリカを寢室において、執務室へ向かう。クイグインネが娯楽小説を渡していたが、どんな本なのか気になる。下世話な内容じゃないだろうな。

「近いうちに役所から人をよこすってさ。会見の時期は一月は先になるってことだ。」

会見の時の服は向こうで用意するそうだ。あたしたちとそう変わらない形だっけ知ってずいぶん張り切ってたな」

「形は似ているが大きさが違いすぎるだろう。そこはわかっているか？」

「儀礼用の服だとマリカには重くて動けないかもしれない」

「非力だよねえ」

「それもマリカの可愛らしいところだろう。」

「召使はこれ以上人は増やさなくてもいいよね。マリカはあんまり手にかかるんじゃないし」

「料理人は一人増やしてもいいかもしれないな。種類も量もそれほどいらんないが、一食増えんとそれだけ手も必要だろう」

「ああ、そうだね。じゃあ募集を出すか。」

「しかしほんとおとなしいよねえ……。何されても嫌がるってことがないし。怪我をしても怒るでもなく」

「クイグインネ、次に噛み付いたら牙を折る」

「こわいねえ。まあ、気をつけるよ。」

「……もしかしたらさ、向こうで愛玩用だったのかもかもしれない。逆らわないようにしつけられてるんじゃないか？」

もしそうだったのだとしたら、それは私にとって都合がいい。マリカは私に愛されていればいい。

「ヘルベルクラン。あんたも、マリカを傷つけるようなことはするんじゃない」

「……そんなことはしない」

生まれるまではためらうことなく言えたはずの言葉が、今ではどこかで引っかかる。

クイグインネ。二の従者。私を留めるお前が、私に必要なのは確かだ。そうやって、時々私に思い出させる。私があの子を傷つけないように。

「あのさ〜今いいかなあ？」

明日からは間に一食いるんだよねえ。作るのはいいんだけど〜買出し行くときはどうしたらいいかなあ。

あとあとマリカ様は私の料理、喜んでくれてるのかなあ〜？」

この女は料理を任せている召使のシイジイマルナだ。この間延びした喋り方は何度言っても直らない。

「一人募集をかける。それがくるまでは他の召使に頼むか」

「マリカの分ならあたしが作ってもいいよ。」

あ、さっきの白っぽい肉、美味かったねえ。また作ってくれよ」

「え〜クイグインネに食べさせるために作ったんじゃないんだけど
お」

それから入れ替わり召使達がやってきて、なかなか報告書作りが進まなかった。

ようやくひと段落ついて、寝室へ向かう。思ったより時間がかかってしまった。

マリカは部屋の明かりをつけたまた、寝台の真ん中で上掛けもかずに眠っているようだった。服が着崩れて足や肩が出て肌が露出している。

そこに吸い付かれたような跡が見えた。

思わず足首をつかんで、よく見えるように広げた。

腿の内側に赤いものがいくつもついている。誰だ私のマリカの柔らかな綺麗な肌にこんなもの残していったのはクイグインネかいつか風呂かあの女口を縫い付けてやる。

「な、なに……？」

寝ぼけているようで、何がおこったかわからないといった顔をしている。可愛くて可愛そうだがこれをそのままにはしておけない。

「これは？」

「え、と……なにが……？」

「この赤いのは？」

「お、ふろで、クイさんが……」

きよろきよろと辺りを見ている。大丈夫だあの女ならいない。黙っているように脅されたのだろうか。

「また噛まれた？」

「うん……で、でも血がよってるだけで」

「噛まれただけじゃこうならないよね」

できるだけ優しく聞いた。

「す、すわれたのかな……?」

おどおどしている。無理強いされたに違いない。可愛そうに。

そんな記憶は残さない方がいい。私を上書きしよう。赤い痣を舐めて舌でこする。くすぐったいのか身をよじる。ああ、こんなところまで。

「あの、ちょ、ダメ、かも……」

「クイグインネに許して、私を拒否するなんて言いませんよね?」

マリカは可愛い。細い、小さな、可愛い声で鳴くということがわかった。

今日は、私の担当のお役人さんと会うことになった。またしてもあの開放感にあふれた部屋にやってきた。この部屋は応接間になるらしい。

クイさんとヘルさんが二人揃って近くに立っている。改まった雰囲気緊張する。

「本日の面会者、ウイヴィエルイとキュジイギユジイ克蘭の2名です」

名前を覚える気はもうない。無理だ。別に私の頭が悪いわけではない。複雑な響きすぎるだけだ。

呼ばれて入ってきたのは、わりと年配の人と、まだ若い男性の二人組みだった。年配の人のほうは、白みがかかった青い髪、ロマンズグレーといたくなるような紳士然とした渋いおじ様だ。若い男の人は、眼鏡をかけ、紫の髪で、女たらしっぽい。当然どちらも、青い皮膚の人たちだ。このお屋敷にいる人も皆青い人たちで、まだ他の種族の人を見たことはない。そのうち会ってみたい。特に大きな獣の姿をした人たちに会うのが楽しみだ。もふもふしたい。

「はじめまして、マリカ様。ウイヴィエルイでございます。聞き及んでおりましたとおり、大変愛くるしいお方で、こうして出会えました幸運に胸が高鳴っております」

キラッと牙が光る。魅力的……なんだろうと思われる笑顔だ。なんてたらしなおじ様だ。声も朗々として渋くて素敵なのに、なんだか残念な人だった。

「万理歌です。あの、様とかはいいので……よろしくお願いします」
つい頭を下げそうになるのを我慢した。お辞儀というのはいここで
はしないものらしい。こらえて、おじ様に視線を向けると俯いて胸
を押さえていた。

「え、あ、どうしたんですか？」

病気だったらどうしよう。私が慌てっていると、顔をぐわあつと勢
いよくあげた。怖い。

「なんて可憐なお声でしょう！ 小鳥の歌声のようですね。いつか
私のために歌ってくださいませんか」

そんな褒められるほどの声でもないと思う。大体、歌は好きだっ
たけど、得意でもなんでもない。友達とカラオケならともかく、人
前で歌うのなんてごめんこうむる。

「あの、おじ様？ 私、そういうのは……」

「ウイヴィエルイ殿、戯れが過ぎます」

もごもごとお断りしようとしていると、ヘルさんが助け舟を出し
てくれた。たとえ偉い人にも、嫌なことは嫌だつて言っていていいと
は言われてるけど、ノーと言えない日本人の私には難しいものがある。

「せつかく私に話しかけて下さっていたのに……。従者殿は了見の
狭い方だ。」

マリカ、ウイヴィエルイをどうぞお引き立ててください。私はあな
たの僕です。なんでもご用命ください。すぐに参ります」

従者に続いてしもべができた。従者としもべって同じものじゃないのか。ここまで親切丁寧な扱いだと恐縮してしまう。というかあまり人に囲まれるのも困る。

「キュジイギユジイ克蘭をこの社付きにいたしました。どうぞ存分にお使いください」

「よろしく願います」

眼鏡の若者は表情も変えず、淡々としている。なんだか今まで出会った人たちが濃すぎて新鮮だ。

庭、というか原っぱでお弁当を広げる。私以外はお昼は食べないらしいので、お弁当を作ってもらうことにした。爽やかな気候なので、ピクニック気分を外で食べるのが気に入っている。

今日はヘルさんはさっき会ったお役人さん達と話があるらしくて、クイさんと一緒だ。

「あのお役人さん達、しばらくいるの？」

「ウイヴェイエルイは明日には帰るって聞いてるけど、キュジイギユジイ克蘭はここに残ることになってるね」

「え、ここに住むの？」

「宿舎に入る予定だけど、気になるなら村にでも行ってもらうよ」

宿舎はお屋敷のすぐ側に建っている長屋のことだと思う。そこにお屋敷で働いている人が住んでいる。

色々お世話になっている身分でどこかへ池なんていえるわけがない。大体、村って浮遊艇で1時間かかるらしいじゃないか。そこから通うのは大変だろう。通う必要はないのかな。まあ、どちらにし

る私が何か言うことじゃない。

「ううん、気にならない。」

あのおじ様、すごいね。しもべなんてはじめて聞いた」

「いつでも呼びつけて貢がせたらいい」

貢がせるって……。そんなこというクイさんは結構悪女なんじゃないだろうか。

大体そんな小悪魔なこと、私には出来るとはおもえない。

「ありがとうおじ様、とでもいって頬に口付けてやれば大喜びだよ」

「むりだよー」

「しもべになりたいってのは、そういうことだよ。主のためになんでもしたい、させてください、って向こうから言ってるんだから、使ってやればいい」

さすが異世界。私の常識とはかけ離れていて戸惑う。でも、あんなに年上の人をこき使うようなまねはできない。なんだか偉そうな人だったし。

「そういうの、普通なの？ こっちは」

「あたしは言われたことないけど。美人の友達をよく侍らせてたねえ。」

ウイヴィエルイだって、ありや普段は侍らせる側だ。いい男だよねえー」

クイさんがそういって、ふう、とちよつと色気のあるため息をついた。確かに素敵なおじ様だった。蛾だのスライムだのを褒めるヘルさんを見ていると美意識の違いを感じたものだけど、この様子だと変わっているのはヘルさんのようだ。

「渋いおじ様だよ。声も素敵だったし」

「前にヘルベルクランの声も褒めてたね。マリカはいい声に弱いのか」

「えっ、そ……そんな、ことは……」

ああー、なんだろう、このこいばなでもしているかのような、気恥ずかしさは。

声が好きって言ってもそんなのじゃない。と思う。

「ヘルベルクランももてるんだよ。社の若い召使に色目使われてるし」

ヘルさんは優しいし、顔も甘い感じだし、女の人にもてるのはなんとなくわかる。いや、なんとなくじゃなく、まあそうだろうな、と思うだけだ。

「あまり相手にもしてないけどね」

うつむいた頭を持ち上げられて、唇に軽くキスされた。クイさんにキスされたのは、初めてかもしれない。クイさんはいつもは、歯型がつかない程度のおまがみをよくしてくる。

私は立ち上がってクイさんの頬に口付けた。今までヘルさんにしかしたことなかったけど、別に他の人にしちゃいけないわけじゃないはずだ。

「可愛いね、マリカ」

クイさんの声は笑いを含んでいるようで、からかわれている気分になった。

「もうしない！」

急に恥ずかしくなって、そっぽを向いた。クイさんはもう完全に笑っている。笑い上戸だ。しかも私にはよくわからない笑いのツボを持っている。ごめん、と言いながら頭をなでてくれたけど、絶対、悪いと思っていない。

夕食はお役人さん達と一緒に食べることになった。会食ってやつだろうか。こっちのテーブルマナーなんて全然知らないんだけどいいのかな。いや、元の世界でも正式なのを知ってたわけじゃないけど。

応接間に食事が並べられていた。いつもの大きなクッションに座る。今日は流石にだっこはされなかった。右側の少し後ろにヘルさんが、左にはクイさんが座っている。向かいにおじ様と眼鏡さんが座ると、食事が始まった。

「いつもそのようにして召し上がっているのですか？」

いつもと同じです、はい。いや、当たり前のようにヘルさんとクイさんが私に食べ物をお口まで運んでくれたので、人がいるのにいいのかと思いはしたんだけど、いつものとおり、食べさせてもらってしまいました……。やっぱり駄目だね、違うよね。恥ずかしい。

「あ……」「ごめんなさい」

「いいえ、いいのです。私にもやらせていただきたいのですが」
「……え」

にじにじよってきた。おじ様に？ 食べさせて？ もらうの？ 私？ なんて！

「従者のお二人が本当にうらやましい。今日だけなのですから、私にその場所を譲ってくださいね？」

「嫌です」

「ウイヴェイエルイ、席へ戻ってくれないか。マリカも怖がってる」

食事が始まったばかりだというのに空気が悪い。その眼鏡さんも、上司の人が暴走してるんだから止めてくれないと。しかし、にじり寄ってくるのはとまったけど、そこからどなたも一步も動かすにらみ合いに。

これをまとめるのってもしかして私の役目？ うわー、気が重い。

「あの、私、ここでの食べ方をよく知らなくて、二人にはいつも手伝ってもらってたんです。」

でも、あの……一人で食べます……」

わーん、無理だよー。みんなの視線が突き刺さってくる。頑張ろうとは思ってたんだ。結果はこれですけど。

「マリカ様がお困りですよ。ウイヴェイエルさん」

まさかの助け舟は眼鏡さんだった。

しかしおじ様はじー……と私を見たままなんだか悲しそうな目で私を見ている。どうしよう。なんだかもものすごく慰めないといけないような気がする。

「お、おじ様……あの、あの、あーん」

とっさに、一番近くにあったものを手にとって差し出した。私用に小さく切られた野菜スティックだ。

体を思い切り伸ばして、口の側まで持っていく。そうしたらぱくつと……ぱくつと、私の指ごと食べられた。舐られた。

すぐにヘルさんが指を引き抜き、フィンガーボールで洗った。そりゃあもう念入りに。それ、失礼には当たらないのかな。

なんでかおじ様はどんどん近づいてくる。なんだかうっとりした

表情で、色気が、そう、色気を撒き散らしている。私の腕をつかもうとしたところで、ごすつという大きな音がした。ヘルさんが、おじ様の頭を殴ったようだ。

「離れる」

「……本当に、なんて了見の狭い……。マリカ、側に寄ってもかまいませんね？」

「ただただめです！」

思った以上に強い調子で言ってしまったが、少しつまらなさそうな顔をしただけです。戻ってくれた。ごめんなさいなんかもうほんとはごめんなさい。だってヘルさんご機嫌斜めなんです、だっこされちゃって腕の中にはまりこんで動けないんです。

ヘルさんには締め付けられ、クイさんは何事もなかったかのように私の口に食事を運び、おじ様には熱のこもった視線を向けられ、眼鏡さんは淡々と空気のように。ろくに会話もなく会食は終了した。

疲れた。部屋を移ると、ヘルさんとクイさんにお説教された。

「マリカ、あんなこととしてはいけない。私だってしてもらったことがないのに、私にだけやっていれば良いんだ」

「ウイウイエルイに奉仕しなくていいんだよ。ちゃんと主としての自覚を持ちな。つけあがるだけなんだからね」

お客様に失礼だったとか言うことで怒られるのかと思いきや、こちの人はお説教するポイントまでずれている。

いない。いないいないいない。

朝、起きたらヘルさんがいなかった。いつもは目が覚めるとすぐに、おはようっていつてくれるのに。

「ヘルさん……？」

広い部屋、広いベッドに一人きり。怖い？ 寂しい？ 世界に一人取り残されたみたいで、不安に体が震える。ドアまで走って、開けようとするけどあんまり重くてびくともしない。たん、たんとドアを叩く。誰もいないの？ 私一人？

「うえええ……」

へたり込んで、涙が出るに任せる。いない、いないよ。ずっと側にいてくれるって、約束したのに。

「マリカ様、何かありましたか？」

ドアが開いて、警備の制服を着た人が顔をのぞかせた。いない、いないと騒ぎ立てる私に、困った顔をしている。戸惑いがちに、頭をなでて慰めてくれる。でも違う。私が欲しいのは。

「マリカ」

「……へるさん……どこ行って、わたし……いないって、さがしたのにつ、うそつき」

「ひとりにしてわるかった」

「ほんとだよ、わるいよ、だめなんだから……だめなんだから」

すがりつくと抱き寄せられて、こぼれた涙を舐め取られる。私は壊れたおもちゃみたいに、同じ言葉ばかりを繰り返した。いなかっただ、だめ、どうして、うそつき。

なかなか涙が止まらなくて、舐められすぎてなんだか顔もふやけてきた気がする。

「どこお、どこいったの？」

「ウイヴェイエルイたちと話を少し。もういいんだ。

着替える？ それとも今日は寝台で過ごそうか」

「うん……きがえる。見送らないと、だめだよね」

「必要ない」

「んー、でも……これからお世話になる人なんですよ？」

別に見送りに行かなきゃとそこまで思っているわけではない。落ち着いてくると、なんだか無性に恥ずかしくなってきたからだ。なんだかおかしいくらいに泣き喚いてしまった。寝起きに姿が見えないからって大騒ぎって、子どもじゃないんだから。大体、添い寝をされるたびに一人で寝れるよ、なんて言ってたというのに。こっちに来てから幼児退行してる気がする。

っていうか……呼び出しボタンだってあったんだけど……すっかり頭から抜けていた。落ち着いてそれ押せばよかっただけじゃないか。

「ごめんね、おかしいよね……ヘルさんだってやることいっぱいあるのに。大騒ぎして、恥ずかしい」

「いいんだ、マリカ。離れた私が悪い」

「あんまり甘やかすとわがままになっちゃうよ、困るよ」

「可愛い、マリカ」

分厚い舌が口に入ってくる。こうしていたら、ずっと離れずにいて、一緒だってわかるのにな。首に腕を回してしがみつく。舌を押し付けてみるけど、私のじゃ小さすぎて、牙を舐めるくらいしかできない。寂しい。

ヘルさんがよくこうするのは、私といつでも一緒につながりたいと、思っているってことなんだろうか。そうだったら、いいのに。

見送るためにおじ様達のいる所へつくとすぐ、おじ様が私のところへ足早にやってきた。

「そのお顔はどうなさったのですか。腫れているではありませんか。目も赤くなつて……」

おじ様が心配そうに顔を近づけてくる。顔を洗ってタオルで冷やしたりしたんだけど、泣いたことがバレバレで恥ずかしい。クイさんも隣にきて、頬を指で触る。

「大丈夫です……心配かけてしまって、ごめんなさい」

おじ様はじつと探るように私を見つめて、私の手を両手で包んで持ち上げる。そしてにっこりと微笑んだ。

「次お会いするときは都にお連れするときですね。そのときを楽しみにしております」

浮遊艇に乗り込み離れていくおじ様に、手を振る。ヘルさん達は不思議そうな顔をしていた。こっちではしないのかもしれない。

「ダイエットします」

私は宣言した。

「それ以上やせるつもりなのか？」

「駄目だ、折れてしまう」

「でも今度お披露目するんでしょう？ そのとき太ってたら恥ずかしいし。運動して、体力つけるのは、悪くないよね」

本当は、あのたくさん食べさせられるのもやめたい。んだけど、そっちは反対されそうなので、せめて運動したい。ここに来てから食べては寝るの繰り返しで、だらだらすごしてるわけで……ちよつとぶよつと、してきたと思う。私のこのぶよつと具合が大好きな人達の意見は受け付けない。

「運動、ねえ……それならまあ、いいかもね」

「危ないだろう。怪我でもしたらどうするんだ」

「部屋にこもってるのも退屈なんだろう。ちゃんと食べて動くなら、あたしは賛成だよ。」

動きやすい服に着替えようか」

「うん」

ものすごく心配そうなヘルさんは、とりあえず放っておく。心配するなっついても心配するだろうし。かといって引きこもってるわけにもいかないんだから、仕方がない。

Tシャツと短パンに似た服に着替える。すこし大きい。本当はクイさんみたいに、ピタっとした着方をするものなんだろうけど、サ

イズがないんだと思う。ぶかぶかだ。いくつか服を見せてもらったんだけど、どれも子供用でさえ幅が大きい。あのぐるぐる巻く服だと、そこら辺は調節できるので便利だ。一人で着られないけど。

庭を駆け回り、ボール遊びをした。二人が付き合ってくれたけど、運動能力に違いがありすぎて遊びにもならない。いや、遊んでるんじゃないんだから良いのか。

「警備のひと、見られるの恥ずかしいなあ」

「あまり離すと何かあったときに役に立たないからねえ。社にいた間はそう悪いことは起こらないと思うんだけど、一応ね。都に行くときはずっと誰かがついてることになるから、少し慣れて欲しい」

外に出るときは、少しはなれたところに警備の人が何人かついてきている。ぷらぷら何遊んでるんだって感じですよ。こんなのにお付き合いさせてごめんなさい。楽しく暮らすのが私の仕事、といわれている。そうするとたくさんマナが作られるとか。でも、好きにしているといわれると結構困るものだ。

「今度、あいさつに行つていい？」

近くに住んでるって聞いたし、ぶつちやけ毎日暇なのだ。ダイエツトと称して運動ばかりするのもつらい。一日中走りまわるほどの体力もない。

警備してくれているのがどんな人たちか知りたいというのもある。

「マリカが行くのか？」

「うん。……でかけてみたいな」

ヘルさんが不満そうだったので、ちょっと甘えてみた。擦り寄っ

て腕に抱きつき、おねだり。……小悪魔？ いや、恥ずかしいよ。恥ずかしいけど、そんなの気にしてたらここでは生き延びれないのだよ。

「あたしにも」

クイさんが両手を広げて待ち構えている。首にぎゅうとしがみつき、耳元に顔を摺り寄せる。

しかし、私今すごい汗かいてるな……こんなんで抱きつくってどうなの。いやでもそんなの今更だった。二人とも気にしてなさそうだし、まあいい。

「最初の出かけ先としてはちょうどいいんじゃないか？ 町に行くより把握しやすいだろう」

「……………そうだな」

クイさんとすりすりし合っていると、脇をつかまれ引き出された。手が大きすぎて、こついうことされると胸に当たってるんだけど、まったく気にされることはない。年若い乙女だと意識されていないというのはどうしたものかなあと思ったりもするけど、気楽ではある。それもどうかと思わないでもない。

兵営に出かけることになった。従者の二人に、お役人さんに、警護の人がたくさんという大所帯だ。こんな大層なことになってしまつとやらなきやよかつたと後悔でいっぱいになるが、ここでくじけてはいられない。楽しい異世界ライフにお出掛けは必須だ。出かけるのに慣れればそのうちに一人でうろうろが許されるようになってなるかもしれない。こんなのは最初だけに違いない。頑張ろう。気をしっかり持て。

浮遊艇に乗り込み、クイさんの運転で出かける。他の同乗者はヘルさんと警護の人が一人だ。前と後ろに警護の人とお役人さんが乗つた浮遊艇がついている。

だだっ広い草原を走る。あまり代わり映えのしない景色が続いてるんだけど、日本じゃなかなか見られない風景なのもあって、時々警護の人にこれから行く場所の事を聞いたりしつつ、外を眺めていた。

……兵営というのはなかなかすごいところだ。たくさんの方がぴしっと並んでいて、私を出迎えてくれた。皆さん大層大きくて、がつちりしている。ただでさえ大きいというのに、さらに大きい人が集められているようだ。意外に女性が多い。シムクイエの人は体格に男女差が少ないみたいなので、兵隊さんも男女問わずなのかもしれない。あとは、何人が獣姿の人がいた。本で見たときは犬っぽい感じだったんだけど、そういった姿ばかりではないようだ。熊そっくりの人がいた。こわかわいい。相撲したい。無理か。圧倒的な差をつけて負ける。

「こんにちは……いつもありがとうございます。今日はよろしくお

願います」

視線がびしびし突き刺さる中、あいさつをした。思わず90度のお辞儀をしてしまった。っていうか、どうしたらいいのかな。普段はできないからちよっとお話してみたりしたかったんだけどな。こんなにかしこまられるとちよっと困る。でも兵隊さんってこういうもののかな。

中年のおじさんがこちらにやってくる。

「お越しいただきありがとうございます。むさくるしいところで恐縮です。部隊長のテルデルミヤナです。よろしくお見知りおきください」

「マリカです。こちらこそよろしくおねがいします……」

両手を差し出してきたので、私も両手で握手をする。握手というより指をつかんだって感じですけど。ああしかし驚いた。この人女の人だ。おじさんか思ってたごめんなさい。いやでも胸もないけど、髪が刈り上げて超短髪で、背も大きいしごっつい……。声は女の人……。だともうけどもう自信がない。

「本日は見学をご希望と伺っております。私が案内を勤めさせていただきます」

見学ということになってるのか。まあそれでもいいか。

「ここにいる方たちで、全員なんですか？」

「そうですね。他には社に残した分と、見張りが何人かありますが、それ以外は皆集まっております。お会いできるのを楽しみにしております」

「……あの、獣姿のひともいるんですね」

獣姿、のところは失礼かもとおもって小さな声になった。なんていう種族だったっけ。覚えにくいとか言わずにちゃんと覚えておけばよかった。これからは覚えるようにがんばろう。

「ゲオルですね。呼びましょうか。」

エルテ、ユオー、マリベナ、ここへ」

狼さんが二人と熊さんが一人やってきた。青い人たちより背が低いけど、私よりは当たり前のように大きい。皆さん二足歩行だ。ズボンに靴を履いている。かわいい、でかくて怖いけどかわいい。もっふもふ。耳とか尻尾とかおなかとかさわりたい。うちはマンシヨンでペット不可だったから、動物を飼ったことがない。もっふもふを触ることに憧れがある。こっちではお願いすれば飼えそうだけとお世話を誰がするのか。私自身をお世話してもらってる状況ではだめだな。とにかくもっふもふしてみたい。

「はじめて見ました……や、社にもきていたんでしょうか。私気が付かなくて」

「警護は何組にも分かれてやっていますから、そのうちお目にすることもあったかと思えますよ」

狼さんがしゃべったあああ！ 低いけど、男女がわからない響きのいい声。

「お名前は？」

「ユオーと申します」

もう一人の狼さんがエルテさんで、熊さんはマリベナさんだった。獣の人は短くて割りに覚えやすい名前をしている。

「さ、さわっ、さわってもいいですか」

意を決してお願いしてみる。駄目かな駄目かな失礼かな。

ユオーさんはチラチラつと辺りを見回して、口をにーつと大きく広げた。

「どうぞ、ご存分に」

抱きついた。胸の毛がふつかふかです。ユオーさんはグレーの綺麗な毛並みの狼さんだ。いい匂いがする。腕を背中に回して、思う存分撫で回した。背中の毛はやや固め。

次は茶色と白の毛色の狼さんに突撃した。ちよつと柴犬っぽい。背伸びして頭をなでる。ぴこんとたつた耳を揉んでみる。耳が向きを変えるのがおもしろい。

あとは熊さん。熊さんすごい肉球すごい。背中に回って抱きつく、すこし前に体をかがめてくれたので、背中に乗るような感じになった。なにこれーリアル金太郎さん。乗り回したい。ブイブイいわせたい。

ひとしきり触ったので、離れて、顔を上げてあたりと見回すと…クイさんが口を押さえてぶるぶる震えて笑っていた。うん、これはなんか予想ができたよ。ヘルさんが泣いてるのは予想ができなかったな。

「ど、どうしたの……?」

側によつて腕をちよいちよいと触ると、ぎゅーとしがみついていたので、腕をとんと叩いて慰めた。

引きこもりな私が他の人と交流できてるのを見て感動したとか? ヘルさんって過保護で心配性だからありうる気がする。……違う

か。なんだろう。

「大丈夫だよ」

顔に口を寄せて、私がいつもされてるみたいにこぼれた涙を舐めた。あれ、しょっぱくない。無味無臭で水みたい。そういえば、前に涙に味がついてるとか言われたような。

「マリカ様。ここは社ではありませんよ」

眼鏡さんに淡々と言われた。そうでした。たくさんの人に見られているんです。気が抜けすぎてるなあ。気をつけよう。赤くなつた顔を隠すように、深くベールをかぶつた。邪魔だと思ってたけど便利だ。

ヘルさんに抱きかかえられ、隊長さんに案内されて辺りを見て回った。抱きかかえられているのは、もちろん私の歩くのがものすごい遅いから……？ 足の長さが違いすぎて困る。

訓練所に、寝泊りするところ、食堂、娯楽室、浮遊艇のあるガレージなどがあり、かなりの広さだ。ガレという騎乗できる鳥がいた厩舎もある。ダチヨウをものすごく頑丈そうにした感じ。もちろん、青い人が乗れるくらいなのでものすごくでつかい。小象くらいはありそう。

「今では儀式の時に乗るくらいですが、私たちは皆乗れるように訓練しています。」

マリカ様も乗ってみますか？」

「うーん……ちょっと、怖いです。大きいので」

そのうち乗ってみたいけど、今は思い切れない。

「さっきはあんなに大胆でしたのに」

隊長さんが楽しそうにくすくすと笑う。こういうところをみると、柔らかい雰囲気やっぱり女の人っぽいなあ。

獣の人たちは、こちらでは普通に人扱いな訳で。わかってはいてもちよつとペット感覚だったのは否定できない。そうでなければあんな風に触らないよね。落ち着いてくると、失礼だったかなとか考えてしまう。はしゃいでしまったのも恥ずかしいし。

「私のいたところには、ああいう人たちはいなかったから……つい珍しくて。気を悪くされたでしょうか……」

「いいえ。私もよく撫で回します。ユオーの毛並みは特に手触りがいいですね。本人も手入れに気を使っているようです」

なんだってー！

隊長さんも。もふもふし隊は世界共通か。

「通りで……ふわふわでしかもいい匂いがしました」

触っていいならもつと触りたい。帰る前にまた触ったり……駄目かな。お屋敷で会ったら頼んでみようかな。警護中は無理か。お仕事なわけだし。

お昼をだいぶ過ぎてしまったので、部屋をひとつ借りてお弁当を食べた。周りを大きい人に囲まれて一人で食べるのは大変居たたまれない。いくら朝夕とたくさん食べるからって途中でおなかが減らないんだらうか。この方々は。

「我々と変わらないものを食べていらっしやるんですね」

お弁当をみて、隊長さんは意外そうに言った。今日のお弁当の中はゆで卵に、ハムとサラダ、よくわからないものにやっとした食べ物、カットフルーツになっている。

「そうだ。ここは他の種族がいるだろう。マリカが食べたがっていたごはんやパンというのに似たものを食べているかもしれない。話を聞きたい」

「先ほども会ったゲオルの三人とエーリエーが一人しかいないが、それでいいだろうか」

「かまわない」

ヘルさんが以前話していたことを覚えててくれたようで、隊長さんに四人を呼んでくれるように頼んでくれた。食べたい食べたい炭水化物。これがないと食べてもなんか物足りないんです。

さっきのもふもふトリオと、鳥人間さんがやってきた。鳥人間さんははじめてみた。さっきは別のところにいたんだろう。大きな羽を持っていて、背は他と比べると小さめ。とはいっても私より大きいけど、体は細い。くちばしがついてて、つるつとした肌に見える。羽の生えた河童っぽい。もちろん頭のお皿はない。頭にはふわふわしたヒヨコっぽい毛が生えている。

「おおっ、ちっちゃいですねー！ 僕ちようどよくないですかー？ どうですかー？」

……はい？ 腕というか羽でばっさばっさと私の肩を叩く。

「好みですっ、つがいになってくださうおっ！ なにするんですかあぶないじゃないですかー」

「私のマリカにいいよるつもりかそのうっとおしい羽すべてむしつてやる」

「申し訳ありませんよく言い聞かせておきますから」

隊長さんにけられそうになった鳥さんが、熊さんに後ろから羽交い絞めにされていた。ヘルさんの顔が怖い。

しばらく騒いでいたけど、落ち着いたところでパンやごはんの説明をしたら、鳥さんが羽をバサバサさせてアピールを始めた。

「そういうのしってますしってます！ 僕、小さいころよく食べたなあー。故郷の味ってたまに食べたくなるんですね。材料あれば作れますよ」

調理室で作ってもらったそれは、ふくらみの悪いホットケーキ、もしくは分厚いクレープ。

「ね、ね、どうですか？ これでしょ？ ペカプっていうんですけどー、久しぶりだなー」

鳥さんが喋りながらつまむのでどんどん減っていく。

「マリカ、これがパンなのか？」

「うーん。パンとは違うけど、これに似た食べ物あるよ」

食べるとほんのり甘くてモチモチしている。おやつによさそうな感じ。こっついうお菓子系の食べ物ってこっちではでてこないんだよね。

「……美味しい。なんか懐かしいな……」

しみりししながら食べていたが、鳥さんがうるさかった。あ、柴犬さんがくちばしふさいだ。

「フタフ粉を使った食べ物なら私も知っていますよ。サフサフといまして、このように柔らかくはありませんが、日持ちしますし、甘くてこど……年若い者にも人気です」

熊さんが教えてくれたサフサフを翻訳力チューシヤで辞書検索すると、どうもクッキーっぽい。たべたいーくつきーたべたいー！お菓子あるじゃないか。甘いものって言ったたら果物しかでてこないから、ないのかとあきらめていた。

「食べたいなあ。作り方は知ってますか？」

「……いえ、私はあまりそういうものは作りませんでしたので……。申し訳ありません。都に行けば、ゲオル料理の店もありますから、食べることもできるのではないでしょうが」

「都に行くのが楽しみになってきました。ありがとございます」

ちなみに、自分で作るという選択肢は今のところない。だって料理なんてしたことがないのに、まともなものができるとは思えない。用は済んだとばかりに出て行こうとした獣サン＋1を、引き止めて三人にハグをした。鳥さんは……うん、ごめんね。あまりに騒がしくて苦手だ。

お屋敷に戻って、部屋でのんびり本を読んでいると、ヘルさんがくつついてきて言った。

「私にもゲオルのように毛があればよかったのに」

「……………どうしたの、急に」

「あんなに楽しそうに抱きつくマリカは初めてだった。あの暑苦しい毛皮をうらやましいと思ったのは初めてだ」

「ヘルさんに毛皮……………」

雪男を想像した。……………ないですね。

「今のままのほうがいいよ」

抱きついてたのがうらやましいとのことだったので、首に腕を回してぎゅうっとした。そうしながらも、あの狼さんのもふっぷりは良かったなあなどと思い返していた。

今日から都行きだ。クッキーだ。ようやくお菓子が食べられる。興奮してなかなか寝付けなかった。

迎えの飛行艇は、すでに近くに降りていた。

「ウイブイエルイさま、お久しぶりです」

「おや、おじ様と呼ばれるのもよかったですね、名前を覚えてくださったのですね。敬称などつけなくてよろしいのですよ」

「最近、言葉を勉強してるんです。偉い人にはさま、つけるんですよ」

「マリカがそう呼ばれることはあっても、呼ぶ必要はありませんよ」

そう、色々思うところあって、ちゃんと名前を覚えることにした。言葉の勉強も始めた。はつきりいつてやりたくなかったけど、やっぱりこちらで暮らしていくなら、いつまでも知らん振りはできないと思ったのだ。やっぱり失礼だし。単語帳なんて作ったの、受験の時以来だ。勉強を始めて半月ほどだけど、進み具合はあまりよろしくない。まあ、会話にはならなくても単語を知っていればなんとかなるはずだ。

飛行艇は、外観がまるつとしていて気球船に似ている。ただし気球船であれば空気が入っている部分にも部屋があって、かなりの広さだ。警護の人も一緒についてくるので、結構な人数が乗り込む。貸切らしい。

離陸し、上空で安定するまでは席に座ってなければいけないのは、飛行機と変わらない。落ち着くとおじ様にお招きされたので、ラウンジに行った。固定されたソファに座る。でかすぎて背もたれに届かないので、ちょっと辛い。

「呼んでくださらないので寂しい思いをいたしました。都にいる間は私と過ごしてくださいませね」

流し目を食らった。色気が駄々もれている。隣に座り、背中から腰に手を回して抱き寄せられる。挙動不審になる。しもべ発言はただ有効だったのか。でも私に女王様プレイは無理です。

「え、あ、ハイ……。あの、でも、都に行ったら、ゲオルの食べ物のお店に行きたいと思ってるんですけど、いいですか？」

「それならご用意してありますよ」

茶色い食べ物がいくつもお皿に乗せられて目の前にやってきた。

「これがサフサフになります。いかがですか」

指でつまんで口元に寄せられる。ああー、香ばしくて、甘い、いいにおいがする。食べてもいいのかな？　すぐ近くに膝をついて座っているヘルさんを見る。すると小さく首をかしげて、うっすらと笑った。

「マリカ、何を食べたい？」

「これ、サフサフ、食べてみたいなあ。ダメ？」

ちよいちよいと口元にあるサフサフを指差す。うなずいてくれたので、ひとくちかじる。おおー、クッキーだ。

「美味しいです！」

私が求めていたのはこれだよー！　思わず笑顔になる。

「全部マリカのものですから。たくさん召し上がってください」
「ありがとうございます！」

ちよつと頬張りすぎた。

塩味のポン菓子とか、ジャムサンドクッキーとか、他にも色々あった。みんなして次から次へと差し出してくるので、味わう暇もない。もつたいたい。

「皆さんは食べないんですか？」

「私は先に味見させていただきましたから。マリカはこういった味を好むのですね」

「ひとつもらってもいいかい？」

「うん。これ、美味しかったよー。どう、どう？」

「……う、ん……へ……濃いのかねえ……？」

クイさんには不評のようだ。残念だ。こっちの料理ってあっさりした味付けのものばかりだからなあ……それになれてるとくどく感じるのだろうか。

「これキャラメル！　キャラメルだー！」

舌の上で転がすと、もつたりとした甘さが広がる。久々の味に感動する。

「マリカ、私にも」

ヘルさんが私の口にくっつけてきたので、唇を開いて舌を受け入れる。キャラメルをしばらくこころこころと転がしてから、離れた。た。

「おいしい？」
「甘い」

美味しいといわないところを見ると、好みではないらしい。味覚が違うのだから仕方がないのかもしれないけど、こつも共感が得られないとおもしろくなって口が尖る。ゲオルの人はいないだろうかきつと一緒に美味しく食べられるに違いない。辺りを見回すと、少しはなれたところに見知ったグレーの毛並みが見えた。あれはたしか、ええと……ユオーさんだ。

「ユオーさん」

声をかけてみると、こちらに来てくれた。

「お呼びですか」

「これ、これ、美味しいんですよ。食べてみてください」

クッキーを差し出すと、ひとくちでガブつといった。よかった指は無事だった。

「ね、ね、どうですか？ 美味しいですよね」

「そうですね。初めて食べましたが美味しいです」

「あれ……これ、ゲオルの料理じゃないんですか？」

「ゲオルは地域差が大きいですから……私のいたところでは見かけませんでしたね。こちらのシェイムはよく食べましたよ。懐かしいです」

シェイムといいながらキャラメルを指差す。そういえばサフサフを教えてくれたのは、この人じゃなかったな、と思い出しながら、

キャラメルを大きな口にぽいと入れた。

「これ、私のいたところではキャラメルっていったんですよ」

「ああ、懐かしい。シウムクイエはこういった濃厚な味は好みませんからね。私も久しぶりです」

「……私も。久しぶりで、懐かしいです」

向こうと似たものを見つけるとき、嬉しいけど寂しさもあって、胸が少し痛くなる。

ユオーさんをふと見ると、なぜか見詰め合う形になってしまった。どうしよう、目をそらしたら負けだ。野生の獣じゃないからいいのか。大丈夫なのか。ガブツとされたらどうしよう。おどおどしてしまっ。

「び、美形ですね？」

何を口走っているのか。なぜ疑問系なのか。しかし目はそらせない。

「ありがとうございます？」

口をにーっとして、疑問系で返してくれた。変なこと言いだしてごめんなさいユオーさん。

「マリカはゲオルがお好みでしたか？」

「は、いえっ、そういうわけではないです。いや可愛くて好きですけど！ 向こうにも似た生き物がいて、その基準からすると美形って言うかすっごく毛艶もいいですし！ そ、そそ、それで、それだけ、です……」

ああー、何言ってるんだ。ヘルさんにしがみついて顔を隠した。ドツポにはまるってのは、こういうことだなあ。

「マリカの基準で私は美形なのでしょうか」

「お、おじ様は、も、もちろん素敵です……。あう！　へるさんもかっこいいよお！　すき！」

素敵、と言った辺りで、私を囲い込んでいる腕にもものすごい力がかかった。絞め殺されるかと思った。すき、までいったあたりでもっと力がかかった。しぬ。

クイさんに助けてもらった。ベールは脱げたし、髪の毛はぐしゃぐしゃだ。髪を整えてもらって、一息つく。ヘルさんが腕を伸ばしてくるのを、クイさんが叩き落としていた。苦しかったし、しばらくそっしてればいいんだ。

「まだしばらくかかるんですよね」

「4時間くらいでしょうか。浮遊艇だと1日かかりますから、早いものです」

「時間があるなら、少し私の勉強に付き合ってくださいませんか？」

「もちろんかまいません」

にっこり笑って言うてくれた。翻訳カチューシャを取り外してポシエットにしまうと、単語カードを取り出した。

「ごにちはー、ウイブイエルイさま。たえる、おいしおいし、ありと」

おじ様は首をかしげている。……。あれ。通じてない？

「こんにちは。マリカ。たえる、は何かな」

「たえるー、たうえる、くち、はあいるー」

「たべる？」

「たえ、る。た、べ、りゆ」

「うん、たべる。おいしかったね」

「たーべえる、おいしい、おうい、しい。あいがと」

ゆっくり喋ってくれるので、なんとかわかる。難しい言葉もないし。なんだかここにこしてるし、結構うまくできてるのかも。

「はなす、うりえしい、ウイブイエルイさま、のろい、あかる、いい」

おじ様は私のつたない言葉にいやな顔ひとつせず、むしろにこやかにお付き合いしてくれた。途中からヘルさんとクイさんも加わって、和やかに話をしながら過ごした。

ちよつとこつちの言葉に自信がついた。これからも頑張ろう。

そろそろ町が見えるといわれて、その前に窓から下をのぞく。たくさんの屋根が見える。大都会じゃないか。町を歩いたりできるかな。偉い人に会うのは緊張するけど、久しぶりにお買い物ができるかもと思ったらわくわくしてきた。

「マリカ、絶対に一人で出歩いてはなりません。都は大変広いので、すぐ迷ってしまいます」

「はい。お店、見て回るのはいいですか？」

「お望みであればもちろんかなえて差し上げたいのですが、すぐに囲まれてしまいかもしれませんよ。取材の申し込みもたくさん来て

いたのですが、人と接するのが苦手と聞いておりますので、こちらで断っておきましたが……いかがいたしましたしょう」

「しゅ、しゅざい？ え、私にですか？」

「はい。生まれてより今まで、新聞にマリカが載っていない日はないくらいですよ」

「新聞!？」

びっくりしてヘルさんを見た。どうということ？

「毎日記事がかけるほど情報は渡していないはずだが」

「もちろんキュジイギユジイクランから報告を受けて。私のお気に入り、庭で食事をするマリカですね。この小さな細い指が果物をつまんでいるところなど、うっとりしてしまいます」

「キュジイギユジイ！ 提出する写真は選べって言っただろう」

「きちんと選んでいます。見せられないようなものはちゃんと私専用にしてしまっておりますから」

「破棄しろ」

「嫌です私のものです」

「ちよ、ちよっと待ってください！ いつの間に写真取られてたんですか？ え、え、新聞って本当に？ 私のこと載ってるんですか？」

「いつでも狙っています」

「寵児のことは皆関心が高いですから。兵營に訪問したときのこと、ゲオルの国が大変喜んでいました。今回のゲオルからの訪問団の体も存分に触っていただければきっと喜ばれることでしょう」

「ひいひい！」

私の知らないところでなんでそんなことになっている。

そんなこと言われたらむしろ触りにくい。

「いいじゃないか、別に。」轟原さんが増えるだけだ。貢がせてやりな。

写真だって売りに出したらもうかりそうだよねえ」

「む、無理だよっ！ 誰が買うの私の写真なんか！」

「クイグインネ、意地汚い話をマリカにするな」

「マリカ様、着陸準備に入るようですから、お席にお願いします」

キューちゃんから冷静に告げられた。私はまったく冷静になれない。なんでこんなときに悪い方向に思いがけないことを聞かされなきゃならないのか。偉い人に会うだけで終わるんだろうか。ものすごい不安になった。

飛行艇が着陸し、ホテルに向かうために浮遊艇に乗り込む。外からのぞけないように窓が黒くなっている。でも、びくびくしていたわりに、記者さんに待ち構えられるといったこともなく、何の問題もなくホテルについた。

「誰もいなかったですね」

「ええ。急な予定ですとなかなか行き渡らないところもありますが、できる限りマリカを煩わせるようなことはないようにいたしましたしよ
う」

「はい。あの……はい。でも、私、少し考えたんですけど……必要なら、お話ちゃんとします。た、たいした話はできないんですけど！
で、でも、あの、知らないところで、写真取ったりとか、勝手に書かれたりとか、そういうのがないようにしてもらえれば、ですけど。はい」

そう面白みのない人間であるところの私なので、まあ、寵児ってことで一時的に騒がれることがあっても、長続きしないと思うのだ。隠していると暴きたくなるってよく聞くし、取材を受けて、それ以外の無断取材はなしにできれば、その方がはやく収まるんじゃないかな。

「わかりました。許可を与えていない取材情報による記事を載せたものは処罰するということでよろしいでしょうか」

処罰とはまた厳しい言葉がでてきたけど、まあ、おおむねそれでいいような……。ヘルさんを見ると、にこっと笑顔を見せてくれた。反対ではないみたいだ。

「はい、それで、おねがいします……あの、でも……あんまりたくさんにならないようにしてもらえたら」

「許可を与える媒体は私たちに任せていただいてよろしいですか？」

「……はい。私じゃよくわからないし、よろしくお願いします」

「これから調整してまいります。マリカと過ごせる時間が減ってしまつのは残念ですが……夕にはまた伺います」

おじ様と、キューちゃんが部屋を出て行った。残つたのは、いつもの見慣れた人たちばかりで、ほっとして息を吐いた。

「つかれたよー」

クッションに顔を押し付けて寝転ぶ。クイさんが飲み物を用意してくれたので、受け取って飲み干す。

「……外は色々大変なんだね。もうおうちかえりたい」

「あんなに楽しみにしてたのに」

からかうようなくすくす笑いをされる。楽しみは早々に終わってしまったんですよ。クイさんの腕にしがみつく。

「もうクッキー、サフサフは食べられたしやりたいことなくなっちゃったんだもん。うろろろしたら駄目みたいだし、偉い人に会うの緊張してたのに取材も受けることになっちゃったし。何話したらいいのかなあ」

「マリカがやるって決めたんだろ。大丈夫だよ、マリカは可愛いんだから、皆好きになる」

「だって、そうした方がいいのかなって、おもったから……クイさんは、どう思う？ 全部断ってもらったほうが良かった？」

「あたしはいい判断だと思ったよ。あの条件なら追い掛け回されることはなくなるだろう」

「……うん」

私が新聞に載るだなんて、思ってもみなかったことになって緊張する。

「どうした。まだ何か悩み事があるのかい？」

大丈夫なるとかなるなる。うん、いけるいける。

「ううん。平気。」

あ、ヘルさん、どこ行つてたの？」

「新聞をもらつてきた。社は情報が遅くて困る。少し考えないといけないな」

みると、本当に私の写真載ってる。勉強中のマリカ様と称された、眉間にしわを寄せて単語帳を見ている姿や、兵営に行ったときの熊さんの上に乗ったところまで撮られていた。キューちゃん……いつのまに撮つてたんだ。

ただ、提供された写真はそう多くはないようだ。どこの新聞も同じ写真を使っている。写真がなくて記事だけの時も多い。誰が書いてるんだろうコレ。私の好きな食べ物なんてどうでもいいじゃないか。

夕方、ホテルにやってきたおじ様とキューちゃんを出迎えた私は、まっさきに不満を唱えた。

「キューちゃん……隠し撮りなんてひどいです」

「申し訳ありません」

「禁止です」

「申し訳ありません」

「キューちゃん」

「申し訳ありません」

「申し訳ありませんか」

「申し訳ありません」

キューちゃんは、いつも真面目な顔をして、淡々としていて、それでいてちよつと変な人だ。いつまでも申し訳ありませんが続きそうだったので、切り上げて今後の予定を聞いた。

「明日は朝から長と長官達への会見を行います。その後、夕方に合同記者会見を予定しています。夕食をウイヴィエルさんが一緒にしたいということで無理やり予定をねじ込まれました。断ってください」

スケジュールぎつちりだ。いままでののんびりとした生活からは考えもつかない。

「昼までには質問の一覧を用意します。今回はそれに答えていただく形になりますのでよろしくお願いします。あさつては各国の使節団との面会と会食、合間に写真撮影と個別の取材を3件。それから……」

ぼんやりとキューちゃんの話聞いていた。敏腕マネージャーのようですなあ……。滞在は5日の予定で、はじめに聞いていたのはもっと、こう、ノンビリしたものだったんですけど……。おでかけだっていいっていわれたのに。ヘルさんが家族に会わせてくれるって言ってたんだけど、それもこの様子だとなしなのかなあ。ちな

みに、クイさんの家族は都には住んでいないということで、今回会う予定はない。実は結婚していた？そうで、別れた？旦那さんの間にお子さんが一人いるらしい。はてなばかりなのは、ここの結婚制度がよくわからないから。頼まれて子どもを産んだだけって言うてたけど、契約結婚？で従者になるまでは一緒に暮らしてたらしい……。

「あと、今からになりますけど……内々にといいことで長が会食を希望しています」

「ついたばかりだぞ。今日くらいはゆっくりさせたい。大体明日も会っだろう」

「明日は長官たちもいるので、その前にのんびりいちゃいちゃしたいとのことですよ」

「……断れ」

「私はマリカ様に聞いているんです」

「え、な、なにかな？」

ぼんやりしてよく聞いていなかった。

「これから長が夕食を共にしたいと希望しています。いかがなさいますか？」

「はい？ も、もちろんかまいません！」

偉い人の希望にはできるだけ沿うべきだろう。長いものには巻かれるんだ。

「それではマリカ、お召し替えを。私が選ばせていただきました。お手伝いさせていただきますね」

服を手に、笑顔のおじ様がにじり寄ってきた。着替えはいいけど

お手伝いはお断りしたい。

ヘルさんとおじ様が殴りあっている気がするけど見えないことにする。服だけありがたく頂いて、クイさんと一緒に奥にひっこむ。

水色の柔らかかいてるんてるんとした素材の袖のないワンピースに、レースのボレロをはおる。足にはぺったんこのサンダル。なんだか妖精みたい。ひらひらしてて可愛い。

ぐるぐる巻くいつもの服より、ずいぶん楽な着心地だ。こういう服もあるんだなあ。

「いいんじゃないか？」

「可愛い服だね。おじ様にお礼言わないと」

「そうしな。きつと喜ぶよ」

部屋を出ると、もう殴り合いは終わっていた。よかった。

「ウイブイエイル様、とっても可愛い服、選んでくれてありがとうございます
「じぎいます」

「喜んでいただけ嬉しく思います。よくお似合いですよ」

その場でぐるりと回ると、ひらひらとスカートのすそが翻る。

「ヘルさん、ヘルさん、どう？」

「……マリカ、少し……はしたなくはないか？」

「そう、なの？ クイさんはいって言ってたけど……「じぎうのは駄目だった？」

ヘルさんは険しい顔をしていて、ちょっと落ち込む。クイさんが普段着てる服に比べたら、露出は少ない位なのに。腕は出てるけど、ボレロでかなり隠れてるし。膝が見えそうなのが駄目なのかな。

手招きされたので近づくと、しばらくすそを引っ張ったりして

たけど、あきらめたのかため息をついた。泣きたい。

「可愛らしすぎる駄目だ誘ってるのかこんなに透けていやらしくはないか腕も足もこんなに見せて胸元も開きすぎだろう」

これでは娘の着る服になんでもケチをつけるお父さんだ。

「だ、大丈夫じゃないかなあ？」

「従者殿、私の見立てに何かご不満が」

「マリカが愛らしすぎるといふ点以外すべて不満だ私が選べばよかった」

「それほどご不満であれば見なければよろしい。さ、私が付き添いますから、お手をどうぞ」

ヘルさんは私に向かって伸ばされたおじ様の手を払う。ああ、今度にはらみ合ってる……。

「放っておきな。行こう、マリカ」

「うん」

「それではこちらへ」

ヘルさんもおじ様もすぐにごっちにやってきたけど、さっきから衝突してばかりだ。はらはらしてしまうので仲良くして欲しい。

長さんは、青い長い髪のおじいさんだった。いや、おじいさんってほどではないのかなあ……。ごっごつと骨ばっていて皺深い。威厳を感じるような気がする。

足の間ですっぽりと納められて、頭から腕をなでなでされている。

「やわらかいなあ。かあいらしいなあ」

やっぱり威厳はなかった。孫にデレデレのおじいちゃんだ。他にも偉い人がきていて、皆さんになでられまくったけど頑張りました。こつちの人って容赦なく体中触るので、ちよつとゾゾーっとすることもあるけど……うん、よく耐えた。頑張った。偉い人に失礼があつたらいけないよね。

非常に疲れたので、部屋に戻った後は寝るまでヘルさんに甘えたおした。

つかれた。もうつかれはてた。

本日の予定はつつがなく終了しましたよ。長さんたちとの会見も問題なく終わったし、合同記者会見も、質問表を先にもらっていたおかげで割りと落ち着いて答えられたと思う。でも緊張した。疲れた。もうやだ。たくさんの人に囲まれるの怖い。みんな大きいし。じろじろみられるし。

あ、これからおじ様と夕ごはん食べるんだった。もう一度気合を入れなければと思うけど、一度気を抜いてしまつとなかなか戻せない。おじ様なら大丈夫かなあ……。

ホテルの部屋で、クッションに頭を埋めてつらつら考えていると、キューちゃんがやってきた。

「マリカ様、こちらに着替えてください」

今部屋に着いたばかりだというのに、鬼か。涙が出てくる。

ヘルさんが服を受け取って広げる。……うわあ、布の面積少なさ。無言でつき返してたけど、キューちゃんは受け取り拒否していた。

「……ウイヴィエルイとの食事など取り消してもかまわない。コレは服とは呼べない。こんなのを着せるつもりかあの男」

胸の部分だけを覆う布に、腰に巻きつける短いラップスカートみたいな服だ。……これ、服？

結局着た。着ましたよ。だっておじ様がやってきたかと思ったら、悲しそうな目でこちらを見てくるんです。そんな目で見ないで欲し

い。

おなかは丸見え、腕も足もむき出し。ちゃらちゃらと飾りを付けて、髪には葉っぱを飾られた。翻訳力チューシャがあるから、頭に飾りをつけることはあまりないんだけど、今日はおじ様だけってことで、あ、ヘルさんとクイさんはもちろんいるけど、こっちの言葉に慣れるためにはずしたらどうかといわれてつけていない。大丈夫かな……おじ様なら私の言葉の具合もわかってるから平気だよな。うん。

「かあらだ、あらわ、ひんそー、いいえ」

体の露出が多くて恥ずかしいけど変じゃないですか、と言いたいんだけど、どうも難しい。おなかを手で隠してもじもじしてたんだけど、私の手をどかしておなかをつつかれた。どうせぶよぶよですよ。半月運動したところで大差ありませんよ。

「さわる、めー」

指をぺちぺち叩いてどかせる。今日は並んで座っている。この前は向かいだったのになんでこんなに近づいているんだろうか。まあ、長さんなんてすぐ膝の間に座らされたし、こっちのひとは距離感近いんだろうな。

どこかお店に行くのかと思ったら、ホテルでルームサービスをとっていた。疲れてたから、その方が嬉しい。

しかしこの格好では少し肌寒い。何か羽織るものが欲しい。

「さむい、しゃむうい、うえ、のしえる」

肩掛けがほしい、とジェスチャーで示した。

「いいよ」

おじ様はにっこり笑顔で、膝の上に私を乗せた。違う。首を振り降り、ちがう、と意思表示をした。

「からだ、さむいい、あたかい、ちよーだい」

「うん。さむいね。マリカはあつたかいよ」

「あたたかちがう。ウイブイエルイさま、しゃむい、つめた」

青い人は体温が低くて、体を寄せてもあまり温かくない。抱き囲まれている分すこしはマシだけど、おなかを手で触られたりするとむしろ冷えそう。

おじ様は笑顔のまま、スープをスプーンで掬うとふうふうしてから、私の口元へ押し付けてきた。ぬるいスープだ。これを食べて温まれということだろうか。

食べるけど、食べるけど……肩掛けください。っていうか、翻訳カチューシャください。

なんだか体が温かくなってきた。疲れもあつて、ぼんやりとおじ様にもたれかかる。なんとかひざ掛けを持ってきてもらえたので、足にかけていたそれを胸まで引き上げて、うつらうつらしている。このまま眠れたら幸せだ。

ひざ掛けの端から手もぐりこんできて、おなかに添えられた。冷たい。くすぐりたい。

「つめた、さわる、めー……眠いの、寝る……」

「うあー!」

寝てしまった。飛び起きると、おじ様に抱っこされたままだった。どれくらい寝てたんだろうか。

「……ごめんにゃさい」

「いいんですよ」

きよろきよろと辺りを見回す。能面のような顔をしているヘルさんがいた。……どうしよう。

「ヘル、ちょうだい」

頭を指差して、翻訳カチューシャをねだる。すぐに近づいてきて私を立たせると頭に飾った葉っぱを取り外してからカチューシャをつけてくれた。ヘルさんなら私の言葉もわかってくれるのになあ。

「ちょっと疲れてて……うまく言葉も出ないし、練習はまた今度にします」

そうしよう。おじ様は少し残念そうだったけど……ああ、つかれた。

息苦しくて目が覚める。ヘルさんにちゅーされていた。かなり明るくなっている。もう朝だった。

昨夜はおじ様との食事を終えた後、すぐに寝た。眠くて眠くて……。お風呂はもとより、体を拭いてもいない。綺麗にしないと。服もそのまま寝たはずなのに、いつの間にか寝巻きに着替えられている。おなかを出したまま寝ていたら具合が悪くしていたかもしれない。よかった。服を着替えさせられても気が付かない危機感のなさともかくも。

口の中でぐにぐに動いている舌を軽くかむと、私の舌を舐め上げてから離れていった。

「ん……おはよ……」

「マリカ……」

よだれがたれている。恥ずかしい。口を指でぬぐうと、その指をくわえてしゃぶられた。引き抜こうとするけど、吸い付かれています。なかなかできない。

「もう時間？」

「ああ。」

マリカ、疲れたろう。もっとゆっくりさせてあげたいが……すまない

「ううん。お風呂は入れる？」

「もちろん。今用意しよう」

心配かけてしまった。都にいるのは少しの間なんだから、頑張らないと。

なんだこれええええ！ 眼鏡をかけたライオンさんがいる。かわい！

他の国からきた使節団の人というのが獣の人たちで、その中にふさふさの鬣のライオンさんがいた。眼鏡をかけて、その上服を着ている。なかなか見られない光景だ。

「はじめましてマリカ様」

「ははははじめまして！」

思わずじつと見ていたら声をかけてくれて、手を差し出してくれたので握手もした。肉球！

「マリカ様は私達の毛並みに興味がおりだとか。どうぞお触りください」

「え、ああ滅相もないです！」

百獣の王なのに気さくだ。触りたい、触りたいけどすごく触りたけれどどうしようだめだね。なんてっ たって王様だもんね。

「鬣はお気に召しませんか」

なにこれかわいすぎる。しょんぼりしないで。

欲望に負けて触ってしまった。ふさふさ！ ひなたのにおい！

まあいい耳！ ふさのついたしっぽ！ ああっ、幸せ。

いつの間にか獣さんたちに囲まれていて、もふもふ三昧だった。

ここって天国？

「想像以上に小さいなあ」

「マリカ様、是非われわれの国にもいらしてくださいね」

「柔らかくてすぐに破けそうな皮膚ですなあ」

「バカ、爪を立てるな」

「いい匂い……」

「私もなでてください！」

名残惜しいけど、時間が来てしまったので、また会う約束してお別れした。獣さんの国に旅行……ちょっと楽しみだ。落ち着いたらひっそりいきたい。

あと、テルベ族という、ヘビ、トカゲ系の人たちにもあった。二足歩行でつるんとしたお顔で、口を開くたびにちろちろと細い舌が出入りする。ピッタリした服を着ていて、宇宙人っぽい。

握手をしたけど、すべすべして冷たい手だった。

「シウムクイエが悪さしてはいませんか？ 困ったときには私たちを頼ってくださいね」

「わたしの家にはブールの鱗が残っているんです。いつかティエルベの国にいらした際には是非およりください」

「綺麗な肌ですねえ……こんなに柔らかいのに張りがある」

「ゲオルに興味がおありの様だが、私たちはいかがでしょう。特に私の持つ白い色は珍しいのですが」

ブールというのは、昔テルベの国にきた龍児の竜のことらしい。遺物が自慢になるのか。私の残せるものって何になるんだろう。髪の毛とか？ のろわれそう。

表情が読めないけど、皆さん握手した手をなかなか離してくれなくて、多分、好印象を与えられたんじゃないかと思う。

いつもより布が増量された服を纏い、写真館のような場所で写真を撮った。重くて辛い。立ち姿や座ったのや、服を変えたり、あと、従者と一緒に、と言われてそれも撮った。クイさんがぐるぐる巻く服をきているところははじめてみたなあ。ヘルさんはいつもとあまり変わらない。でもカッコイイと褒めておいた。ゲオルの人もふもふ毛皮がうらやましかったのか、すこし拗ねてる気がしたから。ヘルさんは案外お子様だ。

取材は雑誌のインタビューみたいな感じだった。芸能人みたいな扱いはなんだろうか。しかし好きなタイプとか聞いてどうするんだろう。こつちで恋人とか……どう考えても無理だ。シムクイエは姿かたちだけ見ればいけそうだけど、肌の色はともかくちよつと大きすぎる。ゲオルももふもふする分にはいいけど、獣だし。鳥のイーリエーはちよつとうるさすぎるし。いや、一人しか知らないからそうでない人もいるのかもしれないけど、それでなくても、鳥だし。テルベは爬虫類、と。人魚のシエシエもなー、海に住んでることなので、一緒に暮らせないしね。

とりあえず、無難に優しい人、と返しておいた。

今日の夕飯は、忙しくて時間が取れなかったそうで会食ではなかった。そのほうがいい。しかも、マーボーっぽいタレのかかったうどんだった。麺料理ははじめてだ。こういうのもあるんじゃないか。これもゲオル料理らしい。

「マリカはゲオル料理が好きみたいだね。」

社に料理人をもう一人入れようかと思っていたんだけど、ゲオル料理を作れる料理人を探そうか」

「それがよさそうだね……。しかしよくこんな舌がしびれるのを

食べられるね……」

美味しい美味しいとマーボーうどんを食べる私をみて、ここにいと微笑むヘルさんとは対照的にクイさんはひいていた。

もう都に来て4日目の朝だ。軽く朝食を取ったあと、朝市に連れて行ってもらえることになった。

「騒ぎにならない？」

「ああ、大丈夫ですよ。でも離れたら危ないので、私が抱きかかえて差し上げますね」

「お前は馬鹿か。それは私の役目に決まっている」

「従者殿には聞いておりません。ね、マリカ。かまいませんね」

可愛らしく小首をかしげたおじ様の、あつーい視線が突き刺さる。お断りしづらいことこの上ない。さすがたらしなおじ様だ。自分の見せ方をよくわかっていらっしやる。おじ様にだっこされるのは遠慮したいところだけど……都に出てくるのを楽しみにしてくれてたみたいだし、応えたほうがいいのかなあ。

朝市はずいぶん賑わっているようだった。広場にたくさんのおじ様が並んでいて、呼び込みの声が飛び交う。

結局おじ様にだっこされて市場へやってきた。喜んでるみたいだし、おじ様に会えるのはこっちにいる間だけだし……。仕方がないでもおじ様は体が硬くて、座りが悪い。もそもそしてしまうけど、しっかり抱えられているから、落とされるようなことはないと思うんだけど。

「なにか気になることはありませんか？」

「あ、あの、あの……よくみえないんです……」

言おうか言うまいか迷ったけど、せつかく来たのに見えないのはもったいない。水色の布を頭からかぶされてからだにもぐるぐる巻きつけられて、それだけでも視界が悪いのに、周りを護衛の人に囲まれているのだ。皆さんでかいので壁以外の何者でもない。なにがあるのかよくわからない。しかもこれ、すごい目立ってるんじゃないだろうか。騒ぎになったらどうしよう。

「それでは肩車にいたしましょう」

一度下ろされて、脇をつかまれるとぐわつと持ち上げられて、右肩に乗せられた。ちよつと高すぎて怖いのですが。しかも少々不安定。頭に両手でしがみつく。必死だ。周りを見る余裕なんてない。

「マリカ、両目をふさがれては前が見えません」

「やだ、おちちゃう！ こわい！」

「支えておりますから問題ありませんよ」

「やだあ！ たかいもん！」

「仕様がないですねえ」

体をかがめて、降ろしてくれた。おじ様ってば笑ってるけど怖かったんだからね！

「ベール、とつてもいい？」

「そうですね。見えないのでは楽しくないでしょう。

……ふふふつ。高いところが怖いなんて可愛らしいことをおっしゃるのですね」

「おじ様イジワルです」

「おやおや。それではご期待に沿わせていただきますでしょうか」

「えっ……あ、やだあ」

あつという間に肩の上に乗せられていた。からかわれているのはわかってはいるけど、怖いものは怖い。きゃーきゃー騒ぎながらもしがみつくしかない。

「マリカ、おいで」

ヘルさんが腕を伸ばしてきて、その手にすがろうとしたところ、ようやくおじ様は私を降ろしてくれた。また捕まらないようにヘルさんにしがみつくと、いつものようにだっこしてくれた。なんだか安心する。

そのまま市場を見て回った。護衛の人は最低限の人数だけ側で、あとは少し離れてもらったので、なんとかお店が見えるようになった。

食料品が主で、どすーんと大きな塊肉が置かれて売られていたのには驚いた。ここ、テントがあるとはいえ屋外なんです。干した果物とチーズっぽいものがあつたのでそれを買ってもらった。お土産にしよう。

市場を見たあとは、エーリエー族の使節団の人たちと会って来た。なんていうか……若干……失礼な人たちだった。

「あらあらちようどいい大きさだわね」

「いいね、ぺったんこで」

「もうちよつと足が細ければいいのに」

「色は好きだな。綺麗な黒だ」

「あらー、私はもうちよつといろんな色が混じってる方がいいわあ。青や緑が混じってたら素敵だと思わない？」

「赤もいいじゃないか。黒に映えるよ」

これで褒められてたらしいのが不思議でならない。

今夜が都に泊まるのは最後。ヘルさんの実家にお招きされて、夕食を一緒にすることになった。お忍びでというやつです。クイさんはその間自由時間です。従者もお休み必要だよ。あれ、ヘルさんはいいんだらうか。実家で休むからいいのかな。なぜかキューちゃんもついてくると思ったら……。

「え……親戚、なの？」

「私の姉の子どもらしい」

「何年か前に会った筈ですよ」

「……あの時眼鏡かけてたか？」

「私は眼鏡しか特徴がありませんか」

ヘルさんのお姉さんがキューちゃんのお母さんなのだそう。知らなかった。

おうちが豪邸だった。ホテルもかなり豪華だと思ったけど、このおうちもすごい。都にあるのに、社より広そうな御宅だ。実はお金持ちだったようだ。

出迎えてくれたのは、紫の髪の女の人と優しそうなおじさんだった。

「ようこそ、マリカ様」

「ようこそおいでくださいました。私はキュジイギユジイの母でヘルベルの姉のカリナガリナクランと申します。

こちらは父のタイダイクランでございます」

「今日はよろしくお願ひします」

お姉さんは自信に満ち溢れていて、どばーんとした迫力ある胸をもつ色気のある美人だ。もてそう。おじさんは、お姉さんの存在感にかすんでしまいそうな穏やかな人だった。っていうか、ヘルさんやお姉さんのお父さんってことはキューちゃんのおじいさん……。そう考えるとずいぶん若く見える。

「ヘルベルはよくお仕えていますか？」

「はい。とつても優しくしてもらってます」

「マリカ様のことが大好きなようです。見捨てないでくださいね」

おじさんは優しく微笑んでくれた。すごい……シムクイエなのに怖くない笑顔。貴重だ。癒し系だ。

「キュジイギユジイも社に行くことになったときは驚きました。克蘭から二人も行くことになるとはね」

「むしろヘルベルさんがいるからだったようですよ。生まれたばかりは忙しいだろうから、気心の知れた相手がいれば役に立つだろうと。」

ヘルベルさんは私のことは覚えていなかったようですが

「キュジイギユジイが生まれたときはまだこちらにいただろう」

「カリナガリナが子どもを産んだのは覚えている」

気安い会話がなされていく。ヘルさんやキューちゃんのことを知れて興味深くはあるが、会話に混じるのは難しくて少し退屈だ。親戚の家でお行儀よくしていなさいといいつけられた子どもの気分だ。連れられて部屋に入ると、女の子が一人いた。でつかすぎてよくわからないんだけど、顔の感じからすると……12〜3才くらいなんじゃないだろうか。でつかいけど。2メートル以上はあるだろう。赤紫の髪の毛、活発そうな子だ。

「私の子でシイクジイクイエルといます。普段は父親の所におりますが、マリカ様にお会いしたいというので同席よろしいでしょうか」

「はい。よろしく、マリカです」

「マリカ様はお人形さんみたいに可愛らしいですね！ 会えて嬉しいです、トモダチに自慢しちゃいます！」

そう喜ばれると照れてしまう。ヘルさんたちは久しぶりに帰ってきてつもる話もあるだろうし、すこしこの子に話し相手になつてもらうことにした。ええと、名前は……シイクジイクエルでよかったかな。あれ、なんで最後がクランじゃないんだろう。お父さんの所にいるって言ってたし、そちらの名前なのかな。

「キュー……クジイグジイさんの、妹さんなんだよね？」

「クジイ……？ ああ、キュジイギユジイクランですね。お父さんは違いますけどね。私、お父さんの方で育ったから、クランのことはあんまりよく知らないんです」

あっさり言われたけど、なんかハードな家庭状況じゃないだろうか。

「そ、そうなんだ」

「今日はお母さんに声をかけてもらえてよかったです！ お母さんにも久しぶりに会いました」

「……あ、の、こっちでは、家族が揃って暮らしたりはしないの？ 私のいたところでは、両親とか兄弟は、子どもが大きくなるまでは大体同じ家に住むものなんだけど」

「そういうこともありますよー？ でもお母さんもてるからあ。いちいち暮らしてたら大変じゃないですか。大所帯になっちゃって」

子どもがそういうことを知ってるってどうなの。でも全然気にしてなさそうだなあ。

こっちの人って、わりと家族とか恋人的な関係とかドライな感じがある。クイさんも子どもに会わなくてもいいって言ってたし。

「あたしもお母さんみたいな髪の色だったらよかったのになあ。ちよつと赤すぎ！ おとうさんなんて真っ赤なんですよー。よくお母さんに相手してもらえたなっっておもっちゃう」

「赤いと駄目なの？」

「やっぱり青いのが一番綺麗じゃないですかー？ 紫もいいけど、赤はもてないからいやです！」

クイさんも赤い髪だけど、もてないんだろうか。でも結婚してたらしいし……もてないなんてことはないんじゃないかと思うけど。

「ところでっ！ マリカ様がお好きなのは誰なんですか？」

「え……っ」

「トモダチは、ゲオルの銀のひとを好きなんじゃないかってるんです。でも、やっぱりいつも側にカツコイイ従者の人のほうがいたら好きになっちゃうと思うんです！ だから私、ヘルベルクランさんがイチオシですー！」

なんだこれ。なんだこれ！ ゲオルの銀のひとってユオーさん？ 好きってなんでそんな話に。しかも、最初はこそつと小さな声だったのにどんどん大きく……。って皆さんこっちみてるー！

「私はマリベナさんがイチオシです。ケダモノと妖精は萌え」

「キュジイギユジイの上司の、ほら、あの青い髪のいい男はどうなの？」

「あ、あの人もいいよねー。私がつと大人だったら狙っちゃうのに」

「私はあのもう一人の従者の女性がいいと思うんだ。口付けている写真がすばらしかった」

「……口付け？」

「ああ、その写真のことは秘密に言っておいたのに」

「ゲオルに取られないようにキュジイギュジイも頑張りなさいよ。新聞にもまったく出てこないじゃないの」

「私は写真を撮ってるだけだから出てくるわけないじゃないですか」

なんで皆さんそんなに私の周囲の事情に詳しいのでしょうか。

賑やかに話しながら過ごした。なんか、やっぱり親戚の家って感じ。

今日はお屋敷に帰る日だ。飛行艇に乗り込む。

私を抱きよせて、おじ様がため息をつく。

「なぜあんな辺鄙な場所に行ってしまうのですか……。都に住んでくださればよろしいのに」

こんな人にまみれて落ち着かない場所は嫌です。せめて普通に歩けたらなあ。

「いつでも呼びつけて頼ってください。私はマリカの僕です……」

潤んだ目を向けられても困る。それに、こつも寂しがられると私まで寂しくなってしまう。

「また会えますよ……ね？」

ほんぽんと腕を叩く。すると感極まったように私の名前を呼ばれて、顔中にちゅーされた。口にも舌まで入ってくるのを長々とやられました。ぞわぞわするし息苦しくて今度は私が涙目。

ヘルベルクラン 1 (前書き)

ヘルベルクラン視点です。

ヘルベルクラン 1

会わせたくない。緊張に体を硬くしているマリカをみて、小さくため息をつく。今日は担当の役人が社にやってきたのだ。会わせないというわけには行かないが……会わせたくない。

今日もマリカは可愛らしい。濃い紫の服の裾から乳白色の肌がちらちらとのぞいて思わず嘗め尽くしたくなる艶やかさだ。この愛くるしいマリカを舐めるように見られるのかと思うとやつらの目をつぶし舌を引き抜いてやりたい。

「本日の面会者、ウイヴェイエルイとキュジイギユジイクランの2名です」

無駄に色気を振りまく年嵩の男に、どこかで見たとような地味な眼鏡の若い男だ。なぜこんなやつらに私のマリカを見せなければいけないのか。とつとと名乗りだけ終わらせて出て行け。

「はじめまして、マリカ様。ウイヴェイエルイでございます。聞き及んでおりましたとおり、大変愛くるしいお方で、こうして出会えました幸運に胸が高鳴っております」

「万理歌です。あの、様とかはいいので……よろしく願います」

マリカの頭がふらふらと動く。色目を使ってくる男に対してまで丁寧な声をかける。調子に乗るからそんなことしなくてもいいんだ。声などかけず聞いてやるだけでいいじゃないか。しかしマリカは優しいので、それでは気がすまないようだ。

せっかくマリカが声をかけてやったというのに、ウイヴェイエルイは返事をしない。マリカが心配げにおろおろし始めたではないか。まったく何をしているんだこの男は。ようやく顔を上げたと思えば

マリカの可愛らしい声を褒め、歌って欲しいなどとあつかましいことを言い出した。こいつの耳をそぎとってやりたい。

「あの、おじ様？ 私、そういうのは……」

おじさま！？ こんな不愉快極まりないじじい様などつけなくていい。マリカがやんわりとはあるが拒否をしているのをいいことに、私からも一言言ってやった。

私たち従者は、マリカのやりたいことを妨げない。マリカが望んでいることなら、私は何もいえないのだ。しかし、マリカ自身が嫌がっているのであれば私にも手助けができる。マリカは優しいものだから、人を退けるのが苦手なようだ。それもまたマリカの可愛いところではあるが、その性格ゆえにいいように扱われるようなことがあつてはならない。

ウイヴィエルイは不満を口にしていたが、私はマリカを守らなければならぬのだ。お前の不満など知ったことが。

「キユジイギユジイクランをこの社付きにいたしました。どうぞ存分にお使いください」

若い男の名前を聞いて、興味を覚える。私と同じ、クランの名がついているからだ。そういえば、髪の色も紫で私に近い色をしている。あまりに地味で平凡な顔なためにどこであったか思い出せないが、なんとなく見覚えがある気がするので親戚かもしれない。

報告を兼ねて話があるとのことで、私を指名してきたので不承不承ではあるが執務室へ招き入れる。そろそろマリカの昼の食事時間だ。軽めの食事をかごに詰め、外に布を敷いて食べるのが最近気に入ってるようだ。私はマリカが食事をしているところを見るのが大好きだ。口元の汚れを舐め取ると照れてもじもじと体をゆするの

お約束だ。綺麗に食べられないのが子どものように恥ずかしいという。汚れを取るなんてマリカを舐めたいがための言い訳に過ぎないというのに真面目に受け取るそんな可愛いマリカの食事の世話をなせクイグインネにやらせなければいけないのか。

「おや……。マリカはあそこで何をしていらっしやるのです?」

執務室の窓から、庭でクイグインネと二人で座っているのが見える。

「マリカは昼も食事を必要とする。ああやって外で食べるのが好きなようだ」

「ああ、確かに報告書にかかれていましたね。あれだけ小さければ食事の量も少ないのでしょうか。小鳥のように。」

ところで 今日の夕食は一緒にさせていただきますのでしょうか」

「ことわ」

「従者殿、マリカの言葉も聞かずに決めるおつもりですか」

「……わかった、後で返事をしよう」

断ろうとしたが、それをさえぎられた。マリカに聞けばいいというに決まっている。それをわかっていつているのだろう。腹の立つ男だ。

とつとと話とやらを終わらせてこいつから離れたい。キュジイギユジイ克蘭をみると、まだ窓からマリカの様子をのぞいていた。眼鏡に指をそえてまじまじと。お前の視線で穢される。やめろ。

「キュジイギユジイ克蘭は従者殿の甥だと聞いています。まったく見知らぬものより話やすいでしょう。よろしくお願いしますよ」

「……甥? カリナガリナの子供か?」

クランの名を持つ私の兄弟といえばカリナガリナしかいない。あの姉は押しの強い女だが、この眼鏡はずいぶんと大人しそうではない。甥などいたなと思いついたが、目の前の男であったかは……言われてみればそうかもしれないといった程度の記憶だ。

「キュジイギユジイクランから社の様子を報告させますから、どこか出かけるときにはできれば連れて行ってください」
「わかった」

自分で報告書を書いてはマリカと過ごす時間がそれでだけ減ってしまう。仕方がないだろう。後で報告の範囲を詳しく取り決めなければ。あまりべらべらと書かれて、マリカの様子をだれかれなしに知られるのは嫌だ。

案の定マリカは目障りな役人共との食事を了承した。

「さつき会ったおじ様と眼鏡のひとだね。一緒にごはん食べるの？」

「断ってもかまわないんだよ」

「ううん、いいよー」

むしろ断って欲しかった。

「あ、でも、人と食べるときって何か食べ方に気をつけなきゃいけない？」

「いつもの通りで大丈夫だ」

「いつもの……は、駄目じゃないかなあ……」

首をかしげて困ったような表情を浮かべる。問題ない。私がいつ

ものように食べさせる。

なるべく離れた場所に二人を座らせる。マリカの口へ、せつせと食事を運ぶ。ただでさえ小さな体を縮こまらせて、恥ずかしそうに咀嚼している様子はもう誰にも見せたくない。クイグインネの雑な給仕が気になる。そんな大きな塊ではマリカの小さな口には入らないだろう。

「いつもそのようにして召し上がっているのですか？」

マリカに食事をさせることに集中しすぎていた。ウイヴィエルイがマリカを物欲しげに見ている。

「従者のお二人が本当にうらやましい。今日だけなのですから、私にその場所を譲ってくださいませね？」

駄目に決まっている。私のマリカをいやらしい目つきでみるようなやつを側に寄せたくはない。マリカも頭を振り、体をこわばらせていて、拒否しているのがわかる。

それにも関わらずじわじわと近づいてくる。マリカをおびえさせて何様か。見かねたの部下にまでいさめられている。様を見る。

「お、おじ様……あの、あの、あ、」

声を震わせながら気丈にもマリカが

「あーん」

……。マリカ……。私だってしてもらったことがないのに

……何故？ 何故そんな男に食べさせてやったりするのか。

マリカの細くて小さな指が男の口に……なにやってるんだしね。もちろんすぐに引き抜いて洗った。その間もマリカに近づこうとする。なにするきだしね。殴りつけてやったがそれでもしつこく言い募ってくる。なんでもいいからしね。

マリカに激しく拒否されて、ようやく、離れていった。

あんな変質者までよってきてしまうとはマリカが可愛すぎるのがいけない。私がしっかり守ってやらなくては。

さつさと食事を終えて部屋に引っ込む。

「マリカ、あんなこととしてはいけない。私だっってもらったことがないのに、私にだけやっていれば良いんだ」

あの男がよほど怖かったのか涙を浮かべてこくこくと頭を上下に振る。わかってもらえたようで、すこし安心する。

「ウイヴィエルイに奉仕しなくていいんだよ。ちゃんと主としての自覚を持ちな。つけあがるだけなんだからね」

そのとおりだ。たまにはクイグインネもいいことを言う。

マリカが風呂に連れて行き、上がるまでに少し用事を済ませようと廊下を進んでいると、酒瓶を抱えたシイジイマーナに出会った。

「それはどうした」

「あゝお客さんに出そうとおもってえ。久しぶりに都の人と会って皆お話ししたいっていうんだもん。いいでしょあ？」

「……いらないだろう」

「ヘルベルはマリカ様にべったりで忙しくてそれどころじゃないん

「だろうけどお、外から人が来るなんて珍しいんだからあ」

怒った顔で、責めるように言われてしまう。確かに人が来ることはすくないのだ。村にだってそう気軽に行けるわけではない。召使達が浮かれて話を聞きたいと思うのも当然なのかもしれない。酒を出す必要はないと思うが……強く反対するほどではない。

「わかったわかった。ほどほどにな」

「はい。……ねえ、ヘルベルウ？　また遊びましょーね？」

「……ああ」

マリカが生まれた今、遊ぶ気にはなれないが、この女とはそれなりに深い付き合いだ。気は進まないが、頷いておく。

シイジイマルナは笑顔で去っていった。

立ち話などをしていたために用事を済ませたときにはもうマリカは風呂を上がり、寝室へいつていた。クイグインネと寝台に上がって、本を手になにやら楽しそうに会話している。私は楽しくない。クイグインネを手招きし、寝台からできるだけ離す。

「なんだ？」

「今日来た二人と、召使達が酒を飲んでるらしい」

「ふーん。まあいいんじゃないか？」

「クイグインネも行って来たらどうだ」

「あたしは酒は飲まないよ。ヘルベルクランがいけばいいだろう」

不機嫌そうに手を払って私を追い出そうとする。私がお前を追い出したいんだ。大体なんだ、最近マリカにべたべたべたべたと。お前そんなに興味なかっただろう。いまいましい。

「私がここにいるからクイグインネは休んでいい」

「は、余計だよ。今日はあたしが添い寝するから女のところでも行つてきな」

「添い寝は私の役目だろう」

「いつそんなこと決めたんだ。まあいいよ。マリカが寝るとき呼ぶからあんたはそれまで他の仕事でもしてな」

そう言うといそいそと天幕をくぐり、マリカの隣に座るのが透けて見えた。

「お話終わったの？」

「ああ。次はどんなのを読みたい？」

「この続きつてでてないのかなあ。続きが気になる」

「へえ、そういうのが好きなのか。やっぱり若い子だねえ」

楽しそうに本の話をしているのをみて、疎外感を感じる。クイグインネの頭をつぶしたくなるのを必死で抑えた。今度私もなにかマリカの好みそうな本を見繕おう。

遅すぎる。いつもならとくにマリカが寝ている時間になっても呼ばれない。様子を見るため寝室へ行くと、煌々と明かりをつけたまま二人で眠り込んでいた。クイグインネだけをたたき起こす。

「あー……何だよもう。このまま寝かせてくれりゃいいのに」

「さつさとでていけ」

「はいはい」

睨みつけてやったがまったく気にすることもなく部屋を出て行った。可愛げのない女だ。

明かりを消して、マリカの隣に寝転ぶ。マリカは薄く唇を開け、涎をたらして幸せそうな寝顔をしている。それはもう愛らしい寝顔だが、私がいてもいなくてもこうして安らかに眠れるのかと思うとモヤモヤとした言い様のない気持ちになる。ずっと側にいて欲しいと欲しかったのに、もう私はいらないのだろうか。私でなくてもかまわないのか。胸に澱がたまっっていくようだ。

閉じ込めて、誰にも渡さずにいられば。それができればどんなにかいいだろう。このまま鎖でつないでしまおうか。

……駄目だ。マリカは私を優しいから好きだと言う。マリカの期待にはこたえたい。不安な様子がなくなってきたのはいいことだ。こちらに慣れてきたからだ。私が必要とされていないからではない。目を閉じたがなかなか眠ることはできなかった。

ようやく夜が明けた。ウイヴィエルイが呼んでいると通信が入り、眠るマリカをおいて、部屋を抜け出す。マリカを置いていくのは心配だったが、昨夜のことを思い出してそのままにした。私がいなくても大丈夫だろう……。

「昨夜は皆さんに歓迎していただきありがとうございます」

うさんくさくも笑顔を浮かべてウイヴィエルイは言う。そんなことを言うために私をわざわざ呼び出したのか。

「このように都からも遠く不便なのではないかと思っておりましたが、マリカも問題なく過ごせているようで安心しました。

都に来ていただければもっと楽しく過ごしていただけるのではないかと思います」

なるほど。マリカを都に住ませたいのか。確かにその方が便利ではあるだろう。しかし多数の目に触れるようなところにはなるべく行きたくはない。

「マリカが望むならどこへでも行こう」

望みは何でもかなえよう。だから私だけのマリカでいてほしい。

くだらない話を聞かされていると、寢室の警護員から通信が入る。マリカが泣いていると言う。すぐに向かった。

寢室の扉が開いていて、警備員がマリカの体を触っている。殺意が沸いた。

「マリカ」

声をかけると涙をぼたぼたとこぼしながらしがみついてくる。

「……へるさん……どこ行って、わたし……いないって、さがしたのにつ、うそつき」

求められている。私がいなくては、駄目なのだ。私はそれに歓喜する。泣きながら私を募る様子も愛しい。涙を舐め取る。次から次と溢れて、間に合わずにこぼれてしまう。もったいない。

抱きしめて謝罪の言葉を繰り返す。ぞわぞわと背を這うのは快感だ。マリカには私が必要だ。責められているというのに、それさえも嬉しいと思う。笑みが浮かんでとまらない。

「どこいったの？」

「ウイヴェイルたちと話を少し。もういいんだ。」

着替える？ それとも今日は寝台で過ごそうか」

落ち着いてきてしまった。残念だ。いつまでも求められていたい。答える私の声も、自分でもそうとわかるほど甘ったるい。こんな声が出せたのか。

着替えてウイヴェイエルイを見送るといふ。あの男のことなどまったく気にする必要ないというのに、マリカは気を回しすぎるのではないか。変質者が調子に乗ってしまう。

「ごめんね、おかしいよね……ヘルさんだつてやることいっぱいあるのに。大騒ぎして、恥ずかしい」

小さな声でマリカが謝罪の言葉を口にする。

「いいんだ、マリカ。離れた私が悪い」

「あんまり甘やかすとわがままになっちゃうよ、困るよ」

まったく困らない。私に甘えてくれるなら。顔を赤くして、唇を尖らせている。可愛すぎる。

「可愛い、マリカ」

口付けて、開いた唇に舌を押し込む。しびれるような感覚がとまらない。しかも私にしがみついてもっと、と口付けをねだられていくようだ。……興奮する。

口の中を嘗め回しているとされるがままだったマリカの舌が動いて私の方へやってくる。これは、このままいたしても問題ないな。うん、問題ない。

ああ、このびーびーと煩い通信具をつぶしてしまいたい。

恥らう様も愛くるしい。

「早くしないといつちやう……」

「いいよ」

「だ、だめだよ、そんなの」

顔を綺麗に拭いて、服を着替えさせる。見送らないと、とマリカがいうので仕方なくだ。一日中寝台の上で過ごす予定はマリカによって却下された。非常に残念だが少し興奮しすぎている。あいつの不愉快な顔見ればいやでも醒めるだろう。

案の定だった。私のマリカの手に触れる。クイグインネもべたべたと。

しかし私はいま非常に機嫌がいい。マリカが求めたのは私だ。あいつらの指をつぶしてやりたいと思うだけに留めて、見送りを済ませた。さっさとでていけ。

ヘルベルクラン2

マリカが何かを決意した様子で、珍しくも声を張り上げた。

「ダイエツトします」

「駄目だ、折れてしまっ」

今でさえあまりに華奢で心配だというのに何を言っているのか。

マリカの望みはもちろんかなえない。しかし危険があることは別だ。

「でも今度お披露目するんでしょう？ そのとき太ってたら恥ずかしい。運動して、体力つけるのは、悪くないよね」

「運動、ねえ……それならまあ、いいかもね」

「危ないだろう。怪我でもしたらどうするんだ」

今まで見てきてマリカの身体能力が低いことは知っている。体の大きさの違いがあるとはいえ、歩くのも遅く、扉も一人で開けられないほど非力なのだ。そんなマリカが運動？ 怪我をするに決まっている。

私の反対もむなしく、クイグインネが勝手に服を着替えさせ、外に連れ出してしまった。仕方がない。私に気がつけてやるしかない。しかし服が合っていない。半そでのはずが肘より長くなっているし、首周りも開きすぎて肩が出そうだ。これでは動きにくいだろう。大きさのあったものを作らせなければ。

走り回りながら球を蹴っている。足だけを使い球を取り合う遊びらしいが、マリカの動きはあまりに拙く、ほとんど球を取れない。私やクイグインネの後を追いかけて走っているだけだ。これで楽しいのだろうか。

「つかれたー」

それでもマリカには十分だったようで、垂れるほど汗をかきながら地面にへたり込んでいた。しかも満足げに微笑んでいる。……まさかもう終わりなのか？

「久しぶりにこんなに動いたから明日は筋肉痛かも」

言いながら腕を揉んでいる。後で全身撫でてあげよう。撫でるくらいがマリカにはちょうどいいらしく、気持ちよさそうに体を弛緩させるのだ。可愛い。

「警備のひと、見られるの恥ずかしいなあ」

私も見せたくはないが、危険がないとはいえない。何しろこれだけ可愛いものだから手に入れたと思う輩が大量に現れてもおかしくない。

警備員は存在を忘れるくらいでちょうどいい。気にする必要は

「今度、あいさつに行つていい？」

……マリカは気を回しすぎる。警備員まで調子に乗ってマリカに懸想したらどうするんだ。いまだって脳内ではマリカを穢しているに違いないのにだめだやつらの頭をつぶしてしまいたくなる。警備員は置き物。置き物だ。

「マリカが行くのか？」

大体マリカが行く必要はあるのか。置き物だぞ。

「うん。……でかけてみたいな」

腕に抱きついてきて、はにかみながら私を見てくる。汗に濡れた体はしつとりとして美味しそうだ。食べたい。

不穏な気配を感じ取ったのか、するりと離れてクイグインネにしがみついた。違っただ、ちょっと味見くらいならと思ったただけだ。引き剥がして抱き寄せる。本当にこの子は柔らかくて素晴らしく可愛らしい。

夜、キュジイギユジイを執務室へ呼び出し、兵営へ訪問するため手配を頼み、報告書の確認をする。

マリカが運動する様子がやけに細かく書かれ、写真まで添えられている。球を追いかけて走っている写真だった。服がめくられて背中が少し見えている。

「こんなに詳しく書く必要はあるのか？」

「楽しく暮らしている様子を知らせたほうが皆安心するのでは？」

報告は、寵児に危害を加えられていないか、確認する意味合いもある。確かに、こうして楽しげにしている姿をみせればそれはわかりやすい。

「この写真は駄目だ。少し露出が多すぎる。報告書のこの部分も削れ。服がめくれても気にすることなく、だなんて書いたらマリカが破廉恥な女だと思われるだろう」

「じゃあそこは削って……この写真なんてどうでしょう。あと、こんなのもありますが」

笑顔で汗を拭いているマリカの写真だった。他にも次々とでてくる。あきれるほどたくさんだ。しかも、どれもこれも可愛すぎる。あの時キュジィギュジィはいなかったはずだが、一体どこで見ているんだらうか。

「……いつのまに撮ってたんだ」

「報告しなきゃいけませんから。邪魔にならないようにしているつもりでしたが」

近くをうろつろされるよりはましか。

毎回これだけ多量の写真を選別していたらそれだけで大層な時間がかかってしまう。ある程度は任せるしかないか……。

「送る写真はよく選べ」

「はい。それではこれと、これにしましょうか」

それよりもクイグインネの影に隠れて頭と腕が少し見えている写真がいいのではないかといったら、それでは様子がわかりません、と言われた。マリカが可愛すぎて目をつけられないか心配でならない。

ヘルベルクラン 3

兵営に行くため浮遊艇に乗り込むと、楽しそうに窓から外を眺めている。浮かれてはしゃいでいて、なんて可愛いのかと頬が緩む。

あんなところに連れて行きたくはなかったが、マリカが喜ぶなら悪くない。

兵営では警備員達がすでに整列して待っていた。マリカが丁寧な挨拶をする。今日の案内役は部隊長のテルデルミヤナだ。あの女マリカの手を握ってニヤニヤしている。さっさと離せ。

「……あの、獣姿のひともいるんですね」

ゲオルのことを気にするマリカに、部隊長はやつらを呼び寄せる。あんな毛深く獣染みたやつらを私のマリカに近寄らせないで欲しい。マリカは興味深げにゲオルたちを見て、話しかけている。少しモジモジしたかと思うと、とんでもないことを言い出した。

「さ、さわっ、さわってもいいですか」

駄目に決まっている。ゲオルどもも断れ。ちょうどマリカの目の前にいる灰色のゲオルを睨みつける。断れ。断るよな。マリカに触られるなんてそんなうらやましいことを私の目の前でやるつもりか。しかしあのけだものはにやりと笑って言った。

「どうぞ、ご存分に」

駄目に決まっている。ゲオルなぜ断らない。わかっているだろう、私のマリカはお前らがちょっと珍しくて声をかけてしまっただけなんだ。断るべきだろう。

しかしマリカはべたべたとけだものたちを撫で回している。あいつらの何がいいんだ。あの毛がいいのか？ 毛深いのが好きなのか？ 私ではいくら頑張っても、あのように毛むくじゃらにはなれない。種族の差は大きい。ゲオルをうらやましく思う日が来るなどと思ってもみなかった。ねたましい。涙まで出てきてしまった。ゲオルなど滅びればいい。

「ど、どうしたの……？」

驚いた様子のマリカが駆け寄ってくる。

マリカ、マリカ、マリカ……。抱きしめると苦しかったのか腕を叩かれた。駄目だ今は離れたくない。ゲオルのところになどいかれたら何をするかわからない。

小さな頭がもぞもぞと動いて、私の顔に柔らかいものが触れた。

「大丈夫だよ」

それはマリカの唇だ。言いながら先ほどこぼれた涙を舐め取られる。これは……マリカが好きなのは私だけ、だから大丈夫、ということか。そうなのか、マリカ。

「マリカ様。ここは社ではありませんよ」

マリカが照れて顔を隠した。続きは後にしよう。抱き上げて部隊長の案内に任せて見て回った。

その後応接室でマリカが昼の食事をしているとき、マリカの食べたがっていた料理のことを聴くことにした。

「そうだ。ここは他の種族がいるだろう。マリカが食べたがってい

たごはんやパンというのに似たものを食べているかもしれない。話を聞きたい」

「先ほども会ったゲオルの三人とエーリエーが一人しかいないが、それでいいだろうか」

アレか……。あまり近づけたくないが、情報は欲しい。

「かまわない」

しかし私はすぐに後悔した。エーリエーの男が、マリカに言い寄り始めたからだ。ここのやつらはどいつもこいつも教育がなっていないのではないか。マリカを誰だと思っっているんだ。私のものだとこののに気安くするんじゃない。

そのエーリエーがパンに似ているものを知っているというので、作らせる。ぼんやりとした味であり美味しくはなかったが、マリカは気に入ったらしい。フタフ粉を使った食べ物ということなので探させよう。

別れ際にありがとう、といいながらゲオル達に抱きついていった。マリカ、やはりその毛がすきなのか？

屋敷でようやく二人きりになれたとき、聞いてみた。

「私にもゲオルのように毛があればよかったのに」

あんな風に積極的に触られたい。やつらがうらやましくてならぬ。マリカの柔らかい体を撫でながら、マリカにがやつらのように毛が生えていなくてよかったと思う。私はマリカのこのしっとりした肌が好きだ。毛皮はいらない。

「今のままのほうがいいよ」

マリカがぴったりと体を寄せながら言う。よかった。私も今のま
まのマリカがいい。

ヘルベルクラン 4

なにやら真剣な表情で、マリカがあかね、と口を開いた。何かと思えば言葉を覚えたいのだという。翻訳の髪飾りがあれば言葉を覚える必要はないが、何かあったのだろうか。マリカの小さな頭に余計なことを詰め込みたくはないのだが。

「名前とかもね、難しくても覚えられなくてもそのままできちゃったんだけど……やっぱりずっとここで暮らしていくんだし、ちゃんといえるようになりたいの」

こぶしを握り締め、きりりと決意の表情を浮かべている。可愛い。マリカが言葉を覚えれば、頭飾りも色々つけられるようになる。どんなものが似合うだろう……。

「たしかにね。その翻訳の髪飾りって世界にひとつしかないからねえ。万が一それが壊れたときにも言葉を覚えておけば役に立つだろう」

「えっ……これ、もしかしてすごい貴重品？」

「それは賢者が作った、龍児専用の翻訳具だ。作り方は残されてはいるが、材料が特殊で予備はないんだ」

「じゃあ大事に使わないとね」

「入れて持ち歩けるように専用の鞆を用意しようか」

「うん、おねがい」

幼児向けの本をいくつか持ってくる。一度読んだあと、髪飾りをはずしてもう一度読み、復唱させる。

「おはよう」

「おあよおー」

「お、は、よ、う」

「おお、あ、よー、う」

発音が壊滅的に駄目だ。可愛い。いたって真面目な顔をしているマリカをみて、クイグインネは笑いをこらえていた。お前どこかへ消えてしまえ。

「おいしい」

「おりしい」

「おいしい」

「おうい、しー」

「お、い、し、い」

「おい、いしい！」

最後は少し自慢げだ。ちゃんといえたつもりなのだろうか。可愛い。

1冊分終えたところで、髪飾りを戻す。

「本当に覚えるつもりがあるなら、翻訳の髪飾りはずっとはずして過ごしたらいいんじゃないか？ そうしたらすぐ覚えられるよ」

「えっ……」

クイグインネの無情な言葉に、マリカは髪飾りを取られまいと両手で押さえた。可愛い。

言葉を教え始めてから何日かたち、だいぶ意思の疎通ができるようになってきた。そのため、一日髪飾りをはずしてみることになっ

た。

「たえる、ない」

「もう食べないの？ 飲み物を最後に飲もうか」

「ん、おもう」

「へるう、あし、ふるう、しる」

「運動する？」

「うん、うんどお。あしるー。あ、ふく、ていがう」

「そうだね、服も着替えよう」

「お風呂に入ろうか。一緒に行こう」

「ふる、ふる！ ひと、いあない、じょーぶ、じょぶ」

「ははは。駄目だよ、危ないからね」

一日が終わり、髪飾りを付けて本を読むマリカを見ながら、クイグインネは言った。

「なんでアレで理解できるんだ？」

「愛情の差だろう」

「あたしだって愛してるよ！」

「やめるマリカが穢れる」

あつかましい女だ。私のマリカに愛してるなどと冗談でも聞きたくない。しかし随分言葉が上手くなった。なんて賢い子だ。

「……あー、今日はもう読むのやめる。頭が疲れたー」

「ごろごろと転がりながら寝台から転げ落ちてきた。大丈夫か。」

「まだ寝るにははやいだろ？ 美容しようか？」
「……うん。あれ、気持ちいいね」

マリカが恥ずかしそうに笑う。美容……なにやらべたべたぬりたくるやつか。いつのまにそんなことをやっていたのかうらやましい。私もマリカにべたべたしたい。

「じゃあ準備するよ」

「ちよつと待て、私がやる」

「はあ？ やったこともないくせに何言ってるんだ」

「じゃあ教えろ」

「やだよ」

「教えてくれ」

「前々から思ってたけど、お前って馬鹿だな」

「あ、あのー……やつぱり今日はやめとこうかなー、なんて」

「マリカ、遠慮しなくていいんだよ。ヘルベルクランのことが気になる？ 追い出すから安心しな」

「マリカ、私もマリカを気持ちよくしたい」

マリカは顔を真っ赤にして、クイグインネに抱きついた。そっぢゃない、こっちにおいで、マリカ。

結局寢室を追い出されてしまった。マリカが寝た後、寝巻きを剥がしてしてみたが、全身つるりと滑らかになっていて、心配した歯型もついていなかった。

ヘルベルクラン 5

都に行く為の飛行艇が迎えに来たのはいいが、あの変質者も同行していた。お前治部省の長官だろう。何故来たんだ。忙しいはずだろう。

しかもわざわざ隣に座り、マリカの体をつかんで動けないようにしている。その上食料でつるつもりか、なにやら見慣れない食べ物を持ち出した。マリカが気にしていたゲオルの料理らしい。キュジイギュジイが知らせたのか。

「いかがですか」

ウイヴィエルの手にある食べ物マリカの口元へ近づく。あいつの用意したものなど食べさせたくはないが、この旅の接待役はあの変質者だ。なるべく大目に見なくてはいけない。イライラしながらも、マリカをみると、目が合った。困ったような、だが期待に満ちた目をしている。なんだ？

……ああ。可愛いな。食べてもいいものか私に確認しているのだろう。信頼を感じて嬉しくなる。マリカに食べさせるものはきちんと安全を確認してあるはずだ。あの男もそこまで阿呆ではないだろう。

「マリカ、何を食べたい？」

聞くと、口元に押し付けられたサフサフという食べ物を指差した。ひとつつなずくと、嬉しそうに口を開いた。ひとくちが小さい……ああ、私も食べさせたい。

「全部マリカのものです」

そう聞いたので、私がせっせと食べさせはじめると、変質者やクイグインネまで食べさせ始めた。邪魔で仕方がない。

マリカが周りに待てるものたちにも食べ物すすめたが、あまり手を伸ばすものはいない。クイグインネがいやしくも口に入れていたが、あまり合わないようだ。あの鳥の料理と似たようなものを思い浮かべれば、そうだろう。しかしマリカは嬉しそうに食べている。あんまり可愛いので、特に喜んで食べているきやらめるというものを少しもらつことにした。

「マリカ、私にも」

口の中に舌を伸ばしてきやらめるを舐める。でろでろに絡みつくような甘い食べ物だ。マリカの体液の方が程よい甘みで美味しいと思う。

「おいしい？」

「甘い」

私の言葉に不満げに口を尖らせる。こういう顔も可愛くて好きだ。しかし、マリカは私たちの反応がつまらなかつたのか、ついてきていた護衛のゲオルを招き寄せてその口に食べ物差し出した。ゲオルの料理だ、やつらの口には合うだろうがおもしろくない。私もあの味に慣れなければいけないだろうか。

「び、美形ですね？」

「ありがとうございます？」

何がどうなってそうだったのか、マリカがあのかだものを褒めました。美形？ マリカはやはりゲオルが好きなのか？ ゲオルにな

ればいいのか？ なれるわけがない。ゲオルが憎い。

「マリカはゲオルがお好みでしたか？」

「は、いえっ、そういうわけではないです。いや可愛くて好きですけど！ 向こうにも似た生き物がいて、その基準からすると美形つて言うかすっごく毛艶もいいですし！ そ、そそ、それで、それだけ、です……」

やはり毛なのか。やつらの毛皮を剥ぎ取ってしまいたい。それを被れば私もマリカ好みになれるではないか。

「マリカの基準で私は美形なのでしょうか」

ウイヴィエルイがまたおかしな発言をしだした。マリカが抱きついてくる。

「お、おじ様は、も、もちろん素敵です……」

思わず腕に力がこもるのは仕方がないと思わないか。アレだぞ、変質者だぞ。あんなのがいいのか？ 流石にあれを真似たいとは思わない。考え直したほうがいいぞ、マリカ。

「あつ！ へるさんもかつこいいよお！ すきー！」

抱きつぶしてしまうかと思った。

ウイヴェイエルイ 1 (前書き)

ウイヴェイエルイ視点です。

ウイヴェイエルイ 1

シンベンデルの社からの報告はいつも簡素だ。なにしろいまだ卵は孵らず、その状況では布告すべきこともないのだから。だから私はいつもは報告を見ることはない。部下にすべて任せていた。

しかしその日、いつもよりすこし分厚い報告書が渡された。ようやく生まれたというのだ。写真が入っている。紺の衣装ですべてを隠してしまうように覆われていて、露出している部分がやけに少ない。肌は不思議な色合いだ。うつすらと黄みがかっている。かぶらされたベールの奥からこちらを伺うように黒い瞳がのぞいていた。小動物のようだ。隣に従者だろっ男がいて、比べると随分小さく人形のように見えた。

見ていると妙に胸が騒ぐ。他にも写真がないかと探すが、たった一枚だけだった。

「スージ。いつ会いに行く？」

「いまあちらに派遣する者を選んでいきます。彼女が落ち着いてからということですから、そうですね、5日か6日後でしょう」

「私も行くっ」

「……ウイヴェイが行くほどでしょうか。たしかに寵児ともなれば重要人物ですが」

「会ってみたいんだよ。いいだろう？」

スージズージミールを見つめる。そうするといつもおもしろいほど動揺する。容貌は悪くない。体つきもほっそりとしていて割りと好みだ。もう何度も相手をしてあげたというのに、いつまでも初々しくて笑ってしまう。

「わ、かりました……そのように日程を組んでおきます」

顔を伏せて目をそらすようにするのを、顎をつかんでやめさせる。笑みを浮かべて口の端に口付ける。

「頼んだよ」

「ご褒美はこれでおしまいだ。手を離して、写真に目を落とす。

名前は、マリカ。タカハシマリカ。タカハシが家名、マリカが個人らしい。個名だけを呼ぶもののようにだ。

「マリカ、ね」

随分野暮つたい服を着せられている。私が選んだ服に着せ替えた。小さく細い体は好みだ。変わった色をしているが、容姿も可愛らしいといえるだろう。

私の人形にしたい。好きに扱いたいものだ。胸が騒ぐのは、そういうことなのだろう。

社に詰めることになったのは、従者の親戚という眼鏡をかけた、紫の髪の地味な男だ。キュジイギユジイ克蘭という。克蘭といえば先代の長であるタイダイ克蘭の血縁だろう。たいそうな人物が選ばれたものだ。

私と、私の補佐官が2人、それとキュジイギユジイ克蘭とで社へ向かう道中、彼から情報を送ってもらったため、なるべく気さくな様子を装って話しかける。硬い返事しかかえってこないが、会ったばかりで、しかも私は長官、彼はただの役人だ。そんなものだろう。どうやら写真を撮るのが趣味らしく、それもあって選ばれたのだろう。文書の作成能力も求められる。少なくとも社にいる間は彼の報告により新聞記事がかかれることになるからだ。有能であること

を願おう。

社は遠かった。飛行艇で3時間、そこからさらに浮遊艇で2時間近く。キュジイギユジイクランとはそれなりに話せる様になった。うんざりするほど遠かった。次からは飛行艇を貸しきって近くまで飛ばそう。

着くとすぐ女従者のクイグインネが出てきて、部屋に案内される。

「マリカは人が多いのは苦手なんだ。面会は最低限で頼むよ」

「では私と社付きになるキュジイギユジイクランで。補佐官は待機させましょう。よろしいですか」

「補佐官殿の召使に相手させるよ。準備ができ次第呼ぶから待っていてくれ」

言いたいことだけ言うとさっさと部屋を出てしまふ。あれではマリカの様子を流してもらうことはできそうにない。やはりキュジイギユジイクランを頼るしかないか。

応接室へ通される。紫の服を着せられた人形のような少女が座っている。震える瞳がこちらを覗いている。実際に見てみると、服を着ていてもわかるほどほど頼りない体だ。

「万理歌です。あの、様とかはいいので……よろしくお願いします」

姿ばかりか声までも可憐で、胸が痛いほど高鳴る。理想だ。私の理想がここにある。

元々、細く華奢な体の女が好きだった。エーリエーの女を囲ったこともある。あんなに細い腕や脚で本当に動けるのだろうか。少し力を入れればぼきりと折れるだろう。そうなれば泣くのか、その可

愛い声で。

寵児でなければ、なにをしても手に入れたものを。今も従者がこちらを睨みつけている。彼女に何かあれば他の種族も黙っていないだろう。クールーエルガの再来は困る。

いつか、私は手に入れる。そのときまで、私は優しいおじ様でいよう。

ウイヴィエリイ 2

まずはマリカを都か、そうでなくてももつと近い場所に住まわせたい。そうなれば会う機会も増えるだろう。あの場所にいたままでは会うことすらままならない。

寵児を披露する必要があるのは最初の一度だけ。そのときに都に住みたいといってくれば一番いいのだが、社はあれだけ不便な場所にあるにもかかわらず、世話が行き届いていた。あまり活発な性格ではないようだし、あのままではマリカはあそこから出てこないかもしれない。

従者も邪魔だ。特にあの男従者は、マリカをまるで自分のものように扱っていた。腹立たしい。しかし従者はそう簡単に変えられるものではない。

「マリカの好みがわかればいいんですがね……」

向こうでは手に入らないものであれば尚良い。そんなものがあればこちらに誘い出すエサにぴったりだ。

都に来たときは私が接待しよう。接待役を無下にすることは、あの従者もしないだろう。

キュジイギユジクランからの報告書が届いた。彼は案外使える男だった。いつも少ないながらも添えられている写真がすばらしい。マリカの楽しそうな様子が伺える。今回の写真はゲオル族と楽しげに戯れている様子だった。他の種族も、これを見れば我々が寵児を大切にしていると認めるだろう。

報告書には兵営を訪問したときの様子が書かれていた。マリカはゲオルの料理に興味があるようだ。ちょうどいい、社ではゲオルの

料理を作るのは簡単ではないだろう。料理人もシウムクイエだったはずだ。

都に来たときにはゲオルの料理を用意させることにした。服も色々を用意している。着せるのが楽しみだ。

「ウイブイエルイさま、お久しぶりです」

都へ呼ぶために飛行艇を社へ飛ばす。マリカとは久しぶりに会うが、嬉しそうに近寄ってくる。5日間しかないので、今回は積極的に接触をもつことにした。

「呼んでくださらないので寂しい思いをいたしました。都にいる間は私と過ごしてくださいませね」

飛行が安定したところで近くに呼び寄せて、嫌がられない程度に体を密着させる。早速ゲオルの料理を用意させると、非常に喜んで食べていた。驚いたのは口移しで食べるのに嫌がる様子がないことだ。小さな子どものように扱われることに不満はないのだろうか。非常に都合がいい。

私のことを素敵といていたし、印象は悪くない。

勉強と称して、翻訳具をはずして喋り始めたときは、あまりに可愛らしくて心の中で懊悩した。早く私のものになりたい。

しかし、私は少し失敗してしまったようだ。町で人に囲まれるかもしれないという話をしたときマリカは随分動揺していた。なるべく不安を取り除くように取材はすべて断っておいたことなども伝えたが、表情は晴れない。安全には十分注意を払っているので問題はないだろうが、よりわかりやすく護衛をおいたほうがいいかもしれ

ない。

都にいる間の宿泊場所には、私に与えられた官邸に部屋を用意した。元々賓客をもてなすために広い邸宅を用意されているのだ。実際に宿泊までとなるとマリカが初めてだが、問題はないだろう。

部屋に通してすぐに、マリカが意外なことを言い出した。

「私、少し考えたんですけど……必要なら、お話ちゃんとします。た、たいした話はできないんですけど！」

で、でも、あの、知らないところで、写真取ったりとか、勝手に書かれたりとか、そういうのがないようしてもらえば、ですけど」

マリカは真面目なようだ。広報の担当は喜ぶだろう。しかし、そうになると色々調整しなければならないため一緒にいられる時間が減ってしまう。……仕方がないか。できるだけわたしの優秀な部下に任せよう。

ウイヴィエリイ 3

マリカはたいした我俣も言わず、大人しすぎるほど大人しい。強く出られると抵抗らしい抵抗もせずに受け入れている。従者による過剰なほどの世話も平然と受け入れ、肌を露出した格好も恥ずかしくってはいるものの素直に着るし、体を触られるのもそつだ。誰に触られても怒るといことがない。

これは強引にいった方が早そつだ。

市場見学に誘つと、不安げにしている。人ごみが怖いのだろう。危険はないことがわかれば今後も誘いやすいので、安全を請け負つて出かける。

市場ではマリカを抱きかかえることもできたし、楽しそうにしていた。かなり私になれてきたようだ。しかし従者が邪魔だ。

クランの家に行くという。従者の一族だからといって優遇するわけにはいかないのだが、マリカが望むといえはあまり反対もできない。その間にもう一人の従者であるクイグインネに話しかける。

「どこかへいかれるんですか？」

「ああ、本を買おうと思つてね。マリカもよく読むんだよ」

そのことは報告があつたので知つている。どんな本を読んでいるのかまでは詳しくは知らないが、勧められればなんでも読んでいるようだ。

「どんな本がお好きなのでしょう」

「少女小説が好きなんだよ。似合ひすぎだね」

「ふふ、可愛らしいですね」

ぴったりだ。あの人形めいた容姿で少女趣味。思い切り着飾って愛でたい。

「クイグインネ殿。マリカがこちらに来てくだされば、もっと幸せに過ごしていただけると私は思っています。」

社はあまりに遠く、不便です。本だって簡単には手に入らないでしょう。せめてもっと町に近い場所にも来てもらえればいいのですが」

「マリカはあそこを気に入っているようだけどね。物を手に入れるのが大変なのは確かだけど」

「……私は、マリカの僕です。もっと役に立ちたいのです」

しおらしく振舞う。マリカの側には必ず従者が付従う。できれば同情でもして味方についてほしい。あの男従者では駄目だ。あれはマリカを独占したくて仕方がないといった顔をしている。この女従者はどうだろうか。私は女性には受けがいい。彼女にも悪い印象ではないはずだ。

「あたしはマリカの従者だ。マリカ以外の都合はしらないよ」

きっぱりという。この従者はどちらも扱いにくい。

「もしマリカが望んだら、知らせて欲しいのです。ヘルベルクラン殿は、マリカを外には出したがらないのではありませんか？」

彼女の望みを押し殺すようなことはしてはなりません」

マリカのもつとも側にいるのが従者だ。もし従者に反対されてはマリカは意思を留めるかもしれない。だから、反対することをまずは抑えたい。

「わかってるよ。あんたにいわれなくても」

身を翻し、去っていく。あとはマリカにこちらで暮らしたいと言わせればいい。

マリカが社に向かうため、飛行艇に乗り込んだ。私ももちろんついていく。これを逃せばしばらく機会は無い。

もうすでに空の上だ。どちらにしろ一度は帰す。側に近寄り、抱き寄せる。

「なぜあんな辺鄙な場所に行ってしまうのですか……。都に住んでくださればよろしいのに。」

いつでも呼びつけて頼ってください。私はマリカの僕です……」
顔を寄せて囁くと、慈愛に満ちた表情で私を撫でる。子どもかと思えば、こんな風にすべてを包み込むかのような大人びた顔もするのだ。

「また会えますよ……ね？」

胸が苦しい。これは、いとおいというのだろうか。思わず口付けると目を潤ませて、静かに受け入れてくれる。こちらにこなくともいい。私が向こうにいきたい。共にいられるのであれば場所など些細なことではないか。

「全部、全部、全部、私に、くれませんか？ 私のすべてはもうあなたのものだ」

「はえ……？」

先ほどまで私の舌が入り込んでいた口はいまだぼかんと開いたまま、困惑が返ってくる。これは熱情だ。今までに感じたことがないほど、私はこの子を求めている。

「しね」

髪を掴まれる。それを手で払って、向き直る。マリカを胸にしっかりと抱いて。

「離せ」

「私がマリカを手放せるわけがないじゃありませんか」

「しね」

「ふふ、恐ろしいことを言われるのですね。ねえ、マリカ」

「やめるマリカの名前を呼ぶな」

「ウイヴィエルイ、マリカを離しな」

イライラと今にも殴りたそうにしている男従者とは違い、女従者は冷静だ。先ほどからもぞもぞと腕の中でマリカが動いていると思っただら頭を押さえつけてしまっていたようだ。あまりに非力で抵抗を抵抗と感ぜられないのはすこし問題だ。気をつけないとつぶしてしまいそうだ。

力を緩めると、よろよろと抜け出てヘルベルクランのところへ行ってしまった。大きなため息がでてしまう。

「くるしかった……」

「可愛そうに、もう大丈夫だあんな変質者は近づけない」

「すみません、マリカ、つい感極まって……許してください、もうこのようなことはありません」

「う、うん……だいじょうぶです」

「マリカは貧弱なんだから触るときは気をつけてくれないと困る」

「はい。申し訳ありません」

「謝罪など不要だしね」

「大丈夫だから、ね。そんなこと言っちゃ駄目」

ヘルベルクランを諫めてから、潤んだ瞳がこちらを向く。眉が下がっていかにも困った様子だ。一呼吸して、気持ちを落ち着かせる。

「マリカとわかるのが寂しくてつい力が入ってしまいました。この数日があまりに楽しかったのですね。また会ってくださいますか？」

「はい、もちろん」

「そうだ、手紙を書いても？ 返事をくださいますか？」

「は、はい、あ、でも私こっちの字は書けない……」

「それではキユジイギユジイクランにでも様子を聞きましょう。やってくれますね？」

「はい。お任せください」

「あつかましいのではないか、ウイヴィエルイ」

「マリカは了承してくださいましたよ」

そういえば従者は口をつぐむ。

マリカは今は誰のものでもない。私のものになりたいと願いながらも、とらわれたのは私だった。私は真に彼女の僕になったのだ。

1 (前書き)

今回のシリーズ全般において下ネタ多めです。

私は悩んでいた。

都から社に帰ってきて、お別れにおじ様にキスされたのを怒られてしまったのだ。

こっちでも好き、とかそういう特別な気持ちがないとキスしないのかな。こっちでは挨拶代わりなのだろうかと思っただけで今まで何も言わなかっただけなんだけど、怒られるってことは違う……んだよね。

最初のころはいちいち騒いだものだけど、今では抱きついたりキスしたりがすでに当たり前になってしまっている。感覚が麻痺しているというやつだ。駄目じゃないか。

誰とでもキスするふしだらな子と思われてたら嫌だ。

私を好きだからキスするのかな。まあ、嫌いならしないでらうけど、でもクイさんもちゅーしてくるし、おじ様にしても舌まで入れてきたし。恋人じゃないとキスしないなら、告白もなくしてくることはないだろう。好き、とかも、言われてない……。

……言われてないよね？ あれ？ 言われたかも？ 僕ってというのはどういうこと？ うーん、でもでも恋人的な好きではない、気がする。付き合ってくれとかはなかったはずだ。私の倍くらい大きい人とお付き合いするなんて考えられないし、向こうだってこんなちびっこじゃあそういう気にならないんじゃないだろうか。でもでもでも。

どっしりよ。

「ヘルさん」

腿に腰を落ち着け、太い腕にもたれかかりながら遙か上にある顔を見上げる。穏やかな表情で私を見つめている。最近はあまり恐ろしい顔も見えていない。落ち着いたものだ。

「私のこと、好き？」

こんな甘えた恋人同士みたいな言葉を吐いてどうした私。頑張れ彼の本意を知るためだ。

「もちろん。好きだよ」

間髪いれずに返って来る。口元が緩んで笑顔になっている。この恐ろしい笑顔にもだいぶなれた。コレからが本題だ。落ち着いて行動せよ。

「私たちお付き合いしてるの？」

聞いちゃった。聞いちゃったよ。胸がどきどきする。なぜかこういうときに限って返事が遅い。いつもの電光石火の早業はどうした。あまり焦らされると逃げ出したくなるんですが。

なんか微妙に困った感じで、もしかして見誤ったかな。今までの行動を考えてみたところ好きって恋人的な好きなのかもって思ったんだけど、自意識過剰だった？

「私はすでに番と想っていたが」

「つがい？ ……え、え、あ、結婚してたの私たち！？」

「求婚を受けてくれただろう。ずっと一緒にいようと約束した」

「あ、あああ、あえっ！？」

言ったかな？ 言ったかも！ それだけで結婚が成立しちゃうの

? うそっ!

「わわ、わたしのいたとこじゃ、まずはお付き合いして、それから結婚をですね、するんですよ? 式とかもあげたりして、ね」

「私たちが付き合いとくと、ひとときの関係がほとんどだ。私はマリカとその程度の関係でいるつもりはない」

きりりとした顔で言い切られた。

つがい、って……。子どもとか、どうするんだろっ。む、むむむむりじゃない? おっ、おっきいし! きゃーかんがえるのやめよっ。うそっしよっ!

「マリカのいたところでは何か儀式が必要だったのか? それはどんなものだろう。こちらでもできるならばやりたいが」

「イエっ! 結構です!」

まずは確認を取り、誤解があるようならそれをとこうと思っただんですけどね。いきなりとんでもないことが判明してパニックです。

どうしよう。私の悩みがまた増えた。

結局、キスをするのは特別な関係なのかはわからないはまだ。このことはもうヘルさんには聞けない。ヤブヘビになっちゃおう。となるとクイさんしかない。私の人間関係狭すぎませんか。

それにしても、ヘルさんの過保護な態度は私がつがいだからなのだろうか。大事にはしてもらってると思うし、愛のようなものは感じる。家族愛的な。なんかこう、お父さんっぽいんだよね。お父さんと呼んで欲しいと言われたせいかな。……なぜそこからつがいへと跳躍したのだろうか。

しかし、つがいとはまたなんとも動物っぽい話だ。ゲオルなら納得できるけど、人型なのになあ。発情期とかあるんだろうか。あっても相手をするのは無理だ。でも結婚していると思っていたわりにはそれほどえっちなことはされていない……いやそうでもないな。いろいろあったな。もうやめよう、考えちゃ駄目だ。

ちょうどクイさんが来てくれた。天の助けだ。立ち上がって走りよる。……よろうとした。後ろから服を掴まれてべちんという音を立てて転び、鼻を打った。いたすぎる。

「マリカ、どうした!？」

「い、いたいよ」

私は鼻がいたいと言ったのだ。なのに振り向くとヘルさんはおっそろしい形相で、私の服を勢いよくめくった。おしりまで丸見えである。さっきまで考えていたことが色々と頭をめぐって声も出ないでいる私にかまうことなく両足を開かれてぎゃー!

「何やってんだ」

助けてクイさん！

「血が出てる。いつ怪我したんだ」

「なんでそんなとこ……ああ」

ぱんつまでぬがされそう！ 紐ばんですよ！ 必死で押さえる。

「生理だろ。ヘルベルクランは外に出てな」

「でもこんなに血が」

「うーん、確かに随分量が多いけど……。マリカ、向こうではどう……マリカ？」

二人で私のまたを見ている。わ、わわわ、わーん！ 女の子になんてことするんだばかり！

「はなれてっ！ そんなとこみちやだめなんだからあ！」

泣き喚きながら二人をお説教した。

「ばかつ！ えっち！ なんでみせるの！ だめでしょ！」

「クイグインネ、出て行け。お前には見られたくないそうだ」

「あのねえ……男にまかせられるわけないだろう。出ていきな」
「そっだよっ！ ばかつ！ えっち！」

ヘルさんは納得いかないような顔をしていたけど部屋を出て行った。

「クイさんもあんなとこみないでっ。女の人でも恥ずかしいんだか

らねっ、だめだからね!」

「わかったわかった。怪我をしたわけじゃないんだろ?」

「ふー……。うん。生理がきたんだと思う」

こちらにきてから1ヶ月以上たつ。向こうにいたときのことも考えれば2ヶ月はきていないことになるけど、そのくらいあくことはたまにあつたので気にならない。

「はじめてか? 前兆はなかった? 随分たくさん出てるねえ……。」

「ちよつと舐めてやるよ」

「はい!? ちよ、ちよつ……。」

「だってもつたいないだろ?」

話をまったく聞いていない。目がらんらんとしている。……あれ、なんかこれ、貞操の危機ですか?

もちろん断固阻止ですよ。クイさんには結構きわどいところを見られてるんだよなあ、と思い出したりもしたけど、あのころは危機感の方向性が違ったのです。

拒否を繰り返していると、あきらめたのか着替えを取ってきてくれた。

「とりあえず着替えようか。」

……あれ、まだ結構でてるね。どれくらい続くんだ？」

「どれくらいって、1週間くらい？ 明日はもっと多いよ。」

布を折りたたんだものを敷いた短いスパッツのようなものをはくところどころ文化レベルが低いなあ。

ああ、憂鬱だ。おなかは痛くなってくるし、アレは不快なものだ。ただでさえそうなのに、ナプキンすらなく布オムツ。げんなりする。

「そんなに続くのか。うーん、困ったね。」

あたしたちは前兆があつて、その後1回出血するだけなんだ。だからそんなに長い期間だとうしたらいいのかねえ」

「前兆はよくわからないけど、大体月に1回あるよ。今回はちよつと間が空いちやっただけ」

「回数も多いね。そんなにあるならずっとこれですつてもかわいいと思うけど……向こうではどうやってたかわかる？」

「え、と……。ナプキン使ってた。吸収がよくてもれないシート」

しばらくナプキンについての説明をしていた。メモをとりながら真剣に聞いてくれた。もっと快適なの作ってもらえたらいいなあ。

「生理が来るのは初めてじゃないんだね。じゃあ発情もしてたの
か？　こんなに小さいのに」

しみじみ言われた。発情……するわけがない。

「そんなのしないよ……もうっ。彼氏もいなかったし」

「マリカもあんまり反応しないんだね。種族が違うせいかねえ？」

「だからしないってば！」

顔が熱くなる。なんでこんな話に……。

「そうかい？　ねえ、マリカ。ヘルベルクランをどう思ってるんだ
？」

「え、えっ、好きだよ？」

いつの間にか結婚してたし。好きといえば好きじゃないかなあ。

「ふーん。じゃあやりたくなったら相手させな」

……。何を、やるのでしょうか。

「誰彼かまわずは駄目だからね。あいつじゃなくてもいいけど、い
い男を選ぶんだよ」

「ちよつと待つて。何の話？」

聞いてはいけない気がする。でも聞かずにはいられない。

「発情したら交尾するだろっ」

「しないよ！　さ、さっきから……しないってば」

「反応したらだよ。そういうときがくるかもしれないだろっ。」

あたしも生理はきてもあんまり反応しないんだよね。子ども作る
ときも面倒だった」

会話がかみ合わない。そうだったこっちの常識は私の非常識だっ
た。

「あ、あのね、私は、そういう風にはならないの。あと、結婚した
人じゃないとそういうこともしないの」

ちょっと違う気もするが、経験のない私に詳しく説明するのは無
理だ。

「ああ、そういうことか。……可愛いね」

生ぬるい優しい表情で私を見つめて、頬を撫でられた。なんかあ
まり伝わってない気がする。

こっちの恋愛観は本当によくわからない。

体がだるいし、動きにくいので、ベッドの上でぐでぐでと過ごす。ヘルさんが心配そうにしている。病気な訳じゃないんだけどなあ。腰が痛いという指でなでなでしてくれた。気持ちいい。思わずうとうとしてしまった。その間ずっとしてくれてたみたいだ。

「ありがと……きもちよかった」

「マリカの体はもう大人なんだね」

「もう17だもん。結婚もできる……」

そこまで言っってはっとした。結婚。ヘルさんといつのか結婚していた？件をどうするべきか。というか、こちらでの結婚がそもそもよくわからないだよ。クイさんの家族状況から考えてみるに、子どもを作る関係？ 種族が違つとそついう気にならないみたいなので、私と子作り……は、しないのかも？

結婚はおいておいても、子どもは無理だ。ヘルさんの子どもとなれば相当大きいはずだ。産める訳がない。その前段階にも大いに問題はあつけど。だからまあ……好きとかそついうのはどこかに追いやつても、子作りに類する行為はできない。出産ともなればまさに命がけ。死んでしまう。ここはきちんと言わなければいけない。恥ずかしいとか言いにくいとか、そんなのは命の危険から比べればたしいしたことではないはずだ。

「あの一……ヘルさん？」

「ん？」

「あのね、あのう」

「なんだい」

「うんと、ね」

「うん」

言いくらい！

「うっ、子どものことはどう考えてるのかな！」

いったー！ いったよ、やったー！

「子ども？ 欲しいの？」

逆です。できたら困るんです。

なんでそんなにきよとんとしてるんでしょうか。

「ヘルさんは？」

「私の子どもか？ 誰に聞いたんだ……。連絡も取ってないからなあ。まあ、元気にしているんじゃないか」

「……へ？ い、いたの！？ こどもが！？」

なんじゃとー！！！！ なんでそれで私と結婚するか！ いや、連絡も取ってないってことはもう離婚はしてるのか？ でもそういう隠し事よくない！

「産まれたとは聞いたから多分」

なに平然としているんだ。私はがばつと起き上がり、すました顔をしているヘルさんを睨みつけた。

「そ、そそそ、そういうのはっ、いわなきゃだめでしょー！」

「……何を言うんだ？」

「こどもがいたとかっ……！ わっ、私たち結婚してるんだよ！

そういう大事なことは言ってくれないとっ……………」

「大事か？」

「家族は大事でしょ！ だって、だって……………ヘルさんの家族なのに」

色々新事実が発覚したせいだ。どうしたいのか、なにがしたいのか、わからない。急に気持ちがおれてうつむく。……………なんだろ。胸が苦しい。

頭の上に重いものがのる。そのまま撫でてきたから、きっとこれは手だ。その重みに押されて、ベッドに顔を押し付ける。

「確かに私の血族ではあるが、種を与えただけだ。一族のものでもないし、会ったこともない。だから、マリカが気にかけることはないんだ」

やっぱりこっちの人の考えはよくわからない。

「家族が欲しい？」

そういうこと、優しい声で言わないで欲しい。思い出して泣きたくなる。

ベッドから無理やり引き剥がされて、濡れた顔を冷たい舌が這い回る。そっとしておいてくれればいいのに。でも放っておかれたら、ずっと苦しいままなんだろう。

「マリカは、私以外の誰が欲しいんだ？ 子ども？ ……できないよ。マリカの種族はここにはいない。どこにもいない」

声が。やさしくて。おなかが、ぞわぞわする。

そうか。子どもは、できないのか。じゃあいま私に与えられた痛みは無駄なわけだ。もったいない。

「マリカは私のものだ。他の誰にも、渡さない」

「このあとの出来事ですか？ 黙秘します。」

ヘルベルクラン 1 (前書き)

ヘルベルクラン視点

ヘルベルクラン 1

最近のマリカは以前より一層可愛らしくなって困る。しょっちゅう私を見つめて、それに私が気が付くと恥ずかしげにそっと視線をはずすのだ。私に気づかれぬように見ているつもりなのだろうか。遠慮せず見てかまわないというのに。

今日も二人きりになると、すりよって甘えてくる。柔らかな体が腕に絡む。小さな赤い唇が震えて、私の名前を呼び、甘い言葉をねだられる。

「私のこと、好き？」

「もちろん。好きだよ」

顔がにやける。唇に噛み付きたい。しかし、そんなことをしたら声が聞けなくなってしまふ。自制しろ。

「私たちお付き合いしてるの？」

なぜそんなことを聞くのだろう。今まで精一杯愛をささげてきたつもりだ。足らなかつただろうか。付き合いですませるような軽い気持ちで求婚はしていない。マリカは私の番だと思っている。まだ体をつなげていないのを気にしているのだろうか。しかしそれはマリカの体を考えてのことであって、マリカに魅力がないというようなことはまったくくない。私に準備はいらぬ。今すぐにもできる。私は慎重に言葉を返した。

「私はすでに番と思っていたが」

「つつがい？ ……え、え、あ、結婚してたの私たち！？」

すると驚くべき言葉を聞かされた。マリカにそのつもりがなかったとは……。

「求婚を受けてくれただろう。ずっと一緒にいようと約束した」

恨みがましい言い方になってしまった。愛されていると思ったのは気のせいだったのだろうか。

「わわ、わたしのいたとこじゃ、まずはお付き合いして、それから結婚をですね、するんですよ？ 式とかもあげたりして、ね」

つまり、その手順を私が踏んでいなかったために不安にさせたのだろう。可愛い子だ。マリカが遠いところからきたのだという意識が遠ざかっていたようだ。随分まどろこしいやり方だとは思うが、それがマリカのやり方であれば従おう。マリカ式の手続きを取ればいいのだ。

「マリカのいたところでは何か儀式が必要だったのか？ それはどんなものだろう。こちらでもできるならばやりたいが」

マリカは遠慮していたが、そのうち聞き出したい。その儀式がなければ番になれないというなら、他のものに知られないようにすれば 私だけのマリカにできるのではないか。楽しみだ。

部屋を出ていたクイグインネが戻ってきて、マリカが立ち上がり私から離れる。後姿を見て、服に赤いものが見えた。今日の服にあるものはついていなかったはずだ。赤い……マリカの血は赤い。怪我をしてしまったのかと、引き止める。

「マリカ、どうした!？」

痛い、と声かして、慌てて服をめくり傷口を探す。下着が赤く染まっでいて、ここを怪我したのだらう。しかしマリカが恥ずかしがって下着を抑えて、脱げないようにしている。今はそんなことを気にしている場合ではない。手をどけてくれ。

「生理だろ。ヘルベルクランは外に出てな」

クイグインネがそれを見て言う。生理？　こんなに血が出ているというのに。私は男で生理などなかったことがないが、今まで付き合った女のものなら見ている。こんなに血塗れているものなどいなかった。

「でもこんなに血が」

「うーん、確かに随分量が多いけど……。マリカ、向こうではどう……。マリカ？」

「はなれてっ！　そんなとこみちやだめなんだからあ！

ばかつ！　えっち！　なんでみせるの！　だめでしょ！」

服の裾を両手で押さえ下着を隠し、泣きながら必死でそんなことを言う。その様子があんまり可愛くて興奮してしまう。

「クイグインネ、出て行け。お前には見られたくないそうだ」

わたしはマリカの番なのだから、見てもいいはずだ。

「あのねえ……。男にまかせられるわけないだらう。出ていきな」

「そうだよっ！　ばかつ！　えっち！」

理不尽ではないだらうか。しかしもしも生理なのだとしたら、こ

の女に任せたほうがいいのかもれない。仕方なく部屋を出た。

やはりあれは生理なのだという。しばらくあのように血が出続けるものらしく、心配でならない。何日もあのように出血して本当に平気なのだろうか。血を増やす食べ物を食べさせなければ。

体が、特に腰が痛むというので、撫でてやると気持ちよさそうにしている。うとうととしたかと思ったら眠ってしまった。

マリカの体はこんなにも小さくて華奢だというのに、すでに大人なのだ。やっても問題ないな。慣れさせればいいのだ。うん、問題ない。

「……うあ。わたし、ねてた……？」

「ほんの少しだけ。寝ていていいんだよ」

私が全部やるからマリカはここに寝ているだけでいい。

「ずっとマッサージしてくれてたの？　ありがとう……きもちよかった」

マリカはぼやんとした、いまだ夢の中にいるかのような表情で小さく微笑んだ。可愛い。これくらいのことはいくらでもする。いや、もっと気持ちいいことをしたい。しかしマリカは恥ずかしがりやだから、あまり直接的なことを言われるのは好きではなさそうだ。どう誘えばいいだろうか。考えていると、マリカがもじもじと言葉を言いよんでいる。なんだろうか。

「じつ、子どものことはどう考えてるのかな！」

子どもが欲しいのだろうか。しかしマリカと同じ種族はこの世界

にはいない。交尾の真似事はできるし、私がいくらでも相手をした
いがそれで子どもができることはない。欲しがってもそればかりは
与えることができないのだ。マリカは世界にたった一人の種族。寂
しかったのだろうか。私がいるのに。

「ヘルさん？」

マリカの子ならそりゃあもちろん可愛いだろうが、見ることはか
なわない。いや、もしか私の子どもことなのか？ たしか、何年
も前にできたはずだが、名前は与えていない。どこでどうしている
のだろう。そのことをどこかで聞いたのだろうか。

「私の子どもか？ 誰に聞いたんだ……。連絡も取ってないからな
あ。まあ、元気になっているんじゃないか」

そう言うと、マリカは勢いよく起き上がったかと思うと私に向き
直った。顔を赤くして、手を握り締め、上目遣いで見てくる。可愛
い。が、どうしたのだろうか。私の子の話ではなかったのか？

話を聞いていると、つまりは番になった相手のことは何でも知り
たい、ということなのだろう。初々しく可愛らしいことだ。しかし、
私自身興味もない子どものことなどマリカが気にする必要はない。
そう伝えると脱力し、寝台に突っ伏した。

「家族が欲しい？」

それとも。血を分けた存在が、恋しいのだろうか。私だけでは足
りないのだろうか。

「マリカは私のものだ。他の誰にも、渡さない」

隙間なく私を与えると、マリカは泣いて喜んだ。美味しかった。

体中が痛い。動けないので身の回りのことは全部やってもらっている。トイレすら一人で行けない。泣きたい。食べ物は果物やオートミールのほかに、生肉っぽいものがある。それを口移しで……。しかも飲み込むまで離してくれない。泣きたい。

「それ、やだ。おいしくない」

嗚れた声が出る。自分の体なのに、自由になるところなんてないのだ。今の私には。

「これを食べると血が増えるらしい。出血が多くて心配なんだ」

そうさせたのは誰だと思ってるんだ。困ってればいいんだ。そうだそうだ。

口を閉じてふいとそっぽを向いていると、今度はオートミールを入れられた。口移しじゃなくて、おさじでくれればいいのに。そう思ったけど、やりとりする気力もなくて大人しく飲み込んだ。

あまり食欲なかったけど、強制的に食べさせられて、おながいっばいだ。私をベッドに寝かせて、立ち上がると出て行こうとした。

「どこ、いくの？」

「これを外に出すだけだ。どこにも行かない」
「だめ」

腕をようやく動かして、手招きする。これだけでもひどく疲れてしまう。でも離れていると不安で仕方がない。

触れていて。つないでいて欲しい。どこかへ落ちてしまいたいそうだ

から。

ぼんやりとベッドの上で何日か暮らして、ようやく出歩く許可が出た。久しぶりに庭を散歩する。爽やかで気持ちがいい。でもすぐ疲れてしまった。体力落ちてるなあ……。

立ち止まってしゃがみこむ。昨日は雨が降っていたみたいで、地面が濡れていて座れない。草の上で寝転がったら気持ちよさそうなのにな。

「マリカ、具合が悪いのか？」

「ううん。ちょっと疲れたから休んでるの」

よいしょと立ち上がって、伸びをする。

「体力つけないと駄目だね」

「疲れたなら私が」

「もー。私歩けなくなっちゃうよ」

ヘルさんは心配性だ。普通に生活するくらいならもう大丈夫のに、いまだに何でもしてくれちゃうのだ。

「あ、鳥さんがいる」

兵營で会ったエーリエーのひとだ。名前は知らない。今日の当番みたい。私が見たのに気が付いたのかこちらを見て、羽をばさばさしている。手を振るようなものだろうか。私も小さく手を振った。

「そつだ。マリカが寝込んでたとき、獲物を取ってきてくれたんだよ。部隊から見舞いだっていつて。血を増やすらしいよ」

「そうだったんだ」

あの生肉っぽいものは警護の人がとってきてくれてたらしい。あまり食べられなくて申し訳ないことをした。でも調理してくれればもう少し食べられたと思うんだ。こっちは人はワイルドだ。

あんまり食べられなかったとはいえ、お見舞いをもらったらお礼はするべきだ。といっても、ありがとーと言うだけでいいものだろうか。

「お礼をしたいけど、何かないかな」

「見舞いなんだから、マリカが元気になったのがわかればそれがいいんじゃないか？ 手紙でも書いたらどうだ」

えー……。それだけでいいのかな。うーん。でも私にお返しをかうお金はないからなあ。

「そうする。お手本書いてね、私、自分で書くから」

せめて自筆で頑張ろう。

「おみまい、ありがとう、ございます……すっかり、げんきに、なりました。マ、リ、カ」

短いけど、こんなものかな。ヘルさんとクイさんにも見てもらって、ちゃんと読めると太鼓判をもらう。みようみまねで書いただけなので、綺麗にかけたかどうかまでは分からない。読めればいいんだ読めれば。

最後に日本語で署名もつけて、書き上げたばかりの手紙を封筒にしまう。これを、いつも来てくれている警護の人に渡して、帰ると

きついでに持ってかえってもらおうのだ。今日はもう遅いから、明日かな。

「でもすごいねー。野生の動物を狩で獲ってくるんでしょ。弓とか銃とか使うの？」

「マリカは狩に興味あるのか？ 今度いくかい？」

この辺りの獣は小さくて手ごたえないけど、マリカにはちょうどいいかもね。どんな武器つかうんだ？」

「狩は久しぶりだな」

「最近訓練してないだろ。大丈夫なのか？」

「あたりまえだ」

あの……行くとは言ってないんですが。目の前で動物が死ぬ様子は、あまり見たくない。

「どうだか。そうだ、手合わせしよう。まああたしが勝つと思うけど」

「うるさい。いつまでも勝てると思うな年増が」

「はははっ、あんた自分の勝率分かってるのか？ よくそんな口が聞けるね。マリカに判定してもらおうよ、いいだろ、マリカ」

「は、はいっ!?!」

にらみ合って険悪な雰囲気。目立たないよう縮こまっていたのに、なんで私にふるんですか。

「私、そういうのはよくわからないから……狩とかもしたことないし、いいよ」

「よし、じゃあ明日ね」

「……いいだろう」

いいよって違う意味ですよ。分かっけて誤解した振りしてるのかな!?

社には警備の人の詰め所がある。その近くに、体育館みたいなところがあつて、そこで手合わせというのをするらしい。

休憩中の警備の人もやってきて、覗き込んでいる。試合判定とか私ではよくわからないので、見物している人たちを近くに呼び寄せた。といっても、遠慮しているのか、周りは人一人分くらい空いている。悲しい。

「従者の方の手合わせを見るのも久しぶりですね」

「二人とも、強いんですか？」

「従者ですからね。私たちもいますが、マリカ様をお守りできるように、いつも訓練していましたよ。時々うちの訓練所にも来ていました」

「クイグインネが勝つ方に賭ける」

「おれもクイグインネだな」

私から見るとどちらも強そうなんだけど、クイさんの方が評価が高い模様。体の大きさはあまり変わらないし、いつも一緒にいてもどっちが強いかなんて考えたこともなかったけど。ああ、でもクイさんの方がもしかしたら力は強いのかも。触られるときの感触からして。

二人とも動きやすそうな、ぴったりした服をきている。向かい合つて、ぴりぴりした空気がこっちまで漂ってくるようだ。緊張してきた。目をそらした先に、茶色いわんこがいた。

「エルテさん」

エルテさんは、柴犬に似たゲオルのひとだ。久しぶりにもふもふさせてもらえないだろうか。

「エルテさん、こっちどうぞ」

手招きすると、寄って来てくれた。そして隣に座り込み、顎が私の頭上にのった。白い胸毛に顔が埋まる。ふわふわー。幸せ。ふわーと上から音がする。匂いでもかがれてるんだろうか。ちよっと恥ずかしい。

抱きついてすりすりしていると、段々私に体重がかかってきて、それを避けていったら押し倒されるような体勢になってしまった。でも毛皮に包まれるような感じで楽しい。

すこし体を起こしたかと思っただらぺろんぺろんと、舌が伸びてきて顔中がヨダレでべったべたになってきた。首とか舐められるとくすぐりたい。

「そこはだめだよー」

「マリカさまあ……」

体全体ですりすりされて、じゃれているうちに、興奮してきたのか動きが激しくなってきた。流石にちよっと重い。苦しい。

「お、おもい」

辛くなってきたところで、うめくと、エルテさんが引き剥がされた。警備の人が慌てている。

「うぐ」

「エルテ、何やってんだ！」

「大丈夫ですよ」

体を起こすと、おなかの辺りがべったり濡れていた。……興奮しすぎておもらし？ うわあ。こういうときはどうしたらいいの。そっとしておくべき？

そのあとはちよつとした騒ぎになった。手合わせどころじゃないです。ヘルさんがその場で私の服をはぐものだから皆さんに裸を見られるし……。たとえ汚れても裸よりマシだと思っんです。

お風呂で綺麗に洗ってもらって、服を着替える。

洗ってもらってるときのヘルさんすごかった。鬼気迫る表情ってこういうのをいうのだろう。あ、お風呂はね、あれしているいるあつて動けなかつたりしたのでね。それからずっと一緒に入ってるんですよ。いまさらですよ。

「あんまり怒らないであげてね」

私も一応偉い？重要人物？なので、それにむかつて粗相してしまつたわけで、エルテさん怒られてるだろうなあ。しょんぼりしたわんこがリアルに想像できる。きゅんとする。

「大丈夫だマリカ。始末はきちんとつける」

こ、こわい……。ヘルさんはきつと犬嫌いなんだな。

応接間に行くと、隊長さんと……外のお庭に茶色いものが。エルテさんだ。なんであんなに遠いところにいるんだろう。隊長さんは土下座している。さっきのあれを謝ってるんだよね。土下座って世界共通だったのか。

「申し訳ありません。私の不行き届きでございませぬ。どのようになつても処分してください」

大事になつてる。どうしよう。

「去勢してやる」

「そいつは除隊でいいんじゃないか。生理現象なんだし、そこまでしなくてもいいだろう。今日の監督官は謹慎だな」

「去勢」

「えっ、え、やめちゃうの?」

あれくらいで? そうだよ、生理現象なんだよ。犬は興奮しすぎると粗相しちゃうつて聞いたことあるよ。それなのに厳しすぎない? エルテさんは耳も尻尾もへたつて伏せをしている。あまりにもしよんぼりしていて、胸が痛くなる。

「え、ああああ、わ、わたし! ちゃんとしつけもするし、おねがい! 捨てないで!」

思わずそんなことを口走っていた。

そんなわけで、エルテさんは私のペットになりました。もっふもふ。

エルテ 1

どうも。マリカさまの奴隷、エルテです。

奴隷って制度は今ではないはずなんですけどね、まあ、相手はマリカさまなんで。特別です。

いやー、以前お会いしたときは比べ物にならないほどいい匂いがして我慢できなかったです。他の男の匂いがしなければもっと良かったんですけど。これからはお側にいられるんで、俺の匂いをいっぱいつけるつもりです。

しかし種族が違っていると発情もしないはずなんですけどね。マリカさまはゲオルに近いですかね。でもシウムクイエも発情してるみたいだし、どっちなんですかねー。

まあいいです。

荷物をとりに兵営まで一度戻ったとき、同じゲオルのユオーさんとマリベナさんにも忠告しておきましたよ。あれはやばいって。

「いやー、まじっす。まじやばいっすー。マリカさまの匂いがもっすっごいいんですよ。これからずっとかいでいられるなんて嬉しいっす。」

あ、でもお二人も気をつけてくださいね。マリベナさんは女だから平気かもしれないっすけど、ユオーさん襲っちゃ駄目ですからね。俺は次からはちゃんと合意を取ってからやるんで大丈夫」

「大丈夫じゃないだろう」

「マリカ様に発情したのか？ 確かに以前お会いしたときいい匂いだとは思ったが、そこまですはなかったぞ」

「んー、なんかすつごくなつてたつすよ。いつからなんですかね。都へ行ったときはなんともなかったんですよね」

都へ着いていったユオーさんに聞いてみる。

「まあ、そうだな……いや、でも……」

「なんだ」

「ちょっとこう……変な気持ちにはなつたな。いや、いや、少しだけだ。種族も違うし気のせいだろうと思って」

「駄目ですからね。あれは……」

俺のです、と言いたかったけど、ヘルベルクランさんの顔が思い浮かんだんでやめときました。あの人すごい顔で睨んでくるし、苦手つす。

「エルテと違っていきなり襲い掛かるようなまねはしない。しかも相手はマリカ様なんだぞ」

正直お説教は聞き飽きたんですけど、普通なら許されなかつすよね、たしかに。マリカさまがあんまり無防備なんで、気を抜くとやばいんですよね。気をつけるつす。

まあ、ちゃんとしつけてくれるってマリカさまが言ってたんで、楽しみです。

後日、警護の当番で社に来たユオーさんの様子がおかしかったのを、俺は見逃さなかつたつす。やばいつすよねー。これ。

私は悩んでいた。

私に粗相したってことで、仕事を辞めさせられることになったエルテくんを私が飼うことになった。飼うってペットじゃないかそれでいいのかと思うんだけど、エルテくんには不満がないらしい。だけど……。

「マリカが許可してもいないのに近づくな奴隷の癖に」

「マリカの役に立たないごくつぶしはいらん」

「いい身分だな。マリカに飼ってもらえるなんて」

この通り、ヘルさんが可愛い。これってしつけ……？ ただの犬嫌い？

どうしたものかなー。

「エルテくん、ブラッシングしてあげるよ」

「はいっ、マリカさま」

ブラシを手に呼べば、すぐに目の前でごろんしてくれる。かわいい。体が大きいので非常にブラッシングのし甲斐がある。お風呂も私が入れてあげている。その成果かすごくつやつやのふわふわな毛になってきた。柴犬からサモエドにクラスチェンジだ。手入れで結構違うものだ。

ブラシにつまった抜け毛を見て、これで何か作れないかなーと考えたりする。フェルトとか、毛糸とか。ブラッシングを終えて、頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。白いおなかの毛に顔を

埋めて、ぼんやりと考える。

ヒモ扱いされてるエルテくんがかわいそうだ。何かお仕事をして、それにちゃんとお給料を払えたらいいんだけど、私が個人的に雇うお金はない。

結構セレブな生活をおくっている私だけど、私自身の財産というものは今のところない。マナのことを考えた先行投資みたいなことだともうんだけど、シムクイエを中心とした国々から援助を得ていて、お金の管理は国と従者とできていてほしい。年間予算の範囲内であれば大概の望みはかなえてくれる。エルテくんのことだって、そこからお金を出してもらっている。

……私、甘えすぎ？ 楽しく暮らせばそれでいいって言われてるけど、それに甘えてたら駄目だ。エルテくんのこと、私が飼い主なんだから、私が稼いだお金で面倒見れば、いいんじゃないだろうか。

はつきりいって、社にいたのではお金は手に入らない。周りに何にもないから。となると、どこかの町か村か、とにかく人のいるところに出ないといけない。ただ、私ができる仕事があるのかどうかは疑問だ。それに、そんなことになったら、ここはどうなるんだろう。ヘルさんやクイさん、他の人たちは？ 皆とお別れなんだろうか。いや、ヘルさんとクイさんは私の従者だから一緒に来てくれるはず。でもそれも私の我侭だ。ひとつ我侭を言うと、ほとんど際限なく我侭がでてくる。困った。

エルテくんの暖かいおなかにくっついたまま、ため息をついた。

お風呂でも考え事をしてため息をついていた。湯船につかっているのに、ヘルさんの体はひんやりしている気がする。タオルもなくすっぱんぼんなので、触れている部分の熱が直に伝わってくる。意外なことにかがわしいことは何もなく、いたって普通にお風呂に

入るだけなんだけど、それでも色々気になるわけで。ああ、一人でのんびり入りたい。

「マリカ、悩み事があるなら言っただけいい……」

はつとして振り仰いで顔を見ると、悲しそうだ。そんな顔されると私も悲しくなる。

「あの、ね……」

何か言わなきゃ、と思うものの、なんと言えいいのか分からない。お金が欲しい、なんて、言えばきつと用意してくれそうな気がするけど、それじゃ駄目だ。何の解決にもなっていない。

「何か私ができる仕事、ないかなって思って……」

「仕事？」

「うーん、あの、エルテくんの、私が飼ってるんだから私が稼いだお金から出した方がいいのかなって、思って。でも、何も思いつかないし、どうしようかなって」

「あんな奴隷追い出せばいい。マリカを悩ませるなんて生きる価値もない」

過激だ。ヘルさんはエルテくんに大して過激すぎる。

「駄目だよ。ちゃんと、飼ったら最後まで面倒見ないと駄目なんだよ」

ペットを飼ったことはないけど、常識だと思っ

「……マリカがそう言うなら」

しぶしぶといった感じだけど、一緒に考えてくれることになった。ほっとした。首に抱きついてちゅーしたら、大変なことになった。かじられて噛み跡だらけになって、のぼせた。

やっぱりお風呂は一人で入りたい。

ヘルさんに、クイさん、エルテくと、キューちゃんが、集まってくれた。一緒に私に出来る仕事を考えてもらおうのだ。

「なんで仕事をしたいんだ？ エルテのことは、気にしなくてもいいんだよ。マリカの遊び相手みたいなもんなんだし。

それでも気になるなら、社で雇おうか？」

「えっ……そんなことできるの？」

「いやです。俺、マリカさまの奴隷でいたいっす。捨てないで欲しいっす」

うるうるした目で見つめられた。お耳もへたって……きゅんときた。

「捨てたりしないよ！ ずっと一緒にいようね」

「はいっ」

顔中べろべろ舐められた。尻尾が千切れんばかりに振られている。かわいいっ。膝の上にエルテくんの頭を乗せて、首をわしわしと撫でてあげる。もつめるめるなのです。

「まあ、マリカがそういうならいいよ。どんな仕事をしたいんだい？」

「……わ、わかんない……店員さんとか？」

アルバイトっていったら、なんとなくコンビニの店員さんかなーと思ったのでそんなことを言ってみた。

「うん？ 町で働きたいのか？」

「ここを離れてもいいなら、できることは増えますね」

「ここでできる仕事あるの？」

それならそのほうがいいかも。人に囲まれるのは怖い。

「何かマリカが作ったものを売りに出すとか……。龍児の愛好家って結構いるからね。なんでも買いそうじゃないか」

「それならマリカ様の写真はどうぞでしょう。私の知り合いも、譲って欲しいって人が結構いるんです」

「写真なら量産もしやすいし、いいね。私も売れそうだって思ってたんだ。

資金と販売経路はどうしようね。あてはあるかい？」

「私の母が商売をやっていますから、その伝は使えるかもしれないが。あまりクランに偏ると独占していると見られるかもしれない」

「あたしも売るほうのアテはあんまりないだよねえ」

「報告のときに上司に聞いてみます」

「そうしてくれ。ここにいると情報に疎くなるのは困るねえ」

どんどん話が進んでいますが、写真……を売ることは決定なのでしょうか。本当に売れるの？

「んー……ヘルさんは、どうおもう……？」

さっきからあんまり会話に入ってきていないので、話をふって見た。ら、おそろしい顔をしていた。夢に見そう。

「ど、ど、ど、たの……？」

私があわてていると、クイさんがにやにやしなから言った。

「かまってももらえなくて拗ねてるんだよ。放っておきな」

「いい年して恥ずかしいですね」

「……うるさい」

そういえば最近エルテくんのお世話ばかりで話もあんまりしてないなあ。夫婦円満の秘訣は、いつでも新婚生活ってお母さんが言ってた。気をつけよう。

「い、ごめんね……？ 新婚さんだから二人の時間も必要だよね。気をつけるね」

「しんこん……」

「結婚したばかりだし……ヘルさんは私の旦那様だもん、一番だいい」

「だんなさまとかなんなんですかまりかさまどれだけもえさせればきがすむんですかあいてがへるさんってところがひじょうにふまんですけどええふまんですどうせならもっとしんしてきなおとこだったらよかったのにどうぞくのびしようじよとからみあってくれればなおよしですそれにしてもけものとたわむれるようせいさんみたいでそのかっこうたまらないですしゃしんしゃしんそうだしやしんああもうここにこれてよかったもうおなかいっぱいです！」

「……ごめん、キューちゃんが何言ってるのか全然分からない。」

何日かたって、おじ様から手紙が届いた。都から戻ってきてまだ一月もたつてないのに、もう7通目だ。筆まめだ。私が返事をしたのは3通……ごめんなさいおじ様。

「んー……写真の販売の件だって。もう作るの決定してるみたいに書いてあるけど、本当に売れるのかなあ？」

「売れる見込みがなかったら作らないから安心しな」

「写真ってどんなにするの？ 新しく撮るの？」

「芝居風の写真を撮りましょうよ。背景や衣装を用意して。撮影旅行に行くのもいいかと」

「普段の写真じゃつまらないよねえ」

「でも売れるかどうか分からないのにあまり元手がかかるのは……」

「俺、マリカ様は何も着ないのが一番いいと思うっす」

それだけは絶対拒否させてもらいます。

そんなこんなで、いつのまに誰が手配したのか写真家の人が社に来て、いろんな服を着させられ、いろんなところでポーズをつけさせられた。

ひらひらすけすけの服……というかネグリジェみたいなのがあったんだけど、それはヘルさんが破いていた。確かに着たくなかったけどよかつたんだろうか。

変わってるのでは、頭にはねこみみみたいなものと、おしりにふさふさの狐の尻尾のようなものをつけて、服も毛皮みたいなものを着た。ゲオルのコスプレなのかな。エルテくんがすっごい興奮してい

た。

笑顔のしすぎて顔が痛くなった。

私が関わったのはそれくらいなのに、いつのまにか写真が出来上がっていた模様です。

「うわああ、結構立派だねえ」

写真の種類は32枚。裏面にも綺麗な模様が入っていて、なかなか素敵なカードに仕上がっている。

「これを袋に入れて、どの写真か分からないようにして売るんです」

トレーディングカードかあ……。そんなに集めたくなくなるようなもののかなあ、私の写真が。すごく不安になってきた。

「なんだこれは」

ヘルさんの眉間にすごい皺が寄っている。持つてる写真を除きこんでみると、都に行つたときのおじ様推薦の布の面積の少ない服をきている私が写っていた。これはあのとときの写真だろうか。いつの間撮ったんだろう。ぼんやりと座っていて足がまるみえ……。目線が外れていて、隠し撮りっぽい……。

「うひあー！ だめだよこんなの！」

ヘルさんの手から奪い取って胸に押し付けた。

「当たり前なので。普段のマリカ様の写真も一枚入れたいってことでいくつか見せた中からこれが選ばれたんです」

キューちゃんがさらっとそんなことを言っつて、するっと隠した写真を取られた。普段こんな格好してないよ！

えー、結論から言いますと。すっごい売れたそうです。特にあの面積の少ない服を着た、当たりの写真は、収集家の間で高値で取引されてるそうです。あと、獣服はゲオルの人に大人気らしい。

……大事になっちゃったなあ……。

「社を出て自立します」

私は宣言した。

「どこにいく？」

「自立って、何をどうするか考えてるのかい？」

「どこまでもお供するっす」

「ええと……この前売った写真のお金で、どこかにお店を作りたい……です」

写真のお金はかなりたくさんもらえたみたいだけど、一時的な収入だ。金額を言われてもぴんとこなかったもので、どのくらいの価値かと聞いたたら家を買うくらいのことだったので、お店を作ろうと思いついたので。

何のお店かといったら、喫茶店です。喫茶店でコーヒーを入れながら、たまにくるお客さんとお話したり。実は私の憧れの職業だ。

「何を売る店なんだ？」

「あのね、あのね、喫茶店！」

「……マリカはそこで何をするんだ」

「こっちにはないのかなあ。飲み物とか、軽めの食べ物を用意するお店なんだよ」

「マリカがそれを用意するのか？」

「うん。……ちゃんと、これから練習するよ」

ヘルさんが心配そうに聞いてくる。それでも色々考えてるから大丈夫なのです。

「写真が売れたからね、実際見たいなっつて人とか、いると思うの。だから、そういう人たちが、お客さんで来てくれるんじゃないかなっつて。そういう人にね、飲み物とか買ってもらっつて、素敵なお店だつたらそのうち、私を見に来るんじゃないやなくて飲み物を飲みに来てくれるんじゃないかなっつて思う。だから、飽きられても大丈夫！」

この計画は結構自信がある。話し切つて、皆……と言つてもヘルさんクイさんエルテクんの3人だけなんだけど、その人たちを見回した。

皆さんぽかーんと、そう、ぽかーんとか言い様のないお顔をしている。あれー……？

「だめ？」

「……いやー、駄目って言つか……。いや、マリカがやりたいなら、手配はするけど……。危ないんじゃないか？ 多分ものすごい人数が押しかけて来るよ」

クイさんが困り顔で言う。お客さんが来るのはいいことじゃないか。

「物珍しさにきたお客さんをどれだけ取り込めるかがカギなんだよ」「マリカがつくつた料理を出すわけだろ？ 物珍しいどころじゃないだろう」

「じゃあ誰かに作ってもらつて、私はお客さんに出す係り」

「駄目だそんなことをしたら他のやつらに触られる」

「そういふお店じゃないよ！ 健全な喫茶店だよ！」

ヘルさんは何か勘違いしている。キャバクラ？ みたいなのを想像してるに違いない。いつもえっちなことばかり考えて不健全だ。

「でも警備の問題もあるから……考え直したほうが」

珍しくクイさんが弱気だ。警備って言ったって、いつまでも守られて閉じこもってるだけって訳にもいかない。それに、そこもちゃんと考えてある。

「お店ができたら、エルテくんを警備員として雇えるし」

「え、俺ですか？ 今でも俺、マリカさま専属護衛のつもりですよ」「うん。エルテくんいつもありがとー」

エルテくんはどこに行くにもついてきて、部屋の中に入らないでねってときはドアの外で待っていてくれるのだ。なかなかの忠犬っぷりだ。頭をなでなでしてあげる。とっても嬉しそうだ。可愛い。

「あー。あー……マリカ。ちょーっと、色々各所に相談しないとけないから……その件はしばらく保留にさせてくれないか」

「うん。どこにお店を開くかとか、いろいろあるよね。海の近くとかいいなあ〜」

波音がBGMの喫茶店なんて、素敵だよねー。

お店を作る宣言をしてから何日かたった。エルテくんに乗っかって遊んでいたところ、クイさんとヘルさんが真面目な顔で話しかけてきた。

「マリカ、店を作る話なんだけど」
「うん」

エルテくんから降りて、でっかいクッションに座る。目の前に3人も座った。

「やっぱり不特定多数の人間がくる店は危険が多すぎる。予約制の食堂にしたらどうだろう」

「えー……。うーん、食堂？ そんなに立派な料理は作れないよ。それに、予約するほど人が来るかなあ」

「山ほど来るよ！ それに、料理人を雇えばいいだろ。マリカは挨拶に出てくるくらいで十分だよ。ほら、この前都に行って会食があったときも、皆喜んでただろう。マリカに会いたいやつらは多いんだよ」

「えー……。挨拶するだけじゃあんまり仕事って感じがしないし……」

「立派な仕事だよ」

立派じゃないと思う。私の挨拶なんておもしろくもありがたくもない。

「喫茶店はどうしても駄目？」

危ないって言うけど、会ったことのある人は皆優しかった。都でも騒ぎになるとか言われたけど、市場の人ごみでも何も起こらなかったのに。考えすぎじゃないかなあ。

「……………どうしてもやりたい？」

「うーん……………うん」

クイさんがちょっと険しい顔で念を押してくる。どうしても、って訳じゃない。自分で色々考えてすっかりやる気で夢見てたから、捨てがたいだけなのかも。ちょっと意地になってたところもあったけど、私は頷いた。

「それだったら、翻訳具は返さないといけないけど……………それでもできるかい？ 話す方はだいぶ上手くなっただけど、読み書きは不十分だ。店を切り盛りできるほどじゃないだろ」

まさか翻訳力チューシャがなくなるとは思っても見なかった。確かにかなりの貴重品だって事は聞いてたけど……………。

「世界にひとつしかないんだ。ろくな守りもない場所に置いて置けない」

シヨツクだ。今までの警備の人が私じゃなくて翻訳力チューシャを守ってたってことなんじゃないだろうか。そりゃあたしかに、不相应なほどよくしてもらってるとは思ってたけど、私を大事にしてくれているのかと思ってた。涙が浮かんできた。

「な、泣くほど嫌なら、さっき言ったような店にすればいいだろ。そうすれば別に返す必要もないんだし……………ああ、もう、嫌な役目は全部あたしにおしつけやがって！」

6 (前書き)

ガールズラブ？です。

「まあ、そういうわけだ。マリカが危なくないように言ってるんだからね。それはわかってくれ」

「マリカは小さいし可愛いし美味しそうで可愛いから変質者に目をつけられて攫われてしまう。だから、少し不便だろうが、安全を考えて欲しい」

「……うん、わかった。さっきのでもいいよ」

殴り合ったら気が済んだのか、二人揃って諭されてしまった。我俣だという自覚もあったので、頷く。私の願いをかなえようとしてくれているのは確かなわけだし。

その日の夜は珍しくクイさんと一緒に寝ることになった。いつものまにか、さっきのケンカが添い寝をかけた勝負になっていたらしい。抱きついて、収まりのいい場所を探る。ほんとになんていうか遅しいなあ……女の人なのに。胸板ってヤツですなあ、女の人なのに。

「赤ん坊みたいだね、マリカって」

笑いながら、私の胸を掴む。何故？ さりげなく指を掴んで退けようとするけど、お構いなしでぶにぶにもんでいる。なにやら危険を感じる。

「ほんとに、柔らかくて……うまそう」

「お、おおお、怒られちゃうからかじるの駄目だよ！」

跡がついたらヘルさんにまたえらい目に合わされる。

「……あたしはさ、マリカの相手を出来るのはヘルベルクランくらいだろうと思ってたんだ。でも今はエルテもいるし……それに、あたしがやったっていいわけだよな」

「相手？　ってなにを？」

「あたしとあいつと、どっちがいいか。マリカが決めてくれよ」

「どっちって……選べないよ。どうしてそんな話になるの？」

二人とも大事だ。なんだか真面目な話のようだが、体中をなでなでぶにぶにされていては気が散って真剣になれない。

「だからさ、これから試すんだよ。どっちがいいか」

「試す？」

にっこり笑顔でクイさんはあらぬところをさわっ

「な、なななな、なにしてっ、クイさん女の人でしょ！？」

「そうだよ。そんなに男に見えるのかい？」

「い、いや、女の人には見えないけど、なんでそんなこと」

「だから、試してみるんだって」

「いや、あの、あの、わ、わたし、結婚してるし！　不倫は駄目だよ！」

「あたしは気にしないよ」

私が気になるんです。

「じゃあマリカがあたしの嫁になればいいじゃないか」

「女の人はお嫁さんになれな……じゃなくて、なれるけど、お嫁さんはもらえないよ！　それに結婚は一人としかできないんだよ！」

「ふーん。マリカの所ではそうなんだね。大丈夫、ここでは妻も夫

もたくさんいても問題ないんだよ」

なんですとー！

結論です。お嫁さんができました。浮気？ 重婚？
いいえ旦那様とお嫁さんがいるだけです！

番外 エルテくんのお風呂

マリカさまは、綺麗好きです。

「エルテくん、お風呂に入ろう」

「俺、濡れるの嫌いで」

「マリカの言うことが聞けないのか奴隷の癖に」

ヘルベルクランさんキライです。毎日なんて入る必要ないと思うんですけどね。今まで月1回だったけど、問題なかったですよー。あ、ユオーさんはしょっちゅう入ってましたけど。マリカさまと話が合いそうっすね。

「洗ってあげるよー。大丈夫、気持ちいいよ」

そこまで言われたら行かないわけにはいかないっす。マリカ様に気持ちよくしてもらってくるっす。マリカさまはだが、マリカさまのはだけー。

と思ったら、服は着たままだっす。チツ。足や腕はでてるけど。

しかも従者のお二人もついてくるし。本当にこの二人マリカさまにべったりで俺が可愛がってもらってると殺気を向けてくるし邪魔でしかたないっす。

「まずは体を洗おうね。届かないから、床にごろんしようね」

マリカさまって俺のこと子どもだと思ってるんですかね。まあ楽

しそうなんでいいんですけど。

伏せると桶で湯をすくってざばざばかけられて、水気を飛ばしたくて仕方がないのを必死で我慢。石鹸を泡立てて背中をもしよもしよされてるんですけど、マリカさまの手が小さすぎて時間がかかって仕方がないっすね。伏せてるんで見えないのが残念です。

「手伝おうか？」

「うん。体が大きいから大変だね。早くしないと風邪引いちゃう」

クイグインネさんがざくざく洗ってくれたっす。手がでかいんで早いっすねー。

その間にマリカさまが頭を洗ってくれました。

「目は閉じててね。石鹸はいつたら痛いからね」

マリカさまは優しいっす。

全身泡まみれになったのを洗い流して、風呂は終了。身震いして水気を飛ばすと、マリカさまがきやあきやあ喜んでました。

「もー、濡れちゃったよ」

毛先からしずくを垂らしながらも、ニコニコして楽しそうっす。よかったっす。

「じゃあ、後は湯船につかるうね」

風呂終わってなかったっす。入りたくないんですけど……。ためらっていると殺気が飛んできました。入れて事ですよ、わかっます。

「気持ちいいね」

「あー……そうっすね」

マリカさまは湯船の外から手を伸ばして、嬉しそうに笑顔を浮かべながら額を撫でてくれます。でもちよつと熱いんですよね。ハアア舌を出しちゃいましたよ。

「かわいいなー」

喜んでもらえて嬉しいっす。でもそろそろあがっていいですか。

「ごめんね、熱すぎた？ 次はもつちよつと温度下げてもらっからね」

ぐてーっとな寝そべる俺に、マリカさまはシヨンボリしつつもちわわで扇いでくれました。

次もあるんすね……もちろん、嫌じゃないですよ。俺、マリカさまの奴隷ですから。何でもいうこと聞きますよ。だから殺気はやめてほしいっす。

すごかった。何がすごいかってクイさんすごいよ。テクニシャンってやつだ。すごすぎた。女の人なのに。ああもつびっくりだ。

「マリカ？ 目が覚めた？」

「おはよー……」

だるい。全身吸われて齧られてはれぼつたい。声もかすれてる。寝転んだまま顔だけ向けて挨拶すると、満足げに微笑んでいた。

「よかつたろ？」

なにが？ なんてあほなことは聞きませんよ。昨夜のあれですよ。ね。よかつたつていうか、よかつたつていうか……すごかった。

「何か飲むかい」

「うん……」

体を起こしてコップに手を伸ばした。クイさんは私より先にコップをとって飲み物を口に含むと、私の唇をふさいで流し込んだ。こぼれないようにかぴったりと吸い付かれて、息苦しい。飲み物は冷たくて、ほんのり甘くて美味しかった。

口移しなんて、クイさんは今までしなかったのになあ……。

膝の上に乗せられ、抱きかかえられるような格好で朝ごはんを食べさせられた。ぐいぐいと口に食べ物が入り込まれる。いらないと声に出す暇もない。

「マリカは体力がないね。しっかり食べないと」

「もひらはい」

「ん？ なにがいったって？」

もういらないますううう！

食べ過ぎておなかが出ている。そういうときに限って、着ているのはへそだし。全身につけられた赤い跡もまるみえ。いつぞやおじ様にもらった布キレのような服だ。

いつものぐるぐる巻く服は、以前より薄い布を使い、少し露出の多い巻き方になっていて、そこまで暑くはなかったけど、暑がりのクイさんからすれば気になるようだ。

今はここは夏らしい。とはいっても、高原の夏っぽいさわやかさだ。

「暑いんだからこういのでいいんだよ」

「うん……でも跡がみえちゃう」

「いいじゃないか。飾りみたいで綺麗だよ」

そんなわけがあるか。あとでヘルさんに着替えさせてもらおう。ああ、でも跡つけられて怒られるかも……いやでもこういうことになったのもヘルさんが公認してたみたいだし……っっていうか妻が女の人とはいえ他の人にあんなことをされるのに平気でむしる認めちゃう夫ってどうなの。多夫多妻みたいだからそこらへんは気にならないのかもしれないけど……。それはおいといてもどっちがいいか確かめるためとかゲーム感覚だし。むかむか腹が立ってきた。

「マリカ！」

抱っこされて寝室を出ると、すぐにヘルさんが寄って来た。怖い

顔をしている。ぷいと顔を背ける。

「こんなにこんなに跡が……体中真っ赤に……こんなに肌を見せて……早くこっちによこせ」

「マリカ、あたしとヘルベルクラン、どっちがよかった？ あたしだよ」

そんな話を大声で言わないで欲しい。警備の人やエルテくんも近くにいるのに。

「しらない！ 降ろして、エルテくんにのせてもらおう」

降ろしてもらってエルテくんの背中に跨ってしがみつく。ふこふこの毛皮にすっかりつかまって顔を押し付ける。

「マリカさまー。どこいきますか？」

「……おそといきたい」

「はい」

うきうきとしたエルテくんとは対照的に、私はむしゃくしゃした気持ちを抱えていた。

「なにしたんだ。機嫌が悪いぞ」

「あたしはちゃんと気持ちよくさせたよ。いい反応してたよ。ヘルベルクランに触られるのが嫌になったんじゃないのか」

「なんで私がマリカに嫌われるんだそんなことがあるわけないだろう。私のときはいつも泣いて喜んで可愛い声で鳴くんだ」

「ふーん……へえ」

「大体どうやってやったんだ」

「参考にしたいのか？ いいよ、見ても」

「ふざけるなお前こそ私のやり方を見て参考にしろ」

「もー！ー！ー！ どうしてそういつこというのー！」

私は恥ずかしさのあまり叫んだ。見られるのなんて嫌に決まっている。

頭から髪飾りをむしりとって、べしと二人にたたきつけた。

「かえす。ついてこないで！ エルテ、いく」

「はい」

ぎゅっと強くしがみつくと、エルテくんは走り始めた。後ろで声がかかるけど知らない。もう知らない。どうせ翻訳力チューシャがなければ警備の人だって要らないんだ。このまま遠くにいつてやるっ！

走り続けて、その間落とされないように必死でつかまっていた。手がしびれて握力がなくなってきた。

「エ、エルテ、とまる。うで、つかえない」

「大丈夫？」

すぐに止まってくれたので、背中から落ちるように地面に降りて、ぺたんと座り込んだ。エルテくんはすぐ隣に伏せをしている。

「とおく、きたね。ちいさい、やしろ」

「うん。はなれた、どこ、いく」

こうして翻訳力チューシャがまったく使えないとなると、間違っていないかと不安になる。それを頭を振って追い払う。

遠くに小さく社が見えて、今のところ誰もついていきていない。私がついてくるなといったからなのか、ただ追いついていないだけなのかは分からないけど。

「マリカさま、ここちがう、だく、いい？」

エルテくんは私を抱き上げると、あたりを見回して、2本足で走り始めた。胸にしがみつく。毛皮って暑いなあ。

大きな岩に近づいて、その影に降ろしてくれた。少し涼しい。

「ありがとう」

日向じゃ暑いから移動してくれたらしい。気が利く子だ。

「どうしたー？」

隣にお座りして首をちょいと傾けている。こうしてみると本当にわんこだ。わんこと話せる世界、なんて素敵だろう。

「マリカさま、願い、どこでもいく。だけど、いますぐ、みんな、しんぱい」

私が望むならどこへでも連れて行ってくれるけど、今すぐに行くのは皆が心配するから駄目だといってるんだろう。

わんこに諭された。

「ヘルとクイ、はずかしいこと、はなす。いやだ。

わたし、まえいたところ、すきなひと、おおくない。んー……つがい、ひとりだけ。ここちがう。いっぱい。なれない。いやだ」

ぼつぼつと喋る。つたなすぎて通じているかは分からないけど、じつと静かに聴いてくれるので、落ち着いてきた。

スキンシップが激しいくらいならまあ、許容範囲だけど、旦那さん以外の人はやっぱりちよつと抵抗が……。でもそういうものなら、気にするのは私ひとりで騒いだって仕方ないし……。

「マリカさま、おれの、つがい、なる？ おれ、ひとり、じゅうぶん」

ええと、エルテくんは、私一人だけをつがいにしてくれると、言ってるわけだ。びっくりした。プロポーズだ。

嬉しい。嬉しいけど……犬だしなあ……。

「ありがとう。だけど……」

困った。はっきり言ってしまっていていいものだろうか。犬はムリ……ペットだから……ううん。どっちもひどい気がする。

「きた。にげる？」

はっとして顔を上げてあたりを見回す。社のほうから何かがやってくる。浮遊艇？

「……ううん。まつ」

いくらエルテくんの足が速くても、すぐ追いつけれちゃうだろうし、なんだか落ち着いてしまったので、その場で迎えがくるのを待った。……迎えだね？ もしかして翻訳力チューシャが壊れてたりして、壊した犯人として追われているんだったり……。いや、でも私を傷つけるようなことはないはずだ。

すこし怖くなってエルテくんにしがみついた。周りを浮遊艇で囲まれてるのに、エルテくんは余裕だ。たのもしい。

「マリカ」

ヘルさんが降りてきて、近づいてくる。結構落ち着いている。エルテくんにしがみついた手を、優しくも強引に引き剥がして、私を腕に抱えた。

初めての家出はこうして終わった。

社に戻り、部屋でようやくヘルさんの腕から離れてクッションに座った。ここまで会話は一切ない。無言怖いです。ヘルさんはなにやら紐を取り出して、私の首に巻きつけた。

「なに、してる？」

びくびくしながらも聞いてみた。

「首輪つける。マリカ、よそ、いかない」

怖いくらい真面目だ。首輪つて。たしかに長いリードが伸びてるけど。私犬じゃないよ。

それから恭しく翻訳カチューシャを私の頭に付ける。壊れていなかったらしい。ほっとした。リードをしっかりと手首に巻きつけてすこし離れたところにクイさんと並んで座った。エルテくんはクイさんに首をつかまれて地面に押さえつけられている。可愛そうだ。そんなふうにするよりも、エルテくんに首輪を着けたらいいんじゃないだろうか。

「エルテくん、離して……」

「いいんだよ。しつだけだから。マリカを連れ出すなんて何考えてるんだか」

「わ、わたしが頼んだの」

クイさんが獰猛な笑顔を見せている。怖い。私涙目。

「ごめんよ、マリカ。この前あたしが翻訳具を返してもらわなきゃ

いけなくなるとかいったから、気にしてたんだろ。それはマリカのものだから、好きに使っていいんだ。おかしいことって悪かったね」

謝られている。怖い。

「マリカは恥ずかしがり屋だからあのときの話をされるのは嫌なんだな。悪かった。私もマリカの可愛い様子を知られるのは嫌だ。他のやつらに見せたのかと思うと正気でいられなかった。もう言わない。許して欲しい」

それなら最初から勝負なんてしなければいいのに。

「それはそれとして、あんな風に社を出て行ったら危ないだろう。落ち着くまで紐はつけたままにいるんだよ」

ええー……。こんなを着けてるなんて、人としてどうなの。

「あたしはちょっとエルテに話があるから。マリカはゆっくり休みな」

クイさんはエルテくんの首を鷲づかみにして、引きずって出ていった。苦しそうな音が出ていた。

「エ、エルテくん………！」

立ち上がって追いかけてようとしたけど、首輪から伸びた紐がぴんと張って苦しい。無理に進めば首が千切れてしまう。

「ヘルさんこれとって」

「駄目」

却下された。抱き寄せられて、ヘルさんのおなかに私の顔が押し付けられる。身動きできない。

「また出て行くつもりか。ここを出て一人で生きていけるのか。このあたりは獣も出るし、小さくて美味しそうなマリカじゃすぐ食われて終わりだ」

「エルテくんがいたもん……」

「アレか。マリカを危険な目にあわせるようなのはいらぬ。捨ててやる」

「だめ！」

「アレがそんなに大事か」

地獄の底から這い上がるかのような怨念に満ちた恐ろしさ。ここを出た原因はヘルさんにだってあるはずだ。なんでこんなに怖い思いをしなきゃいけないのか。

「ヘルさんたちがいけないの！ 私の体で遊ばないでっ」

「あそんではいな」

「ああいうのは好きな人としかないものなんだから！ こっちじやアソビ感覚なのかもしれぬけど私は違っただからね！」

べしべしヘルさんを叩きながら泣き喚く。まったくダメージを受けた様子がないところが非常にむかむかする。私の手は痛いのに。

「したくなかったのか？」

「あたりまえだよ」

「気持ちよかつたんだらう？」

「そついう問題じゃないの」

「どっちがよかった？」

「もうその話しないっていった」

「ああ……そうだった」

脇に手を入れて持ち上げられ、たたされる。べろべろ顔中舐められて、綺麗になったところで、膝の上に座らされた。

「つまり、私以外とはしたくないってことか」

「なんだか満足げだ。むき出しになった肌をなでなでされている。なぜ 今日に限ってこんなに露出度の高い服なんだろう。」

「わ、私が他の人とそうなるのは、嫌なの？」

「もちろん。マリカを独占できるものなら独占したいが、マリカがあんまり魅力的だから無理だと思っていた。しかしマリカがその気なら問題ない。マリカのすべては私のものということでもいいんだね」

「優しくて、甘い声色なのに、何故だろうちょっと寒気が。ここでウンと言ったら一生この腕に囲われたまま外に出られないような気がする。」

「誰か助けて、と思ったけど誰もいなかった。」

おはようございます。寝るときに首輪は辛い、これじゃ眠れないと訴えた結果、足首につながれました。紐はベッドの柱にしっかりと縛り付けられています。

私の体はヘルさんの腕ですっぱり囲まれている。重くはないけどぴったりくっついていて寝返りすら打てず、大変寝苦しい。もぞもぞしていたらどうやら目を覚まさせてしまったらしい。少し眠そうな声で名前を呼ばれた。

「マリカ……？ もう起きるのか？」

「う、うん。寝てていいよ」

この状態じゃどうせよく眠れない。私を放してくれれば寝ていてくれてかまわないのに、ヘルさんも起きるようだ。毎朝恒例のおはようのちゅーをすませて……すま……す、ま……今日は長い。舐めたりすったり朝から元気だ。寝不足と酸欠でいつもより余計にふらふらする。

ぐったりしていると、もう少し寝ているといいとか言われて、したら本当に寝てしまった。次に起きたら昼近かった。寝すぎた。またおはようのちゅー……いけない、無限ループ。

朝ごはんとか昼ごはんとか分からないものを食べさせてもらいながら、ぼんやりとエルテくんのことを考えていた。クイさんが連れて行ってから、二人とも見かけていないけどどうなったんだろうか。まさか勝手に捨てられてるなんて……。

「エルテくんは？」

不安になって聞いてみると、ヘルさんの目つきが少し剣呑になった。本当に犬嫌いである。仲良くして欲しい。

「あれがそんなに気になる？」

「私が、ちゃんと世話するって、それで置いてもらってるから」

「クイグインネがやってるから問題ない」

「でもね、でも、エルテくんは……私の……」

なんだろう。ペット？ まあそうかもしれないけど、もうちょっと違う感じ。そういえばプロポーズもされたんだっけなあ。恋人とは思えないし、でも大切にしたい感じ。……そうだ。

これだ、と思って顔を上げると、ヘルさんのお顔が怖かった。ちよつとびくついてしまった。

「あれは、マリカの、なんだ？」

「ともだち！ おともだちです！」

仲良くしたい、大事なお友達ではないかと。ああ、よかった、お顔がちよつと柔らかくなった。ここではあまり人と関わらないでよかったか、あまりお友達といえる存在ができなかった。エルテくんは、多分若いんだと思うけど口調も気軽に親しみやすいのだ。

これからお店を始めたら、友達もたくさんできるのかな。

「町で暮らすようになったら、皆と仲良くしたいな。楽しみ」

「まだ店をやるつもりだったのか」

「え……うん。だめになっちゃったの？」

すぐ逃げ出すような子は危なくて町には連れて行けないということだろうか。まあ足輪に紐つけられている状態じゃ町へいくのは難しいだろうけど。この足輪、いつになったらはずしてくれるのかな。

「……私と二人きりが言いとっていたのに」

すねていらっしやる。ここはひとつ気合を入れて説得しなければ。

「ヘルさんは旦那様でしょ。友達とは違っただよ」

何が心に響いたのかは分からないけど、その日はベッドから出られなかった。

ようやく足輪がはずされた。足輪をつけてるところが擦れて傷になってたからね。ちよつとだけなんだけど。傷はもちろん舐められた。

3日ぶりくらいで部屋を出て、クイさんとエルテくんに出会った。エルテくんは少しほこりっぽくなってて、あのふかふかな毛が少しへたっている。

「エルテくん、ちよつと……ほこりっぽいよ。あとでお風呂はいるうっ?」

エルテくんはお風呂が好きだ。いつも入れるとつとりしてて可愛い。それなのに、入れてもらえなかったんだろうか。

「はいっ、了解っす!」

びしつと背を伸ばして、張りのある声を上げた。会えない間どうしてたか心配だったけど、どうやら元気に過ごしていたらしい。

すこしべたつく毛をなでなでしていたら、それを振り切るかのようにクイさんにぎゅーぎゅー抱きしめられて、すりすりされた。そういうのはヘルさんひとりでお釣りが来るほど間に合ってるのですが。

「久しぶりだね、マリカ。3日も閉じ込められて可愛そうに。いくらなんでも長すぎるよ。退屈だったろう。何してたんだ?」

「本を読んだり、言葉の勉強したりしてたよ」

「あたしもマリカと二人つきりでイチャイチャ過ごしたい。なんでヘルベルクランが独占するんだ。あたしだって従者なのに。おかし

いよ。これから3日はあたしと過ごしてくれるよね、マリカ」

あれー。なんだかクイさん様子がおかしい気がする。すごくギラギラしてらっしゃるような。腕をつかまれて、見てみるとヘルさんが険しい顔をしていた。

「クイグインネ、お前発情してるだろう」

「あたしが？ ……ああ、少しはしてるかもね。前兆があったし。でも相手もないし、元からあまり反応しないんだ、平気だよ」

「どこが反応してないだ。マリカから離れる」

「なんでそんなことを指図されなきゃいけないんだ」

「気づかないのか？ お前、マリカに発情してるじゃないか」

なんだか二人で険悪な雰囲気だ。二人につかまれ、引つ張られて体が少し痛いです。はつじょう……私に、ですか。クイさんとはごによごによして、まあそういう仲であるといえなくもないけど、こうなった場合私から積極的に仕掛けることになるのだろうか。できますかね。

「……なるほど」

沈黙の後、クイさんはため息と共にそういった。

「そうかもしれない。こんな風になったのは初めてだ。相性のいい相手を探せって、こういうことか」

「駄目だ。マリカは私のものだ」

「マリカは、お前のものじゃないよ。マリカ自身のものだ」

おおっ……クイさんいいことを言う。そうだそうだ。ヘルさんは旦那様だからってちょっと横暴だ。もっと言っちゃえ！

「マリカが望まないことは、しないよ。ヘルベルクランだけがいいと心から思うなら、それでもいい。でも、本当に？ あたしが、マリカに触れたのは、本当に、嫌だったのかい？」

「え、えええー、うーん……」

「マリカは私以外とは嫌だと言った」

「ヘルベルクランはだまつてる」

二人の間で緊張感が漂っている。見えない火花が飛び散っているようです。私をはさんでにらみ合い。はらはらするのでやめてほしい。

うーん、うーん。私が何か言うまでこの状態は続くんだろうか。エルテくんをちらりと見ると、姿勢よくたっていて、ぴくりともしていない。ゆるぎない。なんてたのもしい。

「あのー……誰彼かまわずっていうのはもちろん嫌だよ。私を取り合うとか、そういう景品がわりとか、ゲームに使われるのも嫌。あの、でも、好きあって、そうなるなら、いいかなって。アレの話とか、人に知られるのも、嫌だから、そういうのも、やめてほしいけど……」。

クイさんのことは好き。女の人同士でそういう関係って考えたこともなかったからよくわからないけど、こっちではそういうのもあることならいいんじゃないかな。恋人が複数つてのは、だいぶ抵抗があるんだけど……そういうもの、なんだよね？」

ヘルさんに閉じ込められて過ごすより、複数恋人がいるほうがましな気がする。

「あ、あ、でもでも、あの、ヘルさんも好きだよ！ 一番好き！」

つかまれた腕が折れるかと思った。きつと恐ろしい顔をしていると思うからみないよ、私は。

「マリカ……あたしが側にいることを、許してくれるかい？」
「うん。いいよ」

クイさんは真面目な顔をしていた。私も重々しく了承しようと思っただけ、なんだか軽い言葉しか出なかった。それでも嬉しそうな顔をしてくれたからいいか。

さて、ヘルさんはどうしようか。

「俺も、マリカさまとずっと、一緒って約束したっす」
「うん！ エルテくんも……」

あれ。あれあれ。一緒にいようってのは、プロポーズ的な言葉なんだよね。エルテくんに、私から、言ったような気がする。

このまえの、逃亡時のエルテくんのプロポーズをどうするかで悩んでたけど、それ以前に私からしていたと思われてたりして？ もうすでに結婚していると思われてるんだっけ？ それじゃああのときの言葉は、俺だけにしておけよみたいな？

結婚相手が、いつのまにか3人になってた。迂闊なことがいえない怖い世界にきてしまったと痛感した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7348s/>

世界の寵児

2011年7月16日13時37分発行